山ざくら

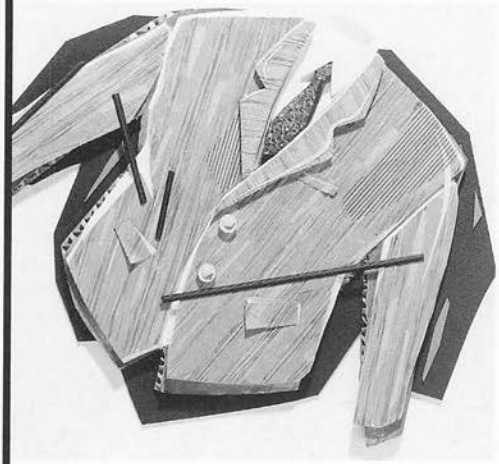
第21号　平成2年6月

関東氷上郷友会

おもわず　新しい

スーツにネクタイ
暮らしにネクスタ

海を越え、時間を超えて、東奔西走。
きわめてハードで、ドラスティックなビジネスシーンの主人公たちは、いつもスタイリッシュ。
ビジネス同様、優れたファッションセンスによって、さらに魅力がほとばしります。
そして暮らしのシーンにも、装いは不可欠です。
いつもたのしく、快適に、そして豊かに。
毎日が新鮮で、充実するよう、暮らしを彩る。
そんな彩りを次々と生み出していく集団。
それがネクスタです。"NEXT"にAをプラス。つまり、次々にAクラスの新しい技術やモノを提案していく、という願いと意志を込めた名前で出発します。
決して華美ではなく、安易な流行に走らず、確たる存在感を深くたたえながら、爽やかなシーンをつくりだす。
ネクスタは、いつもあなたの暮らしの中にあります。



NEXT A

長年にわたって、紙袋、ショッピングバッグ、各種包材等の商品、サービスを提供してきた渡辺紙工業株式会社、渡辺製袋株式会社の"NEXT"は、ネクスタ株式会社、ネクスタラッピイ株式会社、ネクスタパッケイ株式会社。
暮らしがいつも心ときめくよう、フレッシュさであふれるよう、「おもわず　新しい」を私たちのメッセージとして、4月1日から、次々とAクラスの彩りを生み出していきます。

ネクスタ株式会社
ネクスタ ラッピイ株式会社
ネクスタ パッケイ株式会社
〒536 大阪市城東区今福西3-2-24　TEL06-932-7214

山ぎろ

第21号

山ざる　第21号　目次

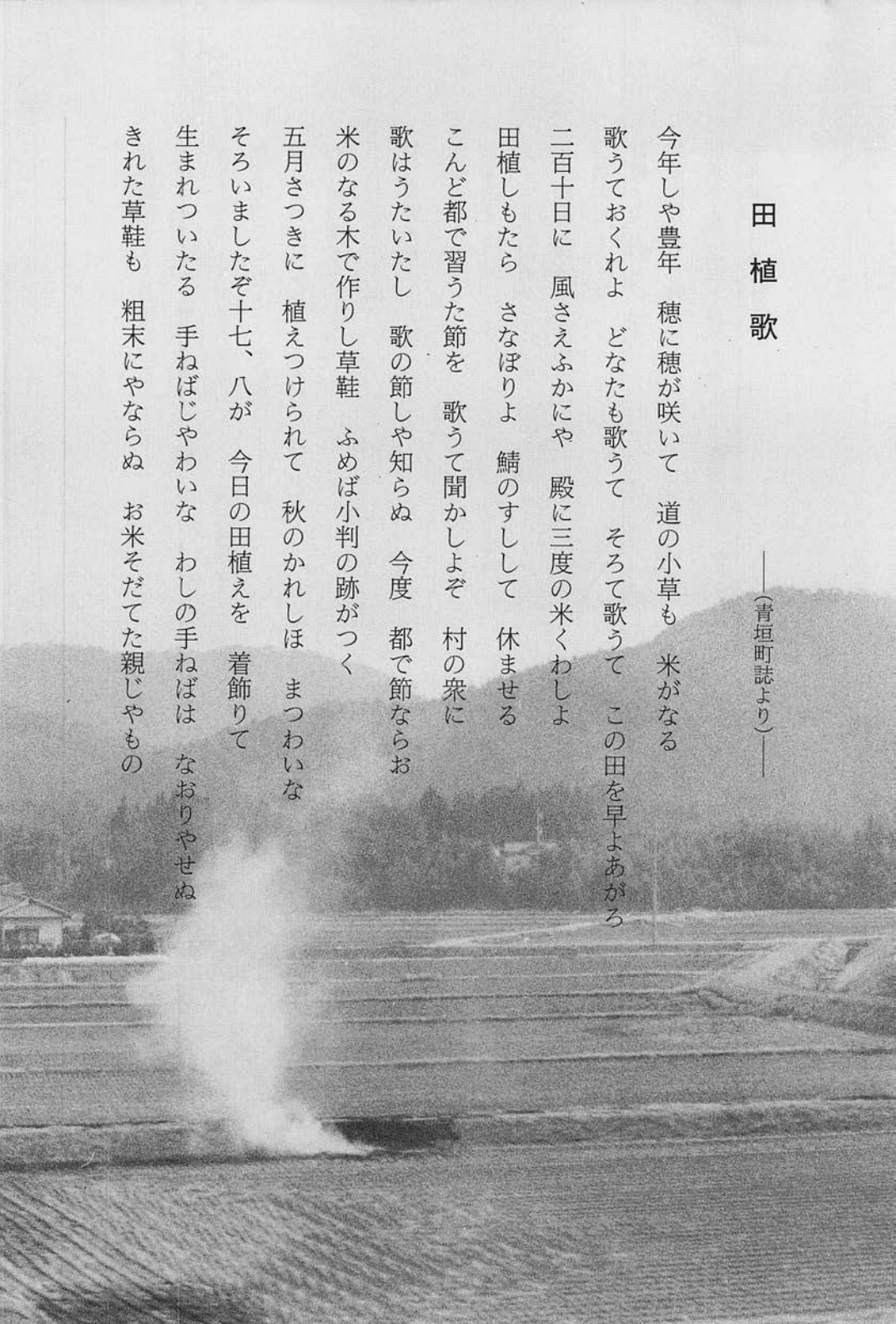
表紙絵……常岡幹彦画……昭和62年作
田植歌……青垣町史より……4
会員の交友を求めて……村上末吉……5
小谷正雄氏を名誉会長に推戴する……6
副会長に就任して……吉住重造……7
平成元年度総会・祝寿会・懇親会……9
関東氷上郷友会々則……18
日本民謡舞踊大賞に黒井踊が努力賞・奨励賞……20
総論賛成・各論反対……小田知尊……22
氷上政記……24
心のふるさと……足立誠一……43
幼き頃の思い出……大地冨美子……43
わが故郷……荻野　武……45
青春虚実……田中篤郎……48
家移りざんげ……足立順治……53
故郷大新屋と高見城……谷垣正雄……61

還暦雑感……前田和市……64
土漠ゴルフ……岡林逸男……66
ポルトガル・スペインを旅して……秋元多美子……67
原子力開発と私……水船隆昌……68
クラス会のはなし……木村つた江……71
'89丹波の動き……73
会計報告……85
寄付者芳名録……86
出版……86
展覧会……87
氷上ゴルフ会報告……87
氷上囲碁会報告……88
会員消息……88
訃報……93
協賛広告……94
関東氷上郷友会・会員名簿……巻末
編集後記……160

田植歌

――（青垣町誌より）――

今年しや豊年　穂に穂が咲いて　道の小草も　米がなる
歌うておくれよ　どなたも歌うて　そろて歌うて　この田を早よあがろ
二百十日に　風さえふかにや　殿に三度の米くわしよ
田植しもたら　さなぼりよ　鯖のすししして　休ませる
こんど都で習うた節を　歌うて聞かしよぞ　村の衆に
歌はうたいたし　歌の節しや知らぬ　今度　都で節ならお
米のなる木で作りし草鞋　ふめば小判の跡がつく
五月さつきに　植えつけられて　秋のかれしほ　まつわいな
そろいましたぞ十七、八が　今日の田植えを　着飾りて
生まれついたる　手ねばじやわいな　わしの手ねばは　なおりやせぬ
きれた草鞋も　粗末にやならぬ　お米そだてた親じやもの



会員の交友を求めて

会長　村上末吉

「山ざる」第二十一号の発刊に際し、一言ご挨拶申し上げます。

会員の皆様にはお元気でご活躍のことと拝察し、お喜び申し上げます。当会がお陰をもちまして、順調に推移しておりますことは、役員並びに会員各位のご協力によるものであり、ご同慶の至りです。昨年の総会も例年通り九段会館で開催されましたが、八十名以上の出席を得て、盛大裡に交友を温める機会となったことがそれを証明しております。

世界は今、激動の波が漂よい、不安と不確実な社会に突入した感があり、日本も決してその波の外にいるという境遇ではないようです。マスコミ等でよくご存知の通り、一九九〇年代はこうなるという予想が乱発しており、金持ち日本が謳われていますが、果して個人の身にぴったり一致する見解には一向に接しません。このような時には、同郷の友が共に腹を割って話し合う機会を多く持つことが必要でしょう。総会で年に一度だけ会うのでなく、話し合える機会をつくるようにしたいものです。

ゴルフ、碁等のグループが継承されていますが、他に俳句、スポーツ（テニス、バイシクル、水泳、スキー等）、茶の湯、絵画等の趣味グループの活躍を期待するとともに、旅行によって歴史、文化等に接することもいいことだと思います。

話しは変りますが、昨年の総会で小谷正雄氏を名誉会長に推戴することが決定いたしました。氏は今更申し述べるまでもなく、文化勲章を受章された郷土唯一の名士で、詳細は「山ざる」十二号に記載されています。

郷友会の会則によれば、名誉会長をおくことができることとなっており、もっと早くお願いすべき処、遅くなりましたが、同氏は何もできないが、それでもよろしければと快よくお受け下さいました。会員のご諒承を願いたいと思います。

最後になりましたが、来年平成三年は郷友会創立九十五周年に当たります。昭和五十九年は八十八周年として盛大に開催されてから七年を経過いたしますので、それ程盛大にはできないものの、一応のけじめとして、別の内容による盛大なイベントを企画するのも一案かと思っております。何をするにしても会員の交友をより深く、厚くすることが目的であるべきだと思っております。

小谷正雄氏を名誉会長に推戴する

小谷正雄氏を関東氷上郷友会の名誉会長として、平成元年の総会において、万場一致でご推戴申しあげましたことは、ご出席の皆様にはご了解ずみですが、他の方々にはここで改めて、ご諒承を得たい次第です。

同氏はご高齢にも拘らず現在尚ご多忙ですので、郷友会の会合等には必ずしも出席はできない、会員の皆様に対し、却ってご迷惑をお掛けするのは本意でないとの同氏に対し、是非にとお願いしたかたちとなり、恐縮に思っております。

小谷氏は今更ご紹介するまでもなく多くの業績と功労を尽された方ですが、ここに改めて列記させて頂きます。

小谷正雄氏経歴　物理学者、一九〇六年（明治三十九年）一月柏原町に生まれ、二九年東大理学部物理学科卒業後、同大学工学部講師、理学部助教授を経て、四十四年教授、四十五年宮内庁御用掛として皇太子教育にあたる。東京理科大学総合研究所顧問、東京理科大学名誉教授・元学長、東京大学名誉教授、理学博士。現在は日本学士院会員。褒賞等では、日本学士院賞（昭二十三年）「電磁管の発振機構と立体回路の理論的共同研究」、東レ科学技術賞（昭四十一年）、「分子構造の量子力学的理論」、第十六回藤原賞（昭四十九年）、「分子物理学および生物物理学の基礎的研究」、勲二等旭日重光章（昭五十一年）、文化功労者（昭五十二年）、文化勲章（昭五十五年）があり、原子、分子の量子力学、磁電管の理論、配位場の理論、生体高分子の研究など広い分野にわたり輝かしい業績を挙げ、湯川秀樹、朝永振一郎博士と並び物理学界の巨人である。等が日本人名録に記載されております。

この他に列挙したい多くの業績と功労が数え切れない程おありですが、割愛させて頂きます。

郷友会の大先輩としてこのような名士を名誉会長に推戴できることは、当会にとっても名誉なことであります。

同氏は今後とも健康に留意され、一層国家、文化向上のためご尽力くださるようお祈りする次第です。郷友会としてもこの大先輩に衷心より心の応援をさしあげたいと思います。

副会長に就任して

吉住重造（春日町）

このたび、関東氷上郷友会の副会長という大役を引き受けることになったきっかけは、足立源治さんからのとつぜんのお手紙でした。病後静養中の私にかわって副会長を引き受けてくれ、というおことばでした。

私のような無学な小商人では、と思いつつも、日ごろ尊敬申し上げている足立源治さんのピンチヒッターなら引き受けざるを得ないのかと思案しているところへ、こんどは足立源治さんと田中篤郎さんがご一緒に訪ねてこられました。

田中さんの説得力のある弁舌は私の歯の立つ相手ではありません。

足立さんによって外壕を埋められ、田中さんによって内壕を埋められたところへ、村上会長からも口説かれて落城してしまいました。

郷友会は申すまでもなく、多くのすぐれた先達によって受け継がれ、百年近い伝統のある「郷土を愛する会」です。現代でも社会的地位のある方々や功成り名遂げた立派な方々の多い中で、私のようなものでは副会長の座を軽からしめるものであることを憂えております。

それに前任者よりさらに年嵩で、これは若返り時代に逆行するものです。早く新進気鋭の方に代っていただきたいと思っております。

さらに気掛りなことがあります。私は一昨年のホロンピア旅行の委員長を仰せつかりました。微力ながら半年間私なりに努力しました。郷友会員一四〇〇名に二回にわたって二八〇〇通の参加お願いの案内状を出しましたが、参加申込みは僅か三名でした。

私のために義理で参加してもらうというわけではないけれども、人間関係を大事にし、連帯感を誇る郷友会で僅か三名とは、たいへんなショックでした。こんな人望のない私で皆様のご支持が得られるだろうか、と甚だ心許なく思っております。

けれども、古里を思い、郷友会を愛する情熱だけは持っておりますので、よろしくご支援のほどお願い申しあげます。

突然でしたので抱負というほどのものはありませんが、以下に二、三、私見を述べさせていただき、ご批判を仰ぎたく存じます。

郷友会の活性化には次の二つのことが重要と考えます。一つは入会を希望する新会員を獲得すること。もう一つは現会員が行事にも参加し、会費も支払ってくれる実質的な会員になっていただくということです。

前者についていえば、いまの郷友会は郷友会イコール柏陵会の図式ができております。今後も柏原学校出の会員が増えることは大歓迎ですが、さらに氷上学校や福知山、篠山の学校などの出身者にも呼びかけたい。その他、郷里出身の在京者を調べて会員をふやしたいと考えています。どうか関東在住の未加入者をお知らせください。

とりあえず現在の役員が一人で二名ずつ新会員を紹介するというのはいかがでしょうか。これで実質会員が八十名は増えることになります。

後者についていえば、最近青年部や婦人部の構想はどうなっているのでしょうか。全く機能していないように思いますが。なんといっても実質会員を増すには郷友会の活動を魅力あるものにする必要があります。

現在同好会としてゴルフと囲碁がありますが、さらに文化的な同好会はいかがでしょうか。絵画、書道、彫刻等の美術作品を鑑賞する。あるいは文学、演劇、音楽等の芸術の観賞や体験。文化講演会、文化的遺産、歴史的遺跡の探訪、スポーツその他の文化的行事への参加や観賞、旅行、会食等です。

郷友会は高い文化をもっています。会員にはこれらの分野で活躍する著名な方も多く、文化的事業に従事する人達や造詣の深い方も多いので、これらの方々を中心に魅力ある催しを企画すれば同好の士の参加が期待できます。新進のオペラ歌手として若くして有望な方などには後援会を作って応援したいものです。

次に財政の方でも収入の増加を計ることが必要と考えます。私は会費は増額すべきだと思います。昨年の収入の部に会費のほかに寄附金として処理されたもののほとんどが会費を多く送金されたものです。増額しても会員が減ることはないでしょう。

同様に総会の会費にしても今の時代は一万円が妥当なところでしょう。

以前は生命保険の手数料収入が大きな財源でした。私は会員の中に保険関係の人がおられたら「ひかみ会」を復活してもいいと思っています。損保についても同様です。

以上の提言を郷友会に裨益するための叩き台として検討していただければ幸甚です。

私は村上会長、渡辺副会長の使い走りとして微力ですが頑張りますので、会員皆様のご指導ご協力を心からお願い申しあげます。

平成元年度総会・祝寿会・懇親会

恒例の年度総会・祝寿会、および懇親会は平成元年十一月二十五日(土)、九段会館において開催された。出席者数は約八十名とまずまずのにぎわいであったが、千四百人にのぼる会員を擁するところからすれば、せめて一割の出席を得たいものである。

まず総会では、村上会長あいさつのあと、つぎの案件が諮られ、可決承認された。

1　名誉会長選任の件

前名誉会長有田喜一氏の逝去以来、ひさしく空席になっていた名誉会長に、前東京理科大学学長・小谷正雄氏をご本人のご了解を得て推挙、満場一致で承認された。

2　副会長改選の件

昭和六十二年度より副会長をおねがいしていた足立源治氏は、健康上の理由から辞任を申し出ておられたが、これを受理し、後任として吉住重造氏（春日町出身・ノーブルスター㈱会長）を選任、満場一致で承認された。

3　会則改訂の件

かねてより会則の改訂については種々議論があるところであったが、十月二十五日、文書理事会において会長提案の改訂原案を審議、総会では、ほぼ原案通りの承認を得た。（新会則は別掲）

続いて、会計報告が足立和巳会計理事より行われ、荻野武監事の監査報告を経て承認。（バランスシートは別掲）

最後に坂上理事より会務報告があり、滞りなく総会を終了した。

引続き祝寿会に移ったが、八十歳を迎えられた次の六人の方々に村上会長からの祝寿と記念品を贈呈した。（五十音順）

芦田　坦殿、植木英吉殿、奥原　隆殿、鴻谷喜代治殿、菅野きぬゑ殿、波多洋三殿。

本年は祝寿のかたがたの欠席が多く、ご出席は波多洋三殿のみという淋しさであった。御身専一に過ごされんことをお祈りしたい。

○

懇親会では村上会長あいさつのあと、郷里からお越しいただいた安井幸太郎柏原町長、吉見文憲柏原同窓会会長、北村信次郎兵庫県東京事務所長を来賓として紹介、柏原町長より祝辞と郷里の近況報告をいただいた。

須原清氏の乾盃の音頭で宴会開始、続いて過る参議院議員選挙の比例代表区で、民社党から当選された足立良平氏の自

己紹介があり、温かいはげましの拍手を浴びた。ちなみに、足立良平氏は昭和十年十一月青垣町に生まれ、柏原高校、関西大学経済学部卒業後、関西電力に入社、労組執行委員長ほか、労働組合の要職を歴任。現在は逓信委員会、予算委員会の委員として国政に尽くされている。

また会員近況報告では、芸術のジャンルで活躍中の二人の新進を紹介した。

一人は足立さつきさん(春日町黒井出身、練馬区在住)、つぎの二期会を担うプリマドンナと嘱望されている新進の声楽家で、関東を中心に精力的な演奏活動をくりひろげている。郷里春日町黒井には早くも後援会が結成され、彼女の今後の躍進に声援を送ろうという構えである。

もう一人は漸新なセンスで注目されるイラストレーター荻野美穂子さん(市島町出身、港区在住)。雑誌のさし絵やPR誌の表紙絵など、はば広い分野で活躍して、高い評価を得ている。

懇親会の楽しみは、ひさしぶりの逢瀬に、つもる話を交わすことにとどめを刺す。旧交新交をとわず、だれはばかることなく丹波弁を駆使して、時の経つのも忘れるほどに、思い出話、友人達のうわさ話、おたがいの近況などに花が咲く。

宴もおおずめに近づくと、恒例「お楽しみプレゼント抽選会」が行われる。今年も会員有志から多くの景品を寄贈いただいて、文字通りお楽しみが倍増した。

景品及び寄贈者氏名は次の通りである。

〈山ざる賞〉

山の芋2kg	五本	関東氷上郷友会	
丹波黒大豆(布袋入)	全員	〃	

〈会員賞〉＝五十音順

婦人セーター	一本	足立	三治氏
マフラー	五本	足立	誠一氏
日高昆布	十本	足立	和巳氏
昭和メモリー	三本	池田	忍氏
日本茶	四十本	池田豪士郎氏	
パーカーボールペン	五本	生田	清弘氏
織田煮	三本	岡	吉明氏
エスカイヤウィスキー	三本	岡田	一雄氏
ひげそりクリームセット	三本	荻野	正夫氏
田舎家の香合	二本	可部美智子氏	
みそ漬	二十本	田中	篤郎氏
明治チェルシー	百二十本	鶴田ゆき子氏	
七宝焼ペンダント	十本	宮野	近氏
カメラ(フジDL60)	二本	村上	末吉氏
ボジョレーヌーボー	六本	保尾	明氏

トレーナー・ポロシャツ　各十本　吉住　重造氏
復製名画　五本　渡辺　隆男氏
なお、来賓の方々からは金一封を頂戴した。また岡田一雄氏からは、銀座のザ・トップ・クラブ・ミュージック・サルーンのお嬢さん達のナツメロ・コーラスのサービスをいただいた。特記して深く感謝申しあげる次第である。

○

平成元年度総会・祝寿会・懇親会出席者（略敬称）

◎来賓
安井幸太郎（柏原町長）　吉見文憲（柏陵同窓会長）
北村信次郎（兵庫県東京事務所長）

◎祝寿者
波多洋三（春日町）

◎一般会員（出身町別）
△青垣町（13名）
足立　治　足立和巳　足立勲平　足立源治　足立静雄
足立三治　足立多鶴子　足立良平　大竹博美　小寺確郎
小寺喜代子　堀　謙吾　安原三智子
△市島町（10名）
芦田重秋　荻野一雄　荻野美穂子　木村つた江　近藤　勇
須原　清　田中篤郎　鶴田ゆき子　森本康成　余田士郎
△柏原町（14名）
生田清弘　上村愛子　上山　顕　可部美智子、加賀山一郎
沢田みさを　瀬々妙子　常岡幹彦　出町京子　中江悦子
松本源吉　宮野　近　村上善英　吉田素子
△春日町（10名）
足立石蔵　上田脩　足立さつき　足立昌彦　木呂子恵美子
佐々木盛雄　船越祥郎　村上末吉　村上久夫　吉住重造
△山南町（9名）
池田　忍　大垣忠雄　仲　一聰　東田　實　深田浩嗣
山本紀子　依藤廣次　若森敏郎　渡辺貴美子
△氷上町（15名）
安達健一郎　安達　巧　足立順治　秋元多美子　葦田有功
上　高子　臼井小五　木呂場明子　佐藤菊子　坂上勝朗
勢　正彦　田辺泰久　谷口　捷　保尾　明　渡辺隆男
△篠山町（1名）
畑　光
△西脇市・黒田庄町（3名）
小糸イキ　笹倉郁子　藤田正雄
△東京都（1名）
山本充裕＝春日町＝
△兵庫県東京事務所（1名）
荒尾和成

以上

右＝村上会長の挨拶　左＝須原清氏の音頭で乾杯

総会・祝寿会・懇親会スナップ

89 1 1 25

89 1

89 11

福引き決勝

福引き・もれた人手をあげてェー

当った！山いも2キロ

「ザ・トップクラブ」のナツメロコーラス＝岡田氏提供

関東氷上郷友会々則

（名称）

第1条　本会は関東氷上郷友会と称する。

（目的）

第2条　本会は会員相互の親睦を図り、併せて郷土の発展に資することを目的とする。

（事業）

第3条　本会の前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1)毎年1回以上全会員の参加集会を催す。

(2)八十歳の会員を祝寿する。

(3)毎年1回機関誌「山ざる」を発行し会員に頒布する。

(4)会員有志によるサークル活動を奨励する。

(5)その他本会の目的を達成するために適当と認められる事業。

（会員）

第4条　本会は兵庫県氷上郡の出身者及び氷上郡に縁故のある者を会員とする。

（会費）

第5条　本会は会費として会員より年額一〇〇〇円を申し受ける。別に必要あるときは理事会の決定による額を申し受けることができる。

（寄付金）

第6条　寄付金は随時受納できる。

（役員）

第7条　本会に次の役員をおく。

理事	若干名
会長	1　名
副会長	若干名
常任理事	若干名
会計担当理事	2　名
監事	2　名

（役員の任務）

第8条　会長は本会を代表し会務を統轄する。副会長は会長を補佐し会長事故あるときは副会長のうち1名が会長職を代行する。理事は会務を執行し、常任理事は理事会から付託された事項または緊急事項の処理に当たる。監事は会務及び会計を監査する。

（役員の選任）

第9条　役員は総会において選任する。

（役員の任期）

第10条　役員の任期は2年とし重任を妨げない。

（役員の報酬）

第11条　本会の役員は総て無報酬とする。

（名誉会長・顧問）

第12条　本会に名誉会長及び顧問をおくことができる。

2　名誉会長及び顧問は理事会の議を経て会長が委嘱する。

3　名誉会長及び顧問の任期は役員の任期に準ずる。

（会議）

第13条　会議は総会と理事会とし、総会は通常総会と臨時総会とする。

2　通常総会は毎年11月に開き、必要に応じ臨時総会を開催することができる。

3　理事会は理事をもって構成し必要に応じ開催する。

4　会議は会長が招集し、会議の議事は出席者の過半数により決する。

（委員会）

第14条　会長は本会の事業を分掌するため理事会の議を経て委員会を設け、委員を委嘱することができる。

（会計報告）

第15条　本会の会計年度は毎年10月1日に始まり翌年9月30日に終わるものとし、会計報告は通常総会において行うことを原則とする。

（会則の改正）

第16条　本会則の改正は総会の議を経て決定する。

役員氏名（平成二年四月現在、略敬称）

名誉会長　小谷正雄

会長　村上末吉

副会長　吉住重造　渡辺隆男

顧問　足立源治　足立三治　上山　顕　植村章子　岡田一男　佐々木盛雄　須原　清　谷垣正雄　田　英夫　波多洋三　細見綾子

監事　荻野　武　藤田正雄

常任理事　足立かをる　足立和巳　足立謙悟　小田富士夫　坂上勝朗　田中篤郎　常岡幹彦　鶴田ゆき子　出町京子　宮野　近

理事　足立勲平　足立静雄　足立誠一　安達陽一　秋元多美子　芦田重秋　小川晴通　大木正徳　大西俊治　大野善三　岡　吉明　柏谷　進　木村つた江　木呂子恵美子　小山年博　田中　寛　高見嘉都司　千種倫幸　堀井隆川　前田和市　村上　昇　村上善英　安原三智子　若林敏郎

日本民謡舞踊大賞に「黒井踊」が努力賞・奨励賞

日本民謡舞踊大賞は、日本の伝統文化の一つである民謡舞踊の育成と普及発展を図るため、昭和五十六年度に始められてから今年が第十回となる。

国立劇場大劇場で二月十八日に開かれ、郷里の黒井踊が春日おどり保存会により参加することを知り、心を躍らせて観に行った。

全国の数多い参加希望者の中から選ばれて出演できるのだから、郷里にとって大変誇りに思ったからである。子供の頃から盆踊りとして親しんできた身近かな踊りが、国立劇場で披露されることは夢のような話である。

当日は日曜日ということもあって満員の盛況であった。華やかですばらしい舞踊が続くので、静かで飾り気のない黒井踊は果してどうだろうかと心配になってきた。

白地に群青の大柄の浴衣に、菅笠をかぶった踊子が一人ずつ舞台の両側から現われて、黒井踊は始まった。粛粛と歩む四人が古武士の踊りに象徴されるうちに一列に並んだ踊子が蛇行しながら黒井音頭と共に進行していく。

思った通り静かな中に厳粛さと古武士の荘重さがあり、観衆の拍手のうちに終った。想像もしない舞台演出に思わず固唾をのんだ自分にかえり、安堵した。黒井踊は努力賞と奨励賞の栄に輝いたのである。

○

〔黒井踊　春日おどり保存会〕

代表　細見　新

原田はる代　近藤とよ子　近藤政子　竹内時子

柿原としゑ　岡田松枝　和田さかゑ　細見菊代

旧井綾子　安達信子　荻野芳子　足立みよ子

(音頭)大井康三　(三味線)矢持直美　上田節子

外賀正子　(尺八)小西正男　竹村重雄

(太鼓)吉住弘作　(はやし)山内綾子

〔曲の由来〕　NHK大河ドラマでお馴染みの春日局（当時お福）が生まれた黒井城下の踊りで、戦国の末期丹波奥三郎に威を張り、丹波の赤鬼と認められた黒井城主、赤井悪右衛門直正が戦に勝つ毎に領民が輪になって、手拍子を打って踊ったのがこの原型といわれる。

（村上）

写真は国立劇場大劇場に出演した黒井踊

第十回日本民謡舞踊大賞

立
劇
場
黒井おどり

総論賛成・各論反対

小田知尊（柏原町）

「総論賛成・各論反対」という言葉がある。昨年から話題になっており、国政選挙の争点の一つともなっている消費税の是非はこの言葉に当てはまると思う。これは日本だけでない、世界に通用する言葉である。早い話が、今、注目されているソ連を始めとする東欧共産圏の共産主義退化の動きである。マルクスの唱えた共産主義は封建時代の特権階級を排除するための理論としては誠に理にかなったものであった。この理想主義を実践するため多くの血を流し獲得した共産主義体制も、七十二年を経過したソ連では、大多数の国民が飢に苦しむこととなった。今日の情報化時代を迎え、共産主義国が、自由主義国の繁栄ぶりを見かけると、自分達のみすぼらしい姿が浮き彫りにされるようになった。これでは自滅するより他はないと政府も国民も懸命に改革に取り組もうとしているのが現在の姿である。これは主義主張の違うために生じた悲劇というより、人間の本質は何か、人間が自らを知り、いかに理想とする神に近づけられるか、また、国家及び為政者が、国民にこの件に関して援助や、助言が出来るかどうかの点に係っていると思う。

共産主義がうまくいかなかった、それでは資本主義の勝利であると簡単には断じられない。自由主義がよいからといって利己主義に走るのでは自由国家は成り立たない。要は国民一人一人の教養が高いか低いかによって決まることだと思う。

話をもとに戻そう。今氷上郡内各町が総論賛成・各論反対でゆき悩んでいる問題をあげて見よう。

柏原町の下水道問題

昭和五十年、今から十四年前、谷口務氏が町長をしているとき、国の計画に添い、公共下水道を全町に施行しようと、国から補助金を貰って、着々計画を進めた。しかし、この計画は総論としては大変立派な計画で、発展する柏原町の将来を考えれば、当然実施されるべきものと見られていたが、住民の負担金が耐え難い額になろう、水資源が十分でないということから、町民の総スカンを食い、昭和五十四年十月の町長選挙で谷口氏は落選、万年落選候補と見られていた土谷文次氏（六十一年一月死去）が百三十七票の差で当選した。その後下水道の補助金は貰っているし、中止にするわけにもいかず、雨水の排水工事の実施でお茶を濁している。しかしいずれは下水道工事も再開しなければならぬだろう。とにかく、町民の納得を取り付け、実施に移すことが必要と見られている。

斎場（火葬場）問題

氷上郡六町のうち斎場（火葬場）を持たないのは山南、市島、春日の三町。山南町では斎場建設が十数年来の行政課題となっているし、市島、春日の両町では昭和五十五年五月の合同行政懇談会で共同設置を合意していらいの課題になっている。

斎場を持つ柏原町でも、設置いらい二十年を経過して改築問題が持ち上がっている。氷上町も同じで施設の老朽化に伴い改築が検討されているが、場所がない。現在、機能的に問題なく運営されているのは昭和五十六年十月に業務を開始した春垣町の斎場だけである。

このように斎場問題は各町にとって避けて通れないものになっているが、とりわけ山南町は深刻。同町が初めて斎場建設事業費を予算化したのは昭和四十九年だった。それから十六年、まだ実現段階に至っていない。それというのも建設位置が決まらないためで、候補地は七転、八転とさまよい続ける。はじめは町内に建設地を求めた。しかし、どこへ持って行っても地元の住民が強く反対。このため隣接の多可郡との共同設置を計画したり、同郡側で建設地を物色してもらうなど、さまざまな試みが行われているが、まとまらず、現在、町内で候補地を検討している。町民は斎場設置を強く望んでいる。なのになぜ反対なのか。悪臭は出ないか、ケムリやホコリはどうか、生活環境をこわさないか、何よりもイメージが悪い、といった不安がつきまとうからだろう。「設置はして欲しいが、こちらへ持ってくるのは困る」ということ。

氷上町の教委独立

氷上郡では昭和四十四年、各町が大同団結して各町にあった町教委を郡一本化し、十八年間共同設置の郡教委を維持して来た。ところが昭和六十二年、負担金が多すぎるなどの理由で氷上町が郡教委を脱退、独立して教育長、教育委員等を自前で選任した。町内小中学校の移動などの面で早くも不平不満が出ており、その効果に疑問を持つものも多い。今更、共同設置に戻るわけにもいかない氷上町の教委問題、今の中国、北朝鮮の情況に似ているという人もある。

氷上市実現なるか

氷上郡六町を打って一丸となし、氷上市に統一すべきという案は、氷上ＪＣの提案であり、郡内有識者の望む所である。氷上ＪＣでは昭和五十六年、氷上町横田のバイパス道路にて「氷上市の実現を計ろう」というスローガンを書いた看板を建て、郡民にその必要性を訴えている。各町が一本化することにより、水を始めとする資源の融通ができ、各種事業の大型化や、事業の計画的遂行、誘致が出来易く利点も大きいと思われる。「各論」を整理して、総論に切り換えることが望まれている。

（筆者は丹波新聞社社長）

氷上政記

はじめに

丹波新聞社の小田社長に、近代の氷上郡の政界の推移について本誌に概説してもらいたい、と依頼したところ、寄稿については固辞されたが、同社刊行にかかる「氷上郡政界物語」を提供され、「これを適宜抄記しては」との助言があった。同書は、明治以後現代までの氷上郡の政界の推移について詳述されたもので、もとより全文を紹介することはできない。これを抄記して披露することも言うべくして行うことは至難の作業であることは言をまたない。むしろかかる作業が原著の価値を損うことをおそれるものであるが、小田社長のご好意を素直にお受けして分載することにした。内容は丹波人も既に忘れ去らんとする事項が数多くあり、また、読者の多くが未知の事実に驚かれることと思う。筆者も同様であるが、政界という世界の底に流れている人間の欲望の葛藤の姿は古今東西変らぬ。執筆に当っては極力原文に忠実に、字句もそのまま紹介したため、当用漢字外の用字もあります。登場人物についてはできるだけ割愛することを避け、少々煩雑にわたっても、重出以外は取上げました。人名を摘示することで読者が「ああの人か」とうなづかれたり、また近親の方には懐しい思い出をよみがえらせるよすがにもなろうかと存じます。筆者も抄出しながら、既に半世紀の昔、その人たちの家、縁辺者などを思い出していました。

抄記の仕方については、その独断と偏見を指摘される向きも多かろうと存じます。一切の文責は筆書の負うところであります。

大方の叱正を乞う所以であります。（足立源次）

○

＜草創期より普通選挙まで＞

氷上・多紀郡は俗に兵庫県丹波と呼ばれたが、地の利、人口数などから都市偏重以前の氷上郡は、県下の雄郡を自他ともに認めて人事往来は繁く、また柏原藩の縁故者などで東京、京都との交流が多かった。かくて、氷上郡の政党活動は他郡にくらべて比較的早くから活発であった。

氷上郡の政党活動が表面化したのは明治十五年からである。明治十四年十月、国会開設の詔勅が下がって、中央では立憲改進党（大隈重信）、立憲帝政会、保守中正党が相次いで誕生した。その波及するところ、氷上郡でも、飯田三郎（元幸世村長、県会議長）を盟主とする改進党（同志会ともいう）、同じく田艇吉（柏原、元代議士）の保守中正党（益友会ともいう）、植木致一（和田、元代議士）の自由党（氷上自由倶楽部

と呼ぶ）等が、それぞれ党主や知名の士を招いて結成式を挙げ、論客の往来相次ぎ、賑やかな〝政界の幕あけ〟となった。

しかし、中央、地方を問わず、党名に違いがあっても政党理念はひとしく自由民権を旗印に掲げ、その行き方に緩急の差があっても現代の保守、革新といったような政見の差はなかった。しかも、これらの政治運動に参画した人たちは資産家と呼ばれる連中で、頭角を現わすためにはその財産を惜しげもなく散じたのであった。

明治十六年になると政治活動は活発となり、後に衆議院の初代議長中島信行の夫人となった岸田俊子（豊岡出身）の丹波遊説は、丹波っ子のド胆を抜いた。この時、彼女は芳紀二十歳、和田、柏原、成松で演説したが、ときには、文金高島田、緋ぢりめんの着物に黒帯といういでたちで紅唇烈々、自由民権を説いて、到るところで人気を博した、とある。また、この時から岸田に従って行をともにした者に、まだ十六歳の少女で、後に俳人野田別天樓の夫人となった俳人深瀬なみえ（成松の人）がある。

この年の秋、自由党総裁板垣退助が丹波入りしている。氷上郡の案内役は和田の植木致一で、沼貫の梅垣主税之亮や当時十七歳の谷垣芳太郎が随行した。和田、成松の演説会は立錐の余地なき盛況であった。板垣歓迎の猪狩りを和田で行い、大猪を射とめて宴席を開いている。この席には、成松の佐野林三、田中庄三郎、佐沼の衣川佐兵衛、中島与兵衛、中島七右衛門、柏原の小谷広治、土田雅二、田艇吉らも馳せ参じて、板垣支持を誓った。

このころには、新郷村の谷垣芳太郎、大崎・仏現寺・広瀬徳雄、柏原八幡神社・千種縫、舟城神社・宮城守衛、新郷村の奴々伎神社・石岡道三、鴨野・鈴木槌太郎らによる「誠詰会」のような政治結社的色彩の強い会派が各所に生まれたが、いずれも地方政党の組織化とともにこれらに吸収されていった。

中央において、自由党、立憲改進党、主憲帝政党が相次いで結成をみたが、その影響を受けて地方でもいろいろな政党が生まれた。しかし、これらの政党はいずれも、薩長土肥を中心とした藩閥政権の専制排除を旗印にしたため、官権の厳しい弾圧を受けて、生まれては消え、また改名・合併がくり返された。

かかる状況の中で、氷上郡改進党（同志会）が、明治二十一年十月柏原で結成された。柏原・片山源太郎、池添・志村猪三郎、吉見・阪東信太郎、春日部・山口義丸、幸世・安田種雄、美和・余田勇吉、久下・中川幸太郎、竹田・青木卯兵衛らが参加し、飯田三郎が頭領となった。氷上郡の公党としては最初のものとなった。

翌二十三年には、田艇吉を盟主とする益友会（中正党）が

誕生した。いずれも、二十三年に行われる衆議院議員選挙に備えるためのものである。田艇吉は、既に氷上郡長や県会議員を十年間も歴任し、鐘が坂トンネルの開通に治績を挙げて自他供に許す大物になっていた。時に三十八歳であった。発起人は、田のほか、柏原・土田雅二、安藤久次郎、小谷広吉、加納辰三、佐治・衣川栄太郎、遠坂・生田新右衛門、神楽・足立重左衛門、国領・上田捨蔵、黒井・野村久三郎である。はじめ「自治協会」と称したが、翌年一月に開いた発起人会で、「益友会」と改称した。当日の主な主席者は、小谷保太郎、片山迅三郎、三崎安次郎、三崎久治郎、三崎弘造、田友吉、常岡佐右衛門、上田六右衛門、本庄藤兵衛、西垣円次郎、鈴木徳二郎、村上嘉左衛門、広瀬梅太郎、和田弥吉、酒井友輔、横尾幸八、瀬川半造、村山国一郎、村上寿一郎、沢野孫右衛門、浅香恒太郎、足立吉之助、由良権左衛門、村上治、芦田榛九郎、公江辰造、衣川策之助、平岩維、足立純一、足立悦太郎、須原次郎兵衛、近慶仁右衛門、宮本幸八、山名梅太郎、小谷国太郎、松本直次、山内純次、上田新六、足立陽重郎、河津律造、富士沢作治、井上藤兵衛、田村弥治右衛門、大塚代三郎、善積喜八、谷垣孫九郎、田口啓助らであり、いずれも地主階級の人たちであった。

○

明治二十三年四月には、植木致一を中心とする自由クラブができた。発起者は、植木を始め、小谷広治、芦田隆太郎、梅垣主税之亮、谷垣芳太郎、村上八兵衛、前川恒次、植木伝右衛門、佐野林三、田中庄三郎、田中精逸、河津弘吉、妥女与市、松田与左衛門、大木静雄、中島七右衛門、金川文蔵、安田作次郎、山本菊蔵、徳義三代蔵、木下幾蔵、余田完二、桂竜三郎、久下文助らで、各村の名望家を網羅していた。

同志会、益友会、自由クラブよりややおくれて、二十三年五月、日本保守党首、鳥尾小弥太が来郡して同志を集めた。黒井の萩野貞治郎（黒井村長、のち県会議員）が中心となり、益友会を脱退した。三崎安次郎、三崎弘造および柘周八、西山与八をはじめとして気脈を通じる同志が集った。かくして、四派対立のまま、同年七月の第一回選挙にのぞむこととなる。この間、各派の切りくずし、引き抜き工作が頻りに行われ、特に中立を旗印とする田艇吉の保守中正党の益友会は攻撃の的となった。

かかる形勢の中で七月一日を迎えることとなる。国会は、貴族院と衆議院の二院制であった。衆議院の議員定数は三百人。選挙資格は、その府県内に一年以上住んでいて直接国税十五円以上を納める日本帝国男子であって、二三の郡を合して一人の議員を選ぶ小選挙区制がとられた。投票用紙には選挙した者の氏名、住所を書き捺印せねばならなかったので、自署できない者には立会いの役場吏員が代書した。

氷上郡は、多紀郡とともに兵庫県第三選挙区となり、定員は一名であった。選挙運動は五月から始まり、田艇吉は柏原本町に、愛国同志会（改進党）の飯田三郎は柏原大手通に、保守派の山川善太郎は多紀郡から進出して成松の萩野善五郎方に、自由党の法貴発（多紀郡）も成松の愛国楼に、それぞれ陣を張った。

昼夜の別なく各所で演説会が開かれ、戸別訪問も大っぴらに、ビラや推薦状が惜し気もなく配られた。村境では、夜はたいまつをたいて他陣営からの潜入を警戒し、尾行も平気で行われて隋所で小競り合いが起きた。

候補者の名を書いた旗やスローガンを大書した幟（のぼり）を若い者に持たせた壮士が仕込み杖（刀を杖に仕込んだもの）を振り回して大道を闊（かっ）歩した。演説会場は戦場のようなものものしい警戒陣がしかれ、血の雨も降りかねない緊迫感をみなぎらせて、野次、怒号が乱れ飛んだ。官憲の弾圧もひどく、「弁士注意」くらいはお茶の子で、中止や検束も相次いだ。

選挙の開票はもとの柏原女学校で、時の氷上郡長、芦田辰左衛門が選挙長となって行われた。郡内の各役場から人夫がかつぎ込んだ投票箱は翌日まで保管された。多紀郡の投票箱はひとまとめにして鐘ヶ坂越しに運ばれたが、道中の警護はものものしく、役場吏員や警官が人足の前後左右を固めて、昔の藩金護送さながらの大がかりなものであったという。

開票結果は、自由党候補の多紀郡の法貴発が当選し、田艇吉は惜しくも次点となった。しかし、その法貴発はその年の秋に開かれた第一回国会に出席することなく急逝し、その補欠選挙が翌二十四年一月に旋行された。

田艇吉は雪辱を期して再び立った。一時会員千五百と豪語していた益友会（中正党）も既に四方からの攻撃に傷つき、田は自由党に移っていた。そしてみごとに当選した。落選後わずか半年で幸運が巡り来た。一族郎党こぞって田に従って自由党入りしたから、氷上郡の自由党勢力は一挙に強大になった。さきに植木致一が「将来は中正党では駄目だから自由党に入れ」と田を説いたことがあったが、それが証明された形となった。中道派の行き方の難しさはいつの世にも変らないというべきか。

このときの衆議院議員の平均年齢は、四十二歳四カ月、被選挙権は三十一歳以上となっていた。三百人の議員の年齢内訳は、三十代が、一三六人、四十代、一一四人、五十代、三六人、六十以上が一四人で、当時の青壮年の政治意識の盛んなさまがうかがえる。

当時日本の総人口は四千七万二千二十人で、有権者は、四十五万三千四百七十四人であるから、全国民のわずか一・一％に選挙権があっただけである。まことに隔世の感が深い。

氷上郡内の選挙人は総数九一六人で当時直接国税十五円以

上を納めていた人たちである。そのころの米価は、一石が六円三十銭であったから、十五円は、二石三斗八升に相当する。商業が振わない当時、有権者は地主によって占められていた。

田艇吉を当選させた自由党は勢いを得て二十四年九月には自由党の領袖、星享を柏原に招いて政談演説会を開き、ますます気勢を挙げた。

翌二十五年二月、田艇吉は二度目の衆議院議員となった。この臨時選挙は、わが国憲政史上の一大汚点を残したといわれる松方正義内閣の選挙干渉が行われた。内務大臣品川弥太郎が総指揮をとり、専ら吏党（政府党）を助けるため、民党たる自由党・改進党を弾圧した。各府県知事に訓令を発し、各府県知事は郡長、市町村に内訓して、警官を動員し、吏党に不利な行動をするものを容赦なく検束した。この弾圧に反対する大衆と全国至るところで衝突し、銃剣を揮い、放火、殺人事件まで起きた。高知県では野党の壮士が五人も斬られ、佐賀県では軍隊が出動し、投票中止を命ぜられた町村まで出る始末で、長崎県では、博徒五十人に巡査の服を着せ、刀剣、短銃を持たせて野党と対抗するなど、常軌を逸した干渉が行われた。

兵庫県でも、吏党の候補者に投票せよと民党を支持する家を個別訪門し、断ると暴言を放っておどし、あるいはわいろを配って歩き、「巡査から貰うのは罪にならぬだろう」と安心して受取ったというような笑えぬ事実もあった。氷上郡では、柏原警察署長・山田斉警部以下が警戒に当ったが、自民党に属した田艇吉は吏党から有力な候補が出なかったためもあって大した弾圧も加えられず、順当に票を稼いだ。しかし、内命を強行しない知事や郡長、警察署長は選挙のさなかにどしどし交代させられた。

しかし圧迫を受ければ受けるほど反動的に大衆の反政府意識は旺盛になっていった。結果、自由、改進の議席は大して減らず、大勢を支配する力を握った。かくして松方内閣は責任を負うて辞職した。

田艇吉は、二十七年三月の臨時選挙にも当選し、続いて四カ月後の政変にも引き続いて栄光の座についた。折から日清戦役下で、挙国一致、政党も争いをやめ、翌二十八年五月、勝利のときをもって議会は解散となった。

田は、前後四期、四年四カ月の間、衆議院議員として地方の与望に応えたが、このときをもって政界を引退し、住友総本店支配人となって実業界に転じた。彼は明治十二年官を辞して柏原町に帰り、折から初の県会議員選挙に推されて議員となり、氷上郡長の職を兼ねること十年、この間、鐘ヶ坂トンネル開さくを手がけてその存在を天下に示した。住友に移って後も丹波開発に努力し、阪鶴鉄道（今の福知山線）を開通させた功積は長く丹波人の敬仰の的となって、丹波開発の

父とたたえられている。

○

ここで、県会、郡会の動向にふれる。それらの動きは、即国会につながり、地方政治史に特筆される事項だからである。

現在の府県、郡、市町村の形ができたのは、明治十一年の太政官布告による。

郡を選出基盤とする初の県会議員選挙が行なわれたのは、明治十二年三月のこと、氷上郡の定員は三名であった。この選挙では、田艇吉、芦田辰左衛門(芦田)、衣川佐兵衛が当選した。このころの議員は、県会へ出席するのに神戸までお抱えの人力車を通しで乗りつけたという。この後、田が在任九カ月で二代氷上郡長に就任のため議員を辞し、その補欠選挙では、塚口邦之亮が当選した。

明治十三年十一月定期選挙があり、このときから議員の任期は四年と決まった。この選挙では、衣川佐兵衛、塚口邦之亮は再選、芦田辰左衛門に代って、谷垣孫九郎（新井）が当選した。途中辞任した谷垣に代わり上田雅二(柏原)、塚口に代わり山下銀四郎（沼貫）が補欠当選した。十七年にもこれらの三人が当選し、次の四年目の二十一年までに二度の補欠選挙があり、山下と上田に代わって、衣川策之助（佐治）と植木致一（和田）が選出された。佐治から二人の県議を出している。

明治二十一年選挙では、植木、衣川のほか飯田三郎が最高得票で当選を果している。飯田は改進党、植木は自由党、衣川は自由党系益友会に属していた。二十三年の選挙では、植木にかわって山口義丸（春日部）が選出された。このときから、半数改選制がとられた。

山口は人情味厚く、飯田三郎が資産をなくして被選挙資格を失ったとき、自己の田を飯田の名儀に書き替えて県会に立候補させている。

二十五年には、県会開設以来連続当選していた衣川佐兵衛が引退し、飯田三郎、中島七右衛門が出た。

衣川佐兵衛は十三年一カ月の長きにわたって県会に議席を占め、県政会の長老であったし、地方産業の開発に力を致した。後に県議になる栄太郎はその実子で、退蔵（後の県議）は栄太郎の子である。また県議になった衣川策之助は佐兵衛の分家（退蔵が跡を継ぐ）だから、衣川一族の勢力は隆々たるものがあった。中島七右衛門も衣川と並ぶ名門で、中島与右衛門（敏之介、三崎和民の父）とは同族である。

飯田三郎はこの選挙後、県会議長となった。彼は柏原藩家老、生駒彦左衛門の二男で福知山藩家老飯田家の養子となった。学才あり知略にすぐれ、資性剛毅の人、はじめ官にあったが、すまじきものは宮仕えと退官し、福知山の邸宅を町営病院に提供し、柏原に帰って政界に身を投じた。幸世村長に

もなり、県会で非凡の才を揮ったが、二十八年、四十二歳で早逝した。「健康でもう十年生きていれば丹波を代表する人物になったろう」、とその死が惜しまれたという。

二十九年一月の補欠選挙には、自由系の山下銀四郎（沼貫）が返り咲いた。このときの議員は、中島七右衛門、山下銀四郎、山口義丸の三人である。このころから国会選挙が県議選とからむようになり、国会へは田のあとをうけて、森本荘太郎が出ていた。

山下銀四郎は在任一カ月で改選となり、佐野林三（成松）が選出された。山下はその後二回続けて落選したが、明治三十二年、柏原町から乞われて町長となり、六年間町政に功があった。山下は田の益友会の副会長として田に兄事していたので、田の推挙がモノをいっている。

明治二十九年は府県制改正で複選を改める選挙や郡議会制発足などで、県会だけでも三回も選挙をおこなった。県会議員が佐治にかたよったことから、山東、山西、山南にバランスを保つあっせんが行われた。そして二十九年二月の選挙で、中島七右衛門と佐野林三が再選され、山下銀四郎、安田種雄、中川幸太郎は再起を期することになった。

○

群会制は二十九年四月一日から発足した。明治二十三年より郡制も公布されていたが、郡長以下は公選によらず、知事の任命制がとられていた。初の氷上郡議会が成立したのは二十九年七月である。郡会議員の任期は四年、おおむね一町村から一人を原則として、二十九議員が任命された。初代議員は次のとおりである。

柏原・土田雅二、三崎久次郎、久下・中川幸太郎、小川・和田弥吉、和田・前川恒吉、沼貫・梅垣主税之亮、成松・河津孝吉、荻野善五郎、葛野・松田康三、幸世・安田種雄、芦田・芦田隆太郎、佐治・衣川栄太郎、神楽・足立重左衛門、遠坂・生田国太郎、吉見・阪東信太郎、美和・余田勇吉、春日部・山口義丸、大路・山内純一、国領・上田捨蔵、黒井・荻野貞次郎、山本菊蔵、石橋末吉、船城・佐々木雅治、新井・谷垣孫九郎、竹田・依田八郎右衛門、余田完二。

議長＝氷上郡長・赤堀威、参事会員＝土田雅二、生田国太郎、山口義丸、上田捨蔵。

ちなみに時の郡内二十六町村長を列挙すれば、次のとおり。

柏原・篠川直継、上久下・村上嘉左衛門、久下・中川幸太郎、小川・藤原禎章、和田・下井源治郎、沼貫・山下銀四郎、成松・田中庄三郎、葛野・山口新蔵、幸世・安田種雄、芦田・田中佐七郎、佐治・外島直治郎、神楽・足立重左衛門、遠坂・平岩維、竹田・吉見仙蔵、前山・森本茂一郎、吉見・由良友四郎、鴨庄・安達利兵衛、美和・余田勇吉、春日部・山口義丸、大路・柿原宣太郎、国領・上田捨蔵、黒井・荻野貞次郎、

船城・井上与市・石生・田村弥治右衛門、本郷・松井庄三郎、新井・谷垣孫九郎。

この町村長、郡会議員が直面した問題は、柏原中学校設立であった。県下各地に設立運動がおこるなかで、県会議長飯田三郎を動かして誘置運動を展開するうち、飯田の急逝で一頓挫を来した。町村長、郡会議員は派閥を超えて結束し、敷地および負担金一万八千円などを調達して誘致に成功したのである。

二十九年最後の選挙では引き続き中島と佐野が選出された。佐野は常楽の人で、代々庄屋をつとめ、佐野も若くして柿柴（成松）の戸長になった。植木致一らと氷上郡自由クラブを結成した。二十二年町村制が布かれるや初代成松村長となり、県議在職中も再度村長となり、学校基本財産の造成を手がけて山林五十二町歩を確保した。これが今なお町の基本財産となって、町財政をうるおしている。

中川幸太郎が宿願の県議当選を果したのは実に挑戦四度目の三十一年十月であった。村議—村長—郡議—県議と進み、遂に代議士となるが、それまで、県議に四回当選し、この間県参事会副会長、県議会議長を果した。県議在任十一年七カ月、代議士在任九年二カ月の間、地方開発につとめ、柏原銀行役員・安田種雄らと両丹貯蓄銀行を興して頭取となった。阪鶴鉄道、播丹鉄道（今の加古川線）開発の大役も果した政客で、犬養木堂に従い、清廉な人として「国民党の中川はん」と慕われた明治・大正時代の郡政界の大立物であった。

中川を陰から補佐して力のあった大志野幸太郎も郡会議員、久下村長をつとめ、郷土の発展に功積があった。

○

荻野貞治郎が中島七右衛門の補欠で県議となり、翌年の臨時選挙でも当選し、三十六年に西山角左衛門に議席をゆずるまで、山東の政客として大いに郡治に尽した。

この当時の県議（のちの政友会）や憲政本党（のちに国民党と立憲同志会に分裂）に属して対立はあった。しかし、事あるときには党利党略を離れて郷土のために一致して行動したことは特筆に値する。一例を挙げれば、明治八年ごろ、天田、氷上、多紀三郡が連合で公立病院を作ろうとして、その資金の一部を三者で分担することとなり、氷上郡の二千円の分担金を郡内篤志家から調達した。ところが、計画が中止となったため、この金を郡共有資金とし将来の用に備えた。これを士族の秩禄公債値下りによる困窮者のため公債買上げに支出して急場をしのいで、公債は満期になると墓金に繰り入れ、転売してふやしていくなどの善政がみられる。また三十五年、郡会の決議により、その基金を郡政基盤確定に当てることとし、久下村および神楽村で、九十五町歩の山林を借り受けまたは買取って植林し、のち鴨庄村でも共有林をふやし

て百十四町歩を造林した。これが後年、諸官公署の誘致、郡公会堂、伝染病院の建設を促進し、特に戦後の苦しい町村財政に非常に役立ったのである。余恵は今も郡をうるおしているが、先覚者の足跡は敬服すべきものがある。

さらに、当時の素封家といわれた人々には、その財を公益のため惜しみなく提供して地域改善の先達となり、あるいは呼び水として種々の旋設の整備を助長したことは記録の残すところである。

米の値が一石二円四十四銭の当時、二十数人の有志が提供した病院建設資金二千円は、米八百二十石の代金にひとしい。これを石二万円（昭和四十五年）米価に換算しても一千六百四十万円になる。まだ建設地も未定の三郡のために拠出したのである。明治十三年、鐘ヶ坂トンネル開通資金氷上郡分担金七千円と時の素封家が分担している。彼らの経済力もさることながら、公益のためという心意気は高く評価されてよかろう。

参考のため明治二十七年七月、所得税法が実施されたときの郡内所得上位者を左に示す。これらの人たちが、直接、間接に地域開発の先頭に立ち、また郡政を動かした。数字は所得額。同年の米価、石当り五円六十五銭。

三千五百円以上―柏原・土田雅二。二千五百円以上―黒井・山本新助、柏原・小谷保太郎。千円以上―柏原・片山武兵衛、田艇吉、三崎久次郎。九百円以上―黒井・三崎源之助、佐治・足立徳吉、竹田・須原次郎兵衛。八百円以上―久下・沢野孫右衛門、遠坂・生田新右衛門、佐治・衣川栄太郎、久下・山内喜代蔵。七百円以上―幸世・安田亟右衛門、柏原・長沢亀治。六百円以上―成松・萩野善太郎、国鎮・足立陽重郎、柏原・安藤久次郎、国領・上田新六、佐治・中島与兵衛、沼貫・山下銀四郎。五百円―柏原・片山迅三郎、国領・足立甚右衛門、柏原・中川保、吉見・阪東喜久重、沼貫・塚口邦之亮、成松・吉積春次郎、幸世・安田作太郎、国領・足立末吉。

○

氷上郡議会二度目の選挙は、明治三十二年春に旋行された。時あたかも阪鶴鉄道敷設工事は大詰めを迎えていた。田艇吉を中心に、若宮貞夫、石田貫之助両代議士、県議、郡議、沿線町長が力を合せて挙郡的に取り組んだ大事業であったが、利権がらみの選挙に利用するようなことは全くみられなかった。遂に鉄道は三十二年三月に篠山まで、五月に柏原、七月には福知山まで開通したのであった。

今回の選挙から議長は議員の互選となり、中島七右衛門が初代議長に推され、参事会員は、山下、足立、生田、須原ときまった。議員は、柏原・土田雅二、小谷広次、上久下・村上嘉右衛門、久下・中川幸太郎、小川・黒田茂一郎、和田・野添靖、植野弥太郎、沼貫・山下銀四郎、成松・松尾吉治、

葛野・山口新蔵、幸世・佐竹彦太郎、芦田・芦田隆太郎、佐治・中島七右衛門、神楽・足立重左衛門、遠坂・生田国太郎、竹田・須原治郎兵衛、前山・近藤郁重、吉見・山名梅太郎、阪東新太郎、鴨庄・小谷国太郎、美和・永井騰、春日部・山口義丸、大路・伊藤柳右衛門、国領・桂竜三郎、黒井・林寅之助、船城・佐々木雅治、生郷・松井庄三郎、足立義男、新井・上田孝之輔、以上定数二十九人である。

郡会制は、大正十二年三月に廃止されるまで二十八年間、七回の改選が行われた。和田・若林喬介、久下・大志野幸太郎、沼貫・谷垣芳太郎、遠坂・生田新右衛門らは五期二十年、上久下・村上雅司、和田・野添靖、成松・松尾吉治、神楽・足立重左衛門らは四期十六年間郡政に尽した。奇しくもこれらの人たちは、山南と山西にかたよっており、山東地区の人がいないことは地域気質を物語るものといえようか。

明治三十九年県会定期選では、政友会の西山角左衛門と憲政本党の中川幸太郎が再選された。西山は四十一年病のため辞職したが、大路村村議—郡議—県議と進んで地方自治に尽粋した。この後を継いだのは竹田の余田完二で、残任期間をつとめて実業界へ帰り、竹田銀行を須原次郎兵衛、依田八郎右衛門らと興し、郡会に議席を持って郡治にも貢献した。

このころ、郡会と県会の交流が頻繁に行われた。余田完二、中川幸太郎、安田種雄、西山角左衛門、衣川栄太郎らは郡会から出発し、山口義丸、中島七右衛門、山下銀四郎、萩野貞郎らは県会から郡会へ帰り咲きの人材であった。

明治最後の県議選は四十四年九月に行われ、中川幸太郎が四選、余田にかわって衣川栄太郎が初当選した。

日露戦争に勝ち、朝鮮を併合して国運隆々の時であった。このとき候補をうわさされた人に和田の野添靖がある。和田の旧家に生れ、和田村長二期、郡会議員を兼ね、端が島開拓、水利統一、学校林八十町歩の設定、学校基本財産四万円造成、造林などをなしとげた。実弟野添宗三は早く神戸に出て、代議士として活躍した。

もう一人は佐治の中島敏之介である。再三の県議出馬要請を固辞して郡政に専念、三期十二年に及び、佐治町長、後に郡町村会長、郡産業団体の長となり、雄弁と智謀は、明治末、大正、昭和初期を通じて郡政界の大立者であった。

○

中川幸太郎は、十一年余にわたる県議を辞し、衆議院議員に大正三年三月、立候補した。その後を継いだのが三崎和民である。三崎は佐治の生家中島をバックに、養家三崎の財力と自らの知謀をもって五年の県議生活を続け、その将来は党派を超えて嘱望されたが、大正九年、病を得て惜しくも三十六年の生涯を閉じた。

衣川栄太郎に代って県議となった成松の吉積富治は、三十

歳で成松町長となり、二期つとめて三十八歳で県議となり、一期のみで両び町長に推され、前後二十二年十カ月の長きにわたって町政に貢献し、兼ねて郡参事会員もつとめた。

大正八年九月の選挙で、県会を牛耳った畑七右衛門、衣川退蔵コンビが生まれた。このコンビは、衣川が衆議選に打って出る昭和七年まで十三年も続くことになる。畑は国民党から立ったが、当選後政友会へ移り、政友会の衣川と手を握って政友会全盛時代を築いた。当時、氷上郡の有権者数は四六〇二人、投票数三一一四票、畑が一五六八、衣川が一四六〇票と五分五分に分け合った。四年後の大正十二年にも二人の堅陣は揺がなかった。畑はこの後、議長に推されたが、その経営する下肥処分会社が問題を起こし、また議長交際で派手に金をつかうなど、山東一といわれ、五十五畝の小作地をもった畑の資産も次第に傾いた。

大正末期から昭和初期にかけて郡政史の一ページを飾ったのは丹波木堂会である。これは、犬養毅逓信大臣の下で次官をつとめた若宮貞夫代議士が但馬で木堂会をつくることになり、これを聞いた市島の土井経吉（犬養と同郷）が若宮と謀り、但馬の結成式に行く犬養を柏原に迎え、千余の同志を集めて、但馬より先に発足させた。若宮は中川幸太郎の紹介で犬養に師事し、柏原駅のブリッジ、市島の農業倉庫用地払下げなどに尽力した。

大正十二年三月郡会制度が廃止になった。かくて二十八年の幕を閉じたが、郡制は大正十五年四月まで存続し、郡長が郡会で審議した案件を専決した。郡役所の廃止とともに管掌事務は、県と町村に移管された。最後の郡長は佐治の宮垣幸吉で、柏原町長に迎えられ、のち網干町長となって、同地で亡くなった。最後の郡会議員は、柏原・上田文次、上月徳三郎、上久下・村上雅司、久下・大志野幸太郎、小川・足立弁蔵、和田・横尾頼介、若林喬介、沼貫・谷垣芳太郎、成松・松尾吉治、葛野・松本繁太郎、幸世・足立与右衛門、芦田勝治、芦田・小林宅治、佐治・中島敏之介、神楽・堀亭蔵、遠坂・生田新右衛門、竹田・中沢順蔵、前山・近藤巌、吉見・藤田玉之助、宮本盛一、鴨庄・荻野兵吉、美和・木下槌太郎、春日部・能勢宇之助、大路・赤松保光、国領・上田確郎、黒井・山本玉紀、船城・荻野虎次、生郷・田村弥治右衛門、新井・上田卓、議長は村上雅司、副議長は上田文次であった。

○

昭和になって初の衆院選挙は、二年九月に行われた。この選挙は普選第一回の定期改選であったが、大路の広瀬浩三が民政党から立候補して、政友会の衣川、畑にくい下り、僅少差で敗れた。しかし、この一戦は氷上郡の民政党の組織を確立し、翌年の衆院選ではこの基盤に乗った田昌が大勝した。広瀬はのちに民政党を離れて無産政党に変ることになる。

昭和五年一月、休会開け国会で衆議員は解散、選挙が行われた。政友会から若宮貞夫、衣川退蔵、民政党から斎慶隆夫、田昌が立候補して、衣川が落選、以来政友会全盛時代は終りを告げた。

そうした中で、氷上郡の社会主義運動は地道に続けられ、徐々に根を張っていった。佐々井一晁が社会民衆党の勢力拡大に努め、平凡社社長下中弥三郎（多紀郡出身）がこれに力をかした。

昭和五・六年は稀有の不景気時代であって、無産党の地盤拡大に役立った。国領出身の細見文治は、大衆新聞を出して無産階級運動のリーダーをつとめた。

昭和六年九月の県議選では、広瀬が労農大衆党から立候補した。これよりさき、氷上郡に全国労農大衆党郡支部が結成された。これは社会主義を基盤とする政党としては県下で最初のものであった。兵庫県連会長は河上丈太郎、郡支部は委員長に広瀬浩三、書記長に正呂地大象が就任していた。選挙は、畑七右衛門、村上雅司、広瀬浩三の三つ巴戦となった。広瀬は官憲の圧迫に耐えて頑張ったが、政・民の保守党に敗れた。村上、五九一八票、畑、五六四二票、広瀬、七九八票であった。選挙費用は、村上が千百二十八円、畑が千五百九十七円、広瀬が二百九十一円であった。

○

あくる昭和七年一月衆院は解散した。今をときめく田昌を向うにまわして、政友は、衣川を再度立てて雪辱を期そうとしたが、衣川は受けず、窮余の一策として県議の畑をむりやり引き出し乾坤一擲の大勝負に出たのが当って初陣を飾って田にくわれた政友の失地を奪回した。このあと、三月の県議補欠選では、衣川と広瀬、すなわち保草の争いとなり、その結果、衣川、六九二七票、広瀬一二〇四票で、広瀬は三たび涙をのんだ。

○

県会議員村上雅司は昭和九年七月死去した。行年六十三歳。氏は上久下の酒造家村上八兵衛の長男に生れ、十八歳のとき和田の植木致一に従って政治運動に加わり、二十九歳で村長になった。郡・県信用組合の育成発展に努力し、昭和初期の金融恐慌時代には、大西善兵衛（芦田）らと倒産相次ぐ銀行から信用組合を護り、上久下郡有林設定にも功があった。民政党の郡基盤作りに努力し、田昌の選挙事務長として二度とも当選させた人徳者でもあった。村上の死を惜しんで衣川退蔵は「政敵だったが、彼くらい気持ちのよい好きな男はなかった。県会でも政・民双方から好かれて、村上の意見にはどちらも耳を傾けた」と語ったが、郡民もひとしくその死を悼んだ。

村上死去に伴う補欠選挙では、政友系は候補をたてず、民

政党は党内調整でもめ続けたが結局藤井節太郎が公認候補となり、当選を果した。しかし、このゴタゴタで、これまで郡の政界に隠然たる力を発揮してきた、柏原上小倉武山円成寺住職が「汚濁にみちた県議選を省みる」の一文を丹波新聞にのせ「この一文をもって将来に対する絶縁状とする」と政治運動に永別を告げた。

○

昭和十年九月の県議選では選挙法改正のこともあり、従来の汚れた選挙を粛正しようとする県民運動が展開された。候補者も衣川、藤井の二名で、他は自重したため二名の当選が決定した。この時の有権者数は一万六七七八人（二十五歳以上の男子）であった。衣川は前議長の貫禄十分で、議会内の会派政友クラブの会長に推され、名実ともに県会の重鎮となり、藤井は柏原町長を兼ねて、民政クラブに属した。

昭和十二年七月、支那事変がおこり、戦火の拡大とともに次第に〝戦時色〟は濃くなり、政党政治は力を失い徐々に軍部政治へと移行した。のちに政界に乗り出した佐々木盛雄が報知新聞の従軍記者として北支戦線より帰国、柏原で従軍講演会を開き郡民の前にデビューしたのは、昭和十二年初冬のことである。

県議藤井節太郎が病気のため柏原町長を辞し、代って衣川退蔵が町長に就任したのは、十三年十月であった。この時は既に「興亜」の名の下に非常時、統制時代に突入していた。

政界の変遷も単調となり、昭和十四年九月の県議選では、定員一名となり、種々の制限が加えられた。立候補は衣川のほか、在郷軍人会氷上分会長塚口誠一（沼貫）と大塚秀二（市辺）が名乗りをあげ、政友会一、民政会二で争われた。軍人の威力を背景に塚口は善戦したが、民政二人の共ぐいがたたって衣川は六たび当選した。衣川は六選とともに柏原町長をやめ、大阪の実業畑で成功していた本庄実次を引き戻して後任とした。

昭和十六年、大東亜戦へ突入し、政党解散、大政翼賛会時代となった。

十八年秋の県会選挙は県下各市郡とも無投票当選が続出し、氷上郡も翼賛会公認の衣川の向うを張る者もなく悠々七回目の当選となり、県界の元老として、県翼賛会の枢要な地位を占めたが、このため戦後の公職追放会に該当し華々しかった長い政界活動の幕を閉じることになる。

○

戦前までの県議選をめぐる氷上郡の政客の動きを中心に概観したが、次に田艇吉引退後の代議士選挙をめぐる動きを概観する。

前に触れたとおり、明治十二年三月の第一回県議選に立候し、また、当選した人々は氷上の初期政界を動かした人たち

で、いずれも名望あり、資産あり実力ある、いわゆる旦那衆であった。芦田の芦田辰左衛門、佐治の衣川佐兵衛、中島与兵衛、衣川策之助、中島七左衛門、沼貫の塚口邦之祐、山下銀四郎、幸世の安田丞右衛門、安田作兵衛、新井の谷垣孫九郎、柏原の土田雅二、和田の植木致一、竹田の青木卯兵衛、春日部の山口義丸らがそれで、彼らの流れがのちの郡政界を大なり小なり推進することになる。

田艇吉引退後の衆院選は明治二十八年に行われ、多紀郡の森本荘太郎が、次の選挙でも同じく団野記平治が当選し、田なきあとの無力さを郡民は二度まで見せつけられた。

中央では、幸徳秋水、安部磯雄、片山潜らによる社会主義運動が芽生えるとともに、自由党（板垣退助）と進歩党（改進党を改名した大隈重信ら）が合体して憲政党ができた。憲政党はやがて、憲政・憲政本党に分裂、のち、憲政は政友会、憲政本党は民政党となった。これにならって、氷上郡の自由・進歩両党も合体して憲政党となった。そして明治三十一年八月の衆院選で再び氷上郡から代議士を出した。すなわち、和田の植木致一の当選である。植木は見識もあり、政治手腕も優れていたが歴任二年十カ月で田艇吉の弟健治郎にあとを譲って桧舞台を下りた。田健治郎は伊藤博文内閣で逓信次官をつとめ、官を辞したあとは関西鉄道の社長であったが、松本剛吉が中心になって、政友会総裁星享を動かして植木を退かせ田の登場をみた。

田健治郎は翌年三月にも再選され、同年十二月の解散まで、一年六カ月の代議士生活であった。桂内閣で逓信事務次官に就任、日露戦争下の多難な国政に尽したが、内閣交代を機に官界を去り、貴族院議員に勅任された。

大正五年、寺内内閣の逓信大臣となり、氷上郡から初めて大臣を出した、と郡民の鼻を高くさせた。また、原敬の信任を受け、文官では初の台湾総督となり、台湾統治に善政をしいた。山本権兵衛内閣のときには農商務大臣と法務大臣を兼ね、傑物後慶象次郎と並び田健治郎とどちらが早く首相になるか、と二人治郎の出世競争が政界の話題になった。昭和五年十一月、七十六歳で逝去し、勲一等旭日桐花大綬章、男爵を授けられた。

日露戦争後、選挙人資格を直接国税十円以上納める者に引下げ（従来は十五円）たため有権者は倍増した。第一回選挙当時、全国の有権者数は四十五万人、税額十円に引下げして、九十八万人、大正八年、さらに三円に引下げて、三百七万人、大正十四年に普通選挙が実施となって、日本国民で二十五歳以上の男子はみな有権者となり、一挙に千二百万人にはね上った。投票者を無記名としたのは明治三十一年からである。

○

田健治郎の後をうけて、三十七年三月、松本剛吉が議席を

得た。このときは任期一ぱいの四年続いた。戦争の遂行、政務処理という政局の安定が求められた結果である。続いて四十一年五月選にも再選され、四十五年五月まで二期八年をつとめ、のち縁故の地、神奈川県でも推されて二度の当選を果した。松本は、柏原藩士今井源左衛門の五男に生れ、養子となって松本姓を名乗った。田健治郎の腰巾着として行動し、後には、山県有朋、西園寺公望の信任を得て、奇略縦横、政界の黒幕として活躍した。特に田中内閣組閣に当ってはいち早く西園寺の意向をくみ取り、田中義一にこれを告げて、田中をして「君の恩は一生忘れぬ。総理大臣の報酬をお礼にしても年に一万五千円だから、君を満州鉄道の理事待遇とすることにしたよ」といわしめ、結局、松本は、年俸四万円で満鉄経営に尽力した。山県、西園寺、桂太郎、寺内正毅、原敬、田中と政界首脳の信任をうけて諮問に応え、晩年は、西園寺の秘書格で隠然たる勢力をもち、昭和三年、貴族院議員に勅選された。彼の日記は、明治、大正、昭和初期の政界の内幕を語るものとして注目されている。昭和四年三月六十八歳で死去、正五位勲三等を贈られた。

○

久下の中川幸太郎が、県議四期十二年の経験を生かして大正四年三月衆議院議員に初当選した。続いて大正六年四月にも再選を果し、大正十三年五月の総選挙で井上稚二に敗れるまで十年間議席を占め、県会議員を通算すると二十三年を県・国会で終始して、氷上政界史に特筆さるべき「中川時代」を築きあげた。中川は谷川きっての素封家であったが政治におびただしい財産をつかい果した。一例をあげれば、県会議員のころ、神楽から播州へ越す峠改修に尽力した礼として神楽村から山林を贈られたがきれいに政治につかってしまった。選挙のたびに田を売り、山を手放し、最後には家屋敷まで抵当に入れて政治資金にあてた。文字どおりの「井戸塀」政治家であった。後代議士となった畑七右衛門は中川の選挙に物心両面にわたって尽力している。

○

大正十三年五月の総選挙で、二度目の立候補で当選を果したのは、犬養木堂のひきいる革新クラブから打って出た井上稚二である。

大正十四年二月、普通選挙法が衆議院に上程された。これが四月には貴族院も通過し、国民待望の普選が実施されることになった。

これにより従来の国税納税に関係なく、二十五歳以上の日本人男子は誰でも選挙権が与えられ、三十歳以上には被選挙権ができた。同時に、選挙区域も中選挙区制として、氷上・多紀は但馬五郡とともに兵庫第五区となり、定員三名となった。

県会議員も市町村会議員も従来三年ごとに半数改選し、一、二級議員に分かれていたのを、国会議員と同様に任期四年とし、級制を廃止した。まさに画期的な選挙法の改革で、主権在民への道を大きく踏み出した。

○

普通選挙法による第一回衆議院議員選挙が行われたのは昭和三年二月である。このとき大蔵次官を辞し、憲政会を改めた民政党の兵庫県支部長に推されていた田昌が立候補し、但馬の斎慶隆夫、若宮貞夫とともに当選した。田は有能な人物であるうえ、父艇吉の七光り、叔父健治郎の援護があり、選挙事務長村上稚司の名采配、参謀藤井節太郎、堀川万次の活動もあって、順調な官僚生活に続いて幸運な代議士の道を進むことになった。

この選挙で田と競って敗れた尾崎勇次郎は、黒井の片山新三郎の二男、篠山の尾崎家の養子となり、東大法科を出て内務省に入り、北海道庁の内務部長、青森、愛媛、新潟県知事を経て選挙に立ったが、この後、愛知県知事に返り咲いた。晩年は篠山育才会会長として育英事業に尽し、昭和三十一年に死去した。田昌の出馬で政界を離れた井上雅二は、神楽村稲土の足立多兵衛の二男で、船城村の井上藤兵衛の娘、秀子（日本女子大学学長）の婿養子となった。篠山鳳鳴義塾から海軍兵学校に進み、途中で早稲田大学に転じ、卒業後ウィーン、ベルリン各大学で植民政策を専攻し、帰国後、朝鮮で財務官、書記官を歴任し、朝鮮日日新聞社長もつとめた。後に、南洋でゴム園を経営し、ペリーでも綿花栽培事業を興し、政府の特命を受けて世界各国を巡遊するなど、海外開拓に寄与した。昭和二十二年に内閣顧問となったが、同年六月、七十一歳で死去した。植民史など三十数冊の著書がある。

○

次の昭和五年二月の衆院戦では常勝の斎藤、花宮は別として、田昌対衣川退蔵、すなわち民政対政友の凄絶な一騎討が展開された。この選挙戦は氷上郡国政選挙史上空前の激闘と語りつがれている。田は村上雅司を、衣川は畑七右衛門が選挙事務長を勤めた。田は、江木翼鉄道大臣を手初めに、浜口雄幸総理が来郡し、衣川は三上前鉄道大臣らの大物を揃えてそれぞれ論陣を張った。

投票の結果はかなりの差をもって田の勝利となった。この時、丹陽新聞を買収して丹波新聞と改名して経営していた小田嘉市郎は、五日ごとに発行する新聞を連日発行して衣川支持を要請した。田の地元で衣川支持を訴えたから町民の講読中止が続出したが、四面楚歌の中で発行を続けた。

田昌の陰の活躍者に堀川万次がある。柏原町出身で徴兵検査をすませて上京、政界に多数の知己を得た。大正十二年二十八歳のとき帰郷して、中川幸太郎、井上雅司が対立した衆

院選で中川を応援し、氷上立憲年会を牛耳って活躍した。このとき、広瀬浩三や藤井節太郎と行動をともにして政界とのつながりを広めた。中川は落選し、堀川も活動資金を神戸地検で追求されたが尻っ尾を出さなかった。また、春日部の小富士神社の塀に不敬の落書があり、立憲青年会の仕業と疑われて柏原警察署に留置されたが結局容疑は晴れた。しかし、大西竹蔵署長の横暴をなじり、世論に訴えるビラをまいたり、丹陽新聞を創刊して立憲民主の論陣を張ったりした。その後、丹陽新聞を広瀬浩三にゆずって上京し、田の知遇を得て、中央政党と選挙区の間を気転よく立ち回った。昭和七年の総選挙では感情問題で田とたもとを分って畑七右衛門を推したが、常に田を大器とほめたたえていた。堀川は金策も上手で、立憲青年会—丹陽新聞時代には活動資金を党本部から出させたり、当時、大阪堂島で〝西山将軍〟と呼ばれて羽ぶりのよかった竹田出身の西山俊三や柏原の土田四郎、棚原の上田確郎と協力者も持ち、その金で政客の面倒をよくみた型破りの豪傑であった。

昭和五年二月の総選挙では、民政党大勝の波に乗った田が再選され、浜口内閣が大蔵政務次官に就任したが、緊縮政策の親玉浜口首相は、その年の五月、東京駅で兇徒に射たれて、若槻礼次郎が代って首相となった。若槻内閣は八カ月の短命に終り、政友会の犬養毅に組閣の大命が下ったのが、昭和六年十二月で、翌年一月には衆議院は解散された。

田は三選を狙って名乗りをあげた。これに対して政友会は衣川を推したが固辞して受けず、僚友畑七右衛門を推挙した。畑は、春日部村長—県会議員—議長と順番にお鉢がまわって来た。畑の出馬は無投票を夢みていた田の陣営を緊張させたが、〝畑何するものぞ〟の優越感は拭えず、田の優位は衆目の一致するところでもあった。選挙の結果は、田との得票差僅かに三百票で畑が辛勝し、尾崎・衣川と二度にわたってなめた苦杯を返上した。田の実力は高く買われていたが、前回の選挙から掲げた公約の柏原から遠坂峠を越えて梁瀬に通ずる柏梁鉄道敷設問題はかえって〝空手形〟の選挙道具との印象を与えた。

議席をもった畑は、春日部村きっての分限者だったが、このころはほとんど財産を費消し尽し、選挙資金にも困っていた。畑を後援する有志の中でも、黒井水産社長杉本利喜蔵は、陸軍御用達の大商人として大枚の私財を貢いで応援した。畑は人を心酔させる魅力をもった男であったから議席をもつと畑を支援する組織はまたたく間に出来上った。畑は任期いっぱい議席を占めた。彼は情にもろく、人に頼まれると断わりきれないお人好しの面が多分にあった。神戸のシ尿処理会社問題でも欠損の尻ぬぐいに私財を投じ、伊勢で五二ホテルを買って経営責任をもったのも頼まれた仕事であった。この時

の借金に代議士になってからも追いかけられ、歳費を差し押えられるので居所を隠さねばならぬ破目に陥り、遂に「迷い子の畑代議士」と新聞に登場する始末であった。このような状況で議会活動もおろそかになり、再選に失敗する因となった。

昭和十一年一月、岡田啓介内閣の不信任案が提出されて議会は解散された。このころは満州事変以後の軍の抬頭、国内の非常時態勢と政党人から軍人へと勢力の変化が加速された時代である。

田昌はこの選挙を前にして突如として「政界を引退する声明」を出して郡民を驚かせた。時に五十九歳であった。その後、実業界入りし、満州油化工業社長となってあっさり政界と縁を切った。

田昌は、郡政界元老、艇吉の長子、叔父に田健治郎男爵をもつ。鳳鳴義塾から東京帝大法科を出て大蔵省に入り浜口雄幸にかわいがられた。米国駐在財務官、主計局長、事務次官、政界入りの後は、政務次官、民政党総務、政策調査会長、党兵庫県連会長などを歴任した。

昭和十一年二月の選挙では、斎藤隆夫、若宮貞夫、植村嘉三郎（多紀郡）が当選し、畑は涙を呑んだ。

この直後、二・二六事件が起きた。この後は軍の圧力が政治に左右するようになった。岡田内閣の後をうけた広田弘毅内閣は軍と対立して十二年一月総辞職し、組閣の大命を拝した宇垣一成大将は陸軍の反対にあって組閣に失敗し、代って林銑十郎大将が軍・官僚内閣をつくったが、三月三十一日の国会最終日に軍の圧力で解散となった。

この選挙では、畑は既に戦意なく、衣川は県政会の重鎮として動かず、多紀郡の植村と山川頼三郎が立つと、県議として名を知られ、衣川が支援した山川が当選した。このときに「五当三落」という言葉が使われた。五千円で当選、三千円では落選の意である。当時は「千円普請」といえば立派な家が建ったのだから、大きな住宅五・六戸分の資金を用意しなければならないのだから、おいそれと立候補へふみきれないのは、今も昔も同様である。

この選挙は、選挙史上画期的な意味をもっている。それは、阿部磯雄の率いる社会大衆党が一挙に三十七と議席をふやし、日本無産党も一議席を獲得した。軍部の政治介入への厳しい抗議、貧富の差を拡大した資本主義への反発であった。

林内閣を承けついだのは近衛文磨内閣である。近衛は「国内相剋・軍官民対立一掃」を強調して人気は湧いた。それも束の間、七月七日には日支事変が勃発して戦火を交え、八月には上海事変、九月戦時態勢移行への軍需工業動員法などの公布となり、長期戦の泥沼に落ち込んでいった。

○

昭和十四年一月、第一次近衛内閣に続いて平沼内閣ができたが八月には独ソ不可侵条約をめぐり「複雑怪奇」の言葉を残して去り、阿部信行陸軍大将が組閣した。十五年一月、阿部内閣が退陣して米内光政海軍大将が登場した。この再開国会で斎藤隆夫が「聖戦の美名にかくれ……」と軍部の専横を攻撃して憂国の至情を訴えたのが問題となり、議員除名となった。連続当選十回を誇り、選挙の神様視されてきた斎藤は議席は離れたが、正面きって軍部と対決した勇気は真の愛国者として後世に語り継がれることとなった。

この間、国会議員の任期四年が一カ年延長された。実に異例のことである。また推せん制の翼賛選挙法が定められた。国会議員の定員減、自由立候補の制限、推せん制の導入、大選区制、選挙公営、など一連の法改正がなされた。新聞は掲載制限令にしばられて自由な主張はもちろん、報道にさえ事前検閲を受けねばならなくなった。

十六年十二月八日、大東亜戦争が勃発、緒戦の勝利に酔ったさなかの十七年四月、大政翼賛選挙が行われた。

皇道中心主義を唱える佐々井一晃が大政翼賛会推せんで立った。山川頼三郎、植村嘉三郎も丹波から立候補し、但馬では若宮貞夫死去に伴い推せんの木崎為之と非推せんの斉藤隆夫が立った。

結果は圧倒的得票で斎藤がトップ当選を果し、佐々井、木崎が議席を得た。この時の推せん候補は戦後公職追放のうき目をみることになる。

佐々井は氷上町長野（旧葛野村）の生まれ、父の佐々井信太郎（二宮尊徳研究家・日本報徳会代表、文学博士）とともに神童兄弟とうたわれたが、独学で教員となった。政治活動では「大日本党＝やまとむすび」を結成主宰していた。氷上郡には多数の同志があって、成松の上田甚右衛門、荻野善次郎、生郷の大塚秀次、正呂地大象、足立耕造、森田一二三らは熱烈な後援者であった。佐々木が二十万と呼号する同志を擁して、やまとむすび総裁として「道義世界の新秩序創建」の大理想を掲げ、日比谷原頭で総動員大会を開いたのは、戦果なお華々しい時であった。

既に議会の権威は軍部の力に属し、大政翼賛の名の下、形だけの議政の府は、昭和二十年十二月までこの時の議員によって構成された。八月十五日を境として国情は百八十度転換し、虚脱状態の七カ月を含めて四年の任期を終えたのである。

このあとに来たるものが「婦人参政」である。廃墟と化した国土に、軍隊は瓦解し無秩序に等しい社会混乱の中でわずかに新風をもたらして、一躍倍加した有権者による戦後第一回総選挙は、まさに国政の近代革命であった。国も県も町も村も新しい選挙法によって新しい時代――戦後への歩みを始めたのである。

心のふるさと

足立誠一（青垣町）

私にとって青春のふるさとは故郷ではなく、他郷である。私のふるさとは心のふるさとであり、思い出の少ないふるさとである。

私は大正二年五月十三日、当時の佐治村新町松下に生まれた。新町の松下にはお祭りの際、みこしの旅所としてお休みになる所があり、そこには大人三、四人で抱えられるくらいの大きな松の木があった。外にも二人で抱えられるくらいの松の木が五本ほどあり、そのために松下という名がついたと聞いている。

小学校は家の前にあり、学校に通うのは楽なものであった。父は養蚕の教員をしていたが時季以外はいろいろな仕事をしていた。家は中以下の貧しい家庭であったために中学校にもいかしてもらえず、高等小学校だけで、高二卒業と同時に大阪市西成区の玉出という町の小さい酒屋さんに丁稚奉公に出された。十四歳の時であった。そのために故郷に住んだ期間が短かく年少であったので、村の知人といえば同級生くらいのもので、それも他郷に出れば次第に疎遠となり、思い出すのは佐治川の流れに魚取りをし、山へ松葉拾いに行ったことなどの思い出が走馬灯のように明滅するだけである。

昭和八年徴兵検査に第一乙種合格となり、奉公先にお暇をいただいて東京に出て、中島飛行機製作所発動機試運転掛として奉職し、敗戦まで海軍航空隊付として勤務した。

昭和十四年父母妹弟等家族全員が東京に移住して、故郷に帰る縁も薄くなっていたところ、昭和五十二年に小学校の同窓会の通知を受けて以来、毎年故郷に帰るようになった。

心のふるさと。思い出の少ないふるさと。しかし、私の心を温めてくれるのは、やはり故郷しかないような気もするこのごろであるが、六十年にお墓も東京の西多摩霊園に移した昨今は、氷上町に妹の嫁ぎ先があるだけで、帰郷にも心を落ちつける所がないだけに、今では丹波は心のふるさと、として思い出に浸るこのごろである。

幼き頃の思い出

大地冨美子（氷上町・旧姓渡辺）

還歴が過ぎ、外孫も内孫も出来て親の責任が終り、やっと肩の荷が降りたような感じがするこの頃、来し方を振り返ってみるといろいろなことがあった。何といっても丹波の山奥

で何の苦労も知らず、楽しく育った子供の頃の思い出が色濃く頭に残っていて、あの頃の友達みんな集まって夜の明けるまで話し合ってみたいと思う。

私の母は二人の姉妹の妹で、本家のすぐ下に新宅を建ててもらい、和田村より婿養子をとった。私はその長女として沼貫村朝坂（氷上町朝阪）で生まれた。母方の祖父が昭和三年十一月天皇即位の御大典と私の出生を記念して杉苗を大年神社の境内に植えてくれた。「栄えゆく杉の緑を千代八千代眺めて暮らす日こそ楽しき」この歌を詠んだ祖父はやさしい人で、私は祖父の恐い顔を知らない。いつも紺無地のももひきに手織木綿で縫った巻袖の襦袢式の上着を着ていて、冬は綿入れの上着に広巾のネルで頬かむりをしていた。私が冬でもスカートをはいていると「フミよそんな短かい袴はいて寒いないかや」といった。私が「寒いない」と答えると「フミは息災もんじゃ」と眼を細めたものだった。小学校の頃は頭痛を知らず、友達が風邪をひいて首に真綿を巻いてコンコン咳をしているのをみて、私も包帯をしてみたいと憧れの気持をもっていた。うるしにかぶれて眼がふさがる程はれたので休んだのと、はしかで登校停止で休んだだけで、小学校卒業の時、六年間精勤賞をもらった。沼貫第二尋常小学校は六年までで、運動会の時は第一小学校から来たり、私達が行ったりして一緒にしていた。何列にもなって行進するとき、背の高い人達は足並みが揃ってきれいなのに、私は背が低いのでハンパになり、チョコチョコとついて行くのが恥しかった。一生懸命走ってもいつもビリになってしまう。女子ばかり輪になってダンスをした時、私はマイクの前で「松原遠く消ゆるところ」と海の歌を唄った。今でもこの歌を聞くと運動会を思い出す。

私の家のすぐ下が小学校だったので、夕方暗くなるまでよく遊んだ。陣取り、縄飛び、まりつき、おじゃみ等。小学校の大きなオルガンにはいつも鍵がかかっていたが、小さな方は二、三人で交代で弾かせてもらっていた。童謡が音になるとうれしくて何度も弾いた。

大年神社は坂を登りつめた山麓にあって、私が一番遠かったが、友達と椎の実を拾って中の白い実を食べたり、お宮の奥へコクバかきに行ったりした。きれいな松葉の落ちている所を探してガンジキで籠に入れ、オンヅメといって山盛りに乗せて、その上に檜葉や枯枝を乗せ、縄でギュッと締めてからお姉さん達にしょわせてもらい、ちょっとよろけながらもガンジキを杖にして帰った。家へ着く頃は背中に汗が出て体中ポカポカ暖かくて気持ちがよかった。家の前に拡げて乾して風呂やかまどの焚きつけにした。母がこれでお風呂が一ぺん湧くでと喜んでくれたものである。

子供小遣いといって近所へよくお使いに行った。ごめんなあーと大きな声で入る。帰る時はサイナラ。昼間鶏を放し飼

いにしてある家に行って雄鶏に追いかけられ、必死で走って帰って来たこともあり、今でも雄鶏は恐い。

我が家は台風の通り道になっていて二階で寝ていると舟に乗ったように揺れ、柱がミキミキ音がし始めると、父が「本家へ行かせてもらえ」という。自分は合羽を着て門をしたり突っ張りをしたりしてうろうろしていた。本家は広くてがっちりしていてびくともしない。男の子達も大勢いるし、倉の中へ入ったり自由に遊べて楽しかった。台風の去ったあとは柿がたくさん落ちていて、少々堅くてもゴマがふいて甘い所だけ食べた。おやつは干柿とか大麦を煎って石臼で挽いたハッタイとか豆の炒ったのやさつまいも等で、時々キャラメルや甘納豆を買ってもらうとうれしかった。

朝阪村は四十軒足らずで今も増えていないが、殆んどの家がすばらしい家に建替っていて、住む人達も代が替って、私の友達もみなおじいさん、おばあさんになっている。私の生家はそのままで大分傾いて傷んでいるが、時々弟が帰って雨漏りを直したり、八十五歳になる本家の伯母が時々戸を開けて風を通してくれているお陰で、何とか倒れないでいる。飛び上がりながら拭いた板戸や格子戸もそのままで、両親の面影と共にやさしく迎えてくれる。我が家同様にして遊ばせてもらった本家も、今は旅館のような広い立派な家に建替っているが、もう一度、昔のくぐり戸があった二重の大戸から入ってみたい。そして祖父の隠居部屋で炬燵にあたりながらお煎餅や金平糖を食べてみたい。

わが故郷

荻野　武（市島町）

福知山線の市島駅で下車、東方へ五キロメートルほど行くと戸平トンネルがあり、それを通り抜けて一キロメートルも行くとそこは京都府である。戸平トンネルのてまえに十数軒の集落があり、わが故郷、旧鴨庄村北奥後地である。歴史書によればこの地方は、崇神天皇の御代（八八年）ごろ人が住み始めたとされており、大化の改新（六四五）により加茂郷として集落が出来た模様である。その後八世紀ごろ、土地私有体制が行われ王公、貴族、社寺が地方に土地を持ち、その土地から年貢を取って経済生活を営むようになった。すなわち庄園である。加茂の荘園は京都市下鴨鎮座の下賀茂神社の社領荘園である。賀茂神社には上、下の二社があり、下社では「賀茂」の字を「鴨」と書いて上社と区別した。それが鴨庄の語源である。この地方は京洛に近いので、上古出雲文化が畿内に東進する要衝の地に当っており、帝都が大和に定まってからは皇化が山陰に及ぶ関門となった。

後地部落遠景

鴨庄村北奥は村で一番の集落で、正法寺のある段丘を中心に左右二つの谷に分かれ、左側に戸平トンネルに通ずる後地部落、右の谷を行くと妙高山（標高五六四メートル）があり、神池寺がある。神池寺の開基は奈良朝時代、元正天皇の養老二年（七一八）法道仙人が観音像を安置して道場として布教に努めたのが始まりで、一二〇〇余年の法燈を誇っている。清和天皇（八九九）の頃は、堂塔三十三、坊舎百余、山内は実に偉観を呈したと伝えられる。元弘の乱の時、征夷大将軍大塔宮護良親王が登山して衆徒に錦旗を授けて北條氏討伐の兵を起こした。その時の大塔宮のかぶとが明治二年鎌倉宮の御神体として御用の御沙汰があり、鎌倉に移されたことはよく知られている。明治に入ってから寺領の大部分が官有地となったため護寺の資を失い、直接檀家のないかなしさで堂塔は荒れるに任せ、往時の繁栄も空しく消えてしまった。近年、境内の本堂等の修復が行われ、山頂の自然林を動植物の宝庫として生物の研究の場とし、また兵庫県の自然公園ともなって、清遊の地となっている。

わが故郷の後地部落にも小さな社がある。部落を抜けると戸平トンネルの下にこんもりとした古木の森に囲まれた熊野神社がある。慶安年代に健立されたとされる四メートル四方かやぶき総ひのき作りの本殿の前に一対の大きな石の狛犬が向かい合って神前を守り、狛犬の前には苔蒸した一対の古い

石灯ろうが建っていて森厳さを増している。子供のころには部落の遊び場として、さまざまな想い出の場所でもある。ある時は神社の裏山を走り回り、時には夜、神社の集会所に食物を持ち込んで集まり、隣りの部落の神社まで肝試しに真暗な中を歩いたのも懐しい思い出である。今でも十年に一度、正月に全部落の住民が集まって記念写真を取っていると聞くが、部落の氏神としての信仰は厚いようである。

今は帰省する機会もだんだんと少なくなってきたが故郷もすっかり変ってしまった。子供のころの後地部落は、実に美しい田畑に囲まれた楽園であった。冬は積雪も多く一面銀世界となり、餌を求めて飛び交う野鳥が印象的であった。雪解けの水がちょろちょろと流れる小川の辺には猫柳がふくらみ、ふきのとうが頭を出し始める。春は一瞬にしてやってくる。大小様々な形をしたたんぼの高い土手にはタンポポが咲き乱れ、たんぼには一面にれんげ草が美しく咲く。夜は小川のきれいな水を求めて蛍が乱れ飛び、美しい幻想の世界を演出する。やがて土手には真赤な彼岸花が咲き、山には雑木林の中につつじが花をつける。畑には菜の花が黄色い花をつけ、桑の木は大きな葉を青々と繁らせて、すべての自然がよみがえる季節である。苗代に種をまき、田植えの準備が始まると農家は忙しい時期を迎える。牛を使っての農耕であり、一家総出の手植えによる田植えである。腰をかがめて数本ずつの苗を定規に添って植えて行く重労働である。夏は暑い日中の田圃の雑草取りが大変な仕事で、昼寝をはさんでの仕事が続く。秋になれば稲刈りである。穂先が重く垂れ下がった稲を一株一株刈り取って束ね、荷車に積んで自宅近くに組んだ高い稲木にかけて乾燥させる。夜は稲の脱穀が夜遅くまで続けられ、昼は庭いっぱいに敷き並べたむしろの上で脱穀した籾米を天日にあてて乾燥させ、やがてもみすり機を使って玄米にするのであるが、このような長い農作業が続くのであった。

このころ山では松茸が出る。松葉の下から輪になって大小の松茸が並んで顔を出している。大きなかごいっぱいに採った松茸を前後に担いで家路を急いだものである。

農家の仕事はまだ終らない。庭に大きな鍋を用意して大豆を煮て、麹を使ってみそやしょうゆを作らねばならない。冬の野菜類を準備し終るとやがて雪が降り始め、冬を迎えるのである。

この美しい楽園も昭和四十年代に農地整理が実施され、タンポポが咲き乱れた高い土手もなくなって画一化された田となり、猫柳が咲いた小川もコンクリートで固められてしまった。桑畑もなくなってゲートボール場に早変わりし、キューイが実をつけてさえいるのである。農作業もすべて機械化されて昔の重労働から開放されたようである。

こうして変りつつある故郷にも、春秋の季節は間違いなく

訪れるのである。そこに住んでいる人々は新しい楽園を見い出して、それぞれの思い出を作ってゆくことであろう。故郷を離れて既に四十年が過ぎ去り、変わらないのは山並みと旧知の人々の温かく迎えてくれる笑顔である。大都会の騒音の中で仕事に追いかけられ、神経をすりへらして暮らす今日、ふと思い出す故郷の美しい山並みは、しばしの休息を与えてくれる。

時は移り、住む人々も代が変り、旧知の方も少なくなっていくが、わが故郷は永遠に美しい楽園であってほしい。

青春虚実

——小学三年の秋のこと——

田中篤郎（市島町）

小学三年の秋であった。一人の少女に出会った。

その子は村にかかった旅芝居の子役であった。

☆

今夜から芝居が始まるという日の朝であった。一人の少女が先生と一諸に教室に入ってきた。

その子は長い髪を肩までたらし、赤いカバンを手に下げていた。

ざわめいていた教室がしずまった。

「この子は〇〇さんといいます。芝居一座の子供さんです。三日間学校に通って来ます。みんな仲よくしてあげて下さい」

先生の話に、みんなの目は、いっせいに、その子にあつまった。

その子はていねいに御辞儀をした。頭をあげた拍子に長い髪の毛がパラッと顔にかかった。

ざわめきが教室に戻ってきた。

その子は背は高かったが、やせていて、顔も細い首も、そでから出ている腕も、青白かった。腕の血管が、遠目にも、青くすけてみえていた。

しかし、このあたりでは、ついぞみかけない、彫りの深いきれいな顔だちの女の子であった。その切れ長の目は、教室に流れ込んで来る朝の日差しに、輝いて見えた。

その子は、私の隣りの空いている席に座ることになった。

声にならぬどよめきが教室にあふれ、みんなの目が今度は私に集まった。私は気はずかしい思いにうろたえていた。

空いていた席は、長期療養のために休んでいる男の子の席であった。

その少女は、おずおずと席まで来て、軽く頭を下げると静かに座った。

その子が強くにおった。他国のかおりだった。

ふっとなにかやましいことをしたときのように、体が熱く

なり、顔が赤くなるのを覚えた。
一時間目は国語の時間であった。
少女は教料書を持っていなかったのでよく見えるように、本を開いて机の真中に立ててやった。
その子は「すみません」というふうに合図をして、本に手を添えた。
そえた右手の親指は、細く、しなやかそうであった。爪の半月がくっきりと、美しく出ていた。私は見るとはなしにただみとれていた。
先生が私を当てた。
不意をくらった私は、どぎまぎして、あがってしまった。落着かぬままに読み始めたものの、うまく読めなかった。その上、一冊の本を二人で見ているのだから、読んでいるうちに、その子に触れそうになる。触れまいとすると、そちらに気を取られて、読み違えたり、詰ったりで、散々だった。
どうにか読み終ったが、みじめな気持に落ち込んだ。その子と並んでいるのがつらかった。
遊び時間になると、早速、悪童たちが私たち二人の周りを取り囲み、くちぐちにからかい始めた。
知らない土地の学校にきて、心細い思いをしている少女が、なおも、汚ない言葉でからかわれて、いまに泣き出すんじゃないか、とハラハラしどおしだった。
けれど、その子は泣きもせず、青白い横顔を見せて、机にうつむいたまま、じーっと耐えていた。
かばってやりたかったが、からかいのひどくなるのがいやで、黙っていた。遊び時間が来るたびにからかわれた。その子がかわいそうだったら、授業が始まると、悪童たちの目につかないように気をつけながら、その子の知らないことやわからないことがあれば、そっと教え、足りない物があれば貸してやるなど、その子に気を配った。
そんな私の気持が通じたのか、午後の授業にはいるころには、声をかけると、うなずいたり、短かい返事が返ってくるようになった。
このようにして、少しずつではあったが、二人の間の隔りが縮まってくるように思えて嬉しく、明るい気持になっていった。
授業が終って、帰り仕度をしていると、
「さよなら」
と、その子はささやくようにいった。
振り向くと、ちらっと私を見、御辞儀をして去っていった。なにか浮き浮きした気分になった。
その夜、芝居を見にいった。
悪童たちも大勢きていた。そこでも、ませたことをいって、からかわれたが、もはや気にもしなかった。

何幕目だったろうか、
あの少女がきれいな振りそで姿に、大きな花笠をかぶり、造花の桜の小枝を手にして現れ、レコードに合わせて上手に踊った。
私は、その子の踊りよりも、大きな花笠で、あの細い首がどうにかならないか、とそればかりが気になって、ハラハラしながら踊る姿を追っていた。
上手に舞台をつとめて、観客に一礼した。
「上手やったぞー」「上等、じょうとう」と、あちこちから声がかかり、見物客の笑いとともに、大きな拍手が湧き起こった。
私は自分の舞台のように嬉しかった。
私も、精いっぱい踊って幕にかくれる後姿に、親しみをこめて拍手を送った。
最後の芝居は三日通しの巡礼ものであった。その子は巡礼娘にふんしていた。
芝居が進むにつれて、見物客は舞台にひきつけられていった。客席にはしわぶき一つたたなかった。甲高いその子の声が小屋の隅々まで通った。見物客はその子と一つになっていた。その子が打たれれば見物客も身を縮め、その子が泣けば見物客もまた泣いた。
私も、幾度か、目をぬぐった。
芝居がはねて、見物客は冷え込んだ寒い夜更けを家路へ急ぎながら
「よい芝居やった」
「あの子は上手やったナア」
などと、声高に話し合っていた。その子の評判のよいのが嬉しかった。
—あした、あの子に評判のよかったことを話してあげれば、きっと喜ぶだろう。どんな顔をするだろう—
そんなことを思いめぐらしていると、心温く、秋の夜更けの寒さを忘れた。

☆

二日目の朝、その子が横に座るや、口早に、
「あんた、芝居上手やなあ、みんながあんたをほめとったよ」
昨夜の帰り道での評判のよかったことを話すと、かすかながら、嬉しそうな笑みがこぼれた。
私の話が女の子の心を一層開かせたのだろう。
「本を見せて」
「それ貸して」
などと、小声ながら、自分から声をかけてくるようになった。
そのようにして、親しみをみせはじめたかの女が、いとしくてならなかった。

心は女の子でいっぱいになっていたから、遊び時間に、他の男の子の話しかけに答えているのを目にすると、しっとで、胸のうちが苦しくて仕方がなかった。

―早く授業が始まらないか―

短い遊びの時間が長いものに感じられて、いらいらし通しだった。

自分で人が変ったのかと思うほど、並んで座っている少女のことしか考えられなくなっていた。ただ息をつめて白い彼女の横顔に見いっていた。授業は全くうわの空だった。

なにがしかしてあげられることがみつかると、胸がどきどきするほど嬉しく、この上ない悦びに思えた。

☆

三日目の朝、学校へ行くみちみち、その子といっしょにおれるのも今日一日だけだから、あしたからの行き先きのことなど聞いてみよう、と考えていたが、顔を見ると、聞きづらく、

「あしたから、あんたがおらんようになるで、寂しくなるなあ」

と、つい、自分でも思わぬことをいった。

その子は、ちらっと、私を見て、いやいやをするように首を振った。

「そんなことあらへん、すぐ忘れるわあ」

といって目をそらした。遠い人の顔になった。

―まずいことをいったのか―

と、後味の悪い思いがして、黙った。

どう話しかけてよいやらわからず、もどかしい思いのまま黙っていた。そのうち黙っているのが息苦しくなって、

「ここからどこへ行くんや」

と、聞いてみた。

「山陰の方よ」

と、正面を向いたまま答えた。

「へェー、そんなに遠いとこまで行くんか、大変やなあ」

と、同情するようにいうと、

「もっと、遠いとこかて行くよ」

と、顔を見せた。普段の顔に戻っていた。

「一年中、芝居して回ってるんか」

「そうよ」

「行ったさきで、芝居しながら、学校へ通うのも大変やなあ」

「ううん、日にちの都合で、行ったり行かんかったりやで、そうでもない」

「行ったさきの学校で、いじめられるか」

「どこでもやないけど、役者の子とか、流れもんとか言われたり、後から突き飛ばされたりすることかてあるわあ」

「ひどいことするなあ、そんなとき、そこの先生にいわへんのか」
「そんなことしたら、もっとひどいことされるで、じーっと辛抱しているんや」
といって、さびしそうに目を落とした。
その横顔に、学校に来た日の朝、しつこくからかわれながらも泣きもせず、うつむいていた横顔が重なった。
―つらいことや、悲しいことがあってもあのようにして、うつむいて辛抱しているのか……―
そう思うと、その子が哀れでならなかった。

☆

その日の授業が終った。
その子は先生に呼ばれて、みんなの前に立ち、
「ありがとうございました。さよなら」
と、丁寧に頭を下げた。
それから、私のところに小走りに駆け戻ってきて、
「本をみせてもらってありがとうネ、さよなら」
と、いった。
私も「さよなら」を言おうとしたが、熱いものが込みあげてきて、涙がこぼれそうになり、何も言えずにうつむいた。
その子は私の言葉を待っているようだったが、うつむいたまま、何もいわない私に、もう一度、「さようなら」と言って、小走りに教室から去って行った。
その子の姿が教室から消えると、別れの言葉を返さなかったことが悔まれ、寂しさとも悲しさともつかぬものが私を包んだ。

☆

その夜、芝居を見に行かなかった。
本当は飛んで行きたかったのだが、なぜか心が乱れ、うじうじしているうちについ行きそびれてしまった。
部屋に閉じこもっていると、あの子の舞台の姿がみえるようだ。
―もう会えないのだ……やっぱり芝居見に行けばよかった―と思うと、切なくて、じっとしておれなかった。
部屋を歩き回りながら、その子の名を呼んでみた。
その子の顔が鮮やかに浮かんでくる。
浮かんだ顔に学校では言えなかった「さよなら」を言い、
「いつまでもおぼえているよ」
と、つぶやくと、
熱いものが溢れて頬をつたった。

☆

小学三年の秋のことであった。

家移りざんげ

足立順治（氷上町）

藤沢に住むようになってから、かれこれ二十数年にもなりますが、この二月で八十八歳になりますので、六十過ぎにここへ来てやっと落ちつくようになったということになるのでしょう。もう死ぬまでここに住んでみようという気持ちになったからなのです。これまでよくもまあ転々と住み家を変えまくったものだなァーと思うのであります。むろん、住み家を変えるということは自分の自由がきくということですが、といっても中学校に入るまではそうはいきません。

私は中学校の同級生中、いちばん年少で、十三の時篠山の鳳鳴義塾へ入りました。初めて篠山へ行った時、魚屋町の石田時計店（私を小さい時からかわいがってくれていた叔母の嫁ぎ先）に下宿しましたが、半月ほどで義塾の寄宿舎に入ることになり、つらい寄宿生生活を二年の終りまで続けました。三年生の時に寄宿舎を出て、再び石田の時計屋の二階に戻りました。寄宿舎では衣食すべてが規則づくめで、早朝の点呼から夜九時の消灯まで、上級生や舎監先生の目が光ってどうにもならなかったものです。

石田家ではずっと自由で、天井の低い二階生活ではありましたが、八畳と四畳とをふすまで仕切った二部屋を一人で占めていました。この家には小さいけれど話し相手になる貞子という娘もいたし、叙父さんはたいへん牛肉が好きで、一週に一度は必ず前のイロハ肉屋から肉をどっさり奉公人に買いにやらしてすきやきをしてくれました。お下屋敷（シモ）の方へ曲る角に豆腐屋があって焼き豆腐を買うには近かったし、ねぎは裏の畑に生えていたし、家族一緒にすきやきで夕食をするのは、寄宿舎で規則づくめの生活よりはるかに上等の生活でした。卒業までここに居座っていたのです。

ところがその後はかなり住み家がぐるぐると変ったものでした。最初ブラジルへ行こうと考えて、とりあえず養豚をやるというので柏原の土田（ツチダ）文治さんという大家からご自慢のヨークシャ種の子豚雌雄二頭をもらって飼い、一年足らずで子を十二匹も産ませました。大正九年の十二月第一回国勢調査委員をおやじさんが私のために役場から引き受けてきたりしたものですから、氷上の山奥に足立のぼんが住み着くきっかけになるはずであったのですが、天はそうはさせなかったのでございます。ブラジル行きという大志を抱いて、機会あらばと思っていた大正九年八月の夏、私と同年のSという従弟が東京の学校から帰って私に大変なことを話すもんですから、ブラジル行きの大志がぐらぐらっと崩れて、養豚までも棒に

振らねばならぬハメになってしまいました。当時、家ではブラジル行きか、東京の学校へ上がるか、それとも家で落ち着いてくれたらもっともっと養豚の規模を大きくしてやるし、国勢調査も父が手伝うからなどとおおいにもめたように思います。そこへ叔父までが飛び出してきて「これからは何をするにも勉強や、勉強しとかなあかへん……うちの秀雄も東京に居るし心配いらへん。東京へ行くようにしてやんな」てなことで豚も国勢調査も置きっぱなしにして、九月早々に従弟と一緒に東京に出て行ったのでした。母は一言も言わなかったが、定めしつらい思いを口には出さずに辛抱していてくれたのだろうし、父は山の木を売ったり、年貢の米を当てにして金を借りたりして月々に学資を送ることのつらさを考えていたらしく、豚のことや国勢調査のことまで頭が回らなかったのではないか。二人の叔父がヤイヤイいうものですから、父は何が何だか見当がつかなくなって承知をしてしもたし、母は「順治さんが勉強して偉い人になってくれたらそれでよい。……私は辛抱しますさかい」といったのではないか。私はいい気なもんで何にもかもうっちゃらかして父から五十円程の金を貰って九月初めに東京に出たのでした。当時、五十円といえば大金だったのです。

初めは小石川・関口台町の従兄の家に着いたのです。そして私は丹波弁、ハイカラな嫁さんのきれいな姿、その上さえずるようにあか抜けした東京弁にめんくらったものでした。十日程そこに居て早稲田鶴巻町の鶴亀館というこじんまりした下宿屋に移りました。ここにはかれこれ十カ月程従兄弟三人がそれぞれ四畳半の部屋を占領して住んでいました。一番上のMというのが少しやんちゃで早稲田ではかなり悪い仲間がいて悪行も多かったようです。あるときはカフェの女給をひっぱり込んだり、またあるときは別の従弟の洋服を質に入れたり、しようがないことをやらかして困ったもんでした。

それから戸塚の霞館（カスミ）に移り、その後近くの栄進館に移りました。栄進館はなかなか格式のある下宿屋で、玄関から奥の方まで庭の木々がさわやかで何ともいえぬ上等の奥ゆかしい趣があり、霞館のようなゲス野郎の居る下宿とは違う、戸塚では第一級の下宿屋さんですから、かねてから何とか空いたら入り込んでみたいとあこがれていた下宿屋でありました。

次いで目白の女子大のそばがよいというのでそこの高台の静かな所にあった半素人の下宿に移りました。そこは何となく辺りが静かで、どこからか女性の香りが入ってくるような心地を夢想しながら黄色いフリージヤの花を飾って、そのにおいをかぎながら甘い恋心を覚えたりしました。そのころやはり女子大が恋しかったのか、鳳鳴で上級生であったHさんが、女子大へ上る女坂という坂道を左の方に入った所の小倉さんという素人下宿に巣食っていました。そのHさんが都合

で他に移るというので同級生の早稲田商科に通っていたS・K君がその後がまに入り、部屋が広い（八畳と六畳）のでK・T君が後を追うようにしてやってきて、広い二階を二人で占領していました。K・T君がお前も来いよと誘うので一軒置いて隣に新築の家があり、二階を貸すというのでK・Tの部屋には入らず、そちらの家に移ることにしました。そのころはもう早稲田に通っていたし、K・T君も上野の美術学校に入っていて、乗馬が大好きで学校の馬術クラブに入り、また応援団にも籍を置いて、あの美校独特の有名な仮装行列などをしてメチャクチャに踊ったり練り歩いたりで、メーキャップで運動会の時等には実によく暴れ出たものでした。あるときには、身体中を真っ黒に塗りつぶし、赤ふんどし姿で、上野の街を踊りまくったこともありました。

女子大下の下宿にも飽きて、私は本郷に近いキリシタン坂下の第六天町の大東館という下宿に移りました。拓大の学生が大半で静かな谷底の宿といった下宿でした。けれどその中味は拓大のバンカラ学生で詰っていて、一味違っていました。十月雨のころ、あの谷底の冷たい雨に降られながら坂道を西に上って小石川に出て江戸小橋から公園を抜け、鶴巻町の横手を過ぎて早稲田に通ったものでした。このころは何故かかなり真面目であったように思います。女子大生のことなど忘れて、赤坂の霊南坂の教会堂へ行ったり、春日町の音楽の先生宅にバイオリンを習いに週二回通ったりしていました。その後小日向台の下宿にいた時はバイオリンを一生懸命にやり、浮世のことは忘れて、それはそれは汗が額にいっぱい出る程練習をしていました。その音色が心なしか恋を語りかけるように思え、無我夢中でやっていました。

江戸川橋のたもとに浅場という素人下宿専門の周旋屋があり、ある日ひょっとした柏子で知り合い、それからはもう浅場周旋屋に頼り切りで素人下宿専問になってしまいました。それからというもの、小石川は小日向台方面から中込鶴巻町は申すにおよばず、早稲田喜久井町、榎木町、赤城下（シタ）、神楽坂から石切橋と次々と気の向くままに浅場周旋屋に頼んでどんどん下宿先を変り、学生時代はどこが自分の家かさっぱり分からなくなる程転々と引越しばかりしていました。

私は何時の間にか本郷三丁目の本郷館というのにT君といっしょにかなり長い間暮したように思います。その後、松山幸逸君が青山の尚志館（篠山の殿様の学生寮）にいてTもいつの間にか尚志館に移り住んだこともあって私もよく青山へ遊びに行ったものです。尚志館へ行けば必ずといってよい程ノミを貰って帰り、その晩はノミ取り粉まみれになって寝たことは特筆すべき哀話であります。そこに市ちゃんというとても気の良いとんきょうな賄夫がいて、いつも愉快な話ばかりしたことは今も忘れられない思い出になっています。一番

短いレコードは三日半です。これは牛込石切橋の納川（ノウカワ）さんという家でありました。もちろん例の江戸川の浅場さんが世話をしてくれたものですが、二度目に移って住んでいた戸塚の霞館から（同じ下宿屋に二度も三度も出入りしたことがあります）急に素人下宿に移りたくなって従弟のSといっしょに暮の三十日に転居しました。納川さんは当時洗濯機専門の販売あっせん業をしていてなかなかの腕ききのようでした。奥さんはあか抜けのした美形でした。われわれの部屋は十畳で、桐の大きな丸火鉢まで据えて大事にしてくれました。ともかく賄い抜きで一ヵ月十二円の間借りだったのです。江戸前のきれいな奥さんには私もSもまことに悦に入って桐の大丸火鉢を中にして「これで落ちついたのう―」といって喜び、その日は江戸川橋まで散歩に行ってそば屋に飛び込み、外食第一号を食したのでした。明る三十一日、世はおおつごもり、忙しい一日です。近所にはうまいもの屋も何でもござれで、外食の自由を楽しんで食べて回り、その夜はぐっすり。明けて元日、十時ごろに目を覚してほっとしているところへ奥さんが「お正月ですからこれを……」といって焼いた餅とお雑煮を持ってきてくれたのには恐縮しました。昼過ぎを見計らって二人は外に出ました。外食を兼ねて町の見物という寸法ですが街は寝静まったように静かなのです。昨日までわいわいいっていた魚屋も八百屋も菓子屋もあらゆる食べ物屋、煙草屋までシーンとして、戸を締め切って猫一匹顔をみせないのです。こんなはずではなかったのにと思っても今日は正月元日、商売屋はみんな戸を締めてぐっすり寝込んでいるんです。そば屋、西洋料理屋はもちろん、めし屋まで戸を締め切っているんです。菓子屋でアンパンでもと思ったがこれも閉店休業、さあ、弱った。めしが食えないじゃないか、一杯の雑煮だけでは晩まで持ちそうにない。友人の下宿へ行くといっても国へ帰ってしまって誰も居ない。どうにも困ってしまいました。二日の朝まではいり豆を買ってたべながらやっと過しましたが、この二日がまた大変、やはり元日と同様どこもかしこも休み、休みの締めっ切り、三日の日も早朝から腹はグーグー寒さは寒し、引越しには必ず炭を一俵持って行くことになっていたので（炭一俵・二円七十銭）炭火にはこと欠かなかったのですが、腹が空っぽで、寒空にすき腹、しかもたしか三日はみぞれまじりの全くいやァーな日でありました。もうたまらなくなって昼過ぎに荷物はそのままにして戸塚の霞館に舞い戻ったのです。三日と半日、正確には八十五時間足らずで粋な奥さんに未練を残してこの上等の素人家を飛び出してしまった日のことは今も忘れられないのであります。

若い水谷八重子が牛込の某家に居て、私は芸能の方にも関心を深めていたころのことで、私はその近くの素人下宿に居

たことを思い出します。たしか大正の大震災のあとかと思いますが、二階の六畳に居て二度目の大揺れ（翌一月の）に二階から夢中で逃げて梯子段の途中で揺れがひどくなり、壁土で灰かぐらになり、目つぶしをくらいながらかろうじて難を逃れた思い出があります。その下宿で面白い話があります。

地震のあった年の春休みに氷上へ帰りました。私の乗った汽車に重病人を連れたお婆さんとそれに付き添う看護婦さんが乗っていて、私はその前の席に腰を掛けたのでした。そのころ、大阪までは東京から九時間程ゆられながらの旅でありました。聞けばその病気の青年はなお遠く山口県の門司まで行くとのことで同情しました。東京から九時間の旅を眠ってばかりというのも能のない話です。付き添いの看護婦さんは非常の時以外は何も用事がないらしい。彼女は誠に色白できれいな顔をしていて、目もとくりくり、なかなかかわいいものだから浜松辺りまで来た時にはいつの間にやら話を変わすようになっていました。実のところ病人なんかおかまいなしで、名古屋を過ぎ、岐阜、米原、彦根と夜の急行が琵琶湖を右に残して大津へ着いたころにはもうすっかり仲よしになっていました。大阪で阪鶴線（福知山線）に私が乗り換える時には「私も大阪に知り合いがあるから降ろさしてもらいます。もう病人さんもこの調子だと心配ありませんわ」なんていうまでになってしまっていました。看護婦がいなくなって、岡山辺りで病人が七転八倒し始めたら私のせいになると思ってびっくりしてしまい、それはやめて下さい、それはいかんといって、途中下車だけは断じて思いとどまらせたのでありました。

その後春休みも無事終り、再び中村さんの二階に帰り、春が過ぎ初夏にま近いころのある日のことです。突然、国元から私の母方の従妹が青雲の志を抱いて単身上京し、私の下宿を訪ねて来たのでありました。中村さんのおばさんはてっきり私のいいなずけとでも思ったのか、気をきかしてお茶やお菓子をサービスしてくれました。私はこの子とまちがいを起こしてはいけないと思う一方、切角訪ねて来たのだし多分泊っていきたいというだろう、布団くらいはおばさんが貸してくれることはわかっていたし、まんざらでもないので、調子にのって田舎のことなどいろいろと話し合って楽しんでいました。夕方、たばこがきれたのでたばこを買って来るといい、従娘を二階に残して出たのでした。ところが、ところがです。全く驚いたことに目の前に奇麗な着物を着て背中に太鼓に結んだ赤い帯を締めたそりゃもう田舎の娘なんか比べものにならない程きれいにお化粧をしたお嬢さんが「アラッ、足立さん、お懐かしゅう……」といって現われたではありませんか。おやっと思ってよくよく見ると忘れていたあの時の看護婦さんではないか！　「あの時、足立さんから中村さんのところ

を教えていただいていましたので、今日は思い切ってお訪ねしようと思って来ましたのよ！　お久しゅうございます。ほんとうに久し振りねェー」というではありませんか。この時、私は何ともいえぬうれしさ、なつかしさがこみ上げてきました。今まで夢にもちょくちょくみたような気がする彼女が今眼の前に現われた。この現実をうれしいやら憎たらしいやらで目も心もくらんでしまっていたんだなァーと後から考えてぞうーッとしてしまうのです。というのは、たばこを買って下宿へ戻るまでは夢中になって話していたのでしたが、家の前へ来てハタと立ち止ってしまいました。二階には従妹が今帰るかもう帰るかと待っていることを思い出したのです。「ヒヤー、これはいかん。あいつに知れて田舎のおやじやお袋に告げ口されたらたまらない。ここは思案どころ、惜しいこの娘を離さにゃならん。もう日暮れも近いのに弱った、よわったで頭の中はめちゃくちゃになってしまうのでした。とっさのことで言葉もしどろもどろ、何をいったかさっぱり覚えないのですが、多分今日は都合が悪い、ほかに用事もあるし、というようなことでもいったのでしょう。彼女は全く鳩に豆鉄砲で、丸い目玉を一層丸くしてた様子は今でも脳裏にしみているように思います。その日、彼女は逃げるようにして中込神楽坂の方へ帰ってしまうのでした。たばこ買いにしてはかなり時間がたっていたし、夕方でもあるし、下のおばさんが布団のことまで言ってくれたがそれも大声で断り、従姉にはほんとに悪かったが、八ツ当りとまでいかないまでも、すっかり無口になってしまった私を見て「もう遅いもん、ウチ宿屋へ帰えるゥーッ」といって彼女は淋しげに行ってしまいました。二頭を追うもの一頭をも得ずといいます。正にこの日は妙な巡り合わせの一日であり、運命の神の大変な私への試練でもあったのではなかったかと思って、今思っても心が変にぞくぞくするのであります。その日どちらか一人だけの訪問であったなら、私の運命は次の日から今日まで私の歩みとは違ったものになっていたのではないか、などと思うのであります。まァー良かったと思いもし、またあるいは……とも思ってみないでもありません。

素人下宿というものはそうした身辺の自由、開放があったので私は玄人下宿から素人下宿へ転々と下宿を変ったのであります。会社に勤めたり、女房をもらってからもやはりその癖が残っていて、いとも簡単にそそくさと住家をかわりました。結婚後静岡で大きな特製の洋だんすを買いました。それが第二次大戦ごろには重なる引越しで角という角、横腹の方まで傷だらけ、移転、苦戦の歴史の跡をありありと見せつけていて、おかしいやらお恥かしいやらの次第でありました。

結婚をした昭和四年正月に世田ヶ谷の中原に明治天皇さまの待従をしていたという慈光寺さんの屋敷内に建てられたこ

じんまりした八畳、六畳、四畳半に玄関が三畳で、無論風呂も便所も台所もちゃんとあり、その上、松やつつじの植込みの二十坪もあるかと思われる庭付きの家に移りました。子供が生れて一年半もしたころにはとうとう昔の癖が頭をもたげて、昔懐かしい神楽坂の比沙門さんの裏のせせこましい、いつも三味線や太鼓、粋な唱声が聞える芸者街に移ったことは全くのことあほうみたいな移転きちがいの私でありました。神楽坂のような下町気分の粋なところは味なものでしたが、なにしろ夏の暑いことといったらないのです。それでも一年はいたと思います。

その次は千駄ヶ谷の八幡様の隣へと神楽坂とは正く反対の、神々しくて物静かな所にあった深川の材木問屋の大きな屋敷の垣内にある別棟の平屋へ越しました。付近に大きないちょうの木があり、夏でも寒いようなしっとりとした家でした。そこで同居していた女房の母を亡くしたのですが、近所には植田大将や斎藤實朝鮮総督、そのほか今は国立体育館になっている徳川侯爵邸があって、青山や品川台と並ぶ東京では一等の格式ある地域でありました。そのころ世間は不景気で私も失職をしていましたのに変に皮肉な取り合わせの住居でありました。女房の母が亡くなりまして一層ふんばらなければなりませんので、変な内職を考え、どうしようかと考えていたところ、松山幸逸君が池袋に居て、その隣の家が空いたというので、早速引っ越すことにし、そこで千駄ヶ谷で考えた内職の本格的研究、生産を始めたのであります。この家で初めて有名な家だにの猛襲にあい、夜具、シャツ、ふんどしまで硫黄のガスで殺虫してやっと難を逃れたのでした。そのころ使った硫黄はたしか三キロ以上あったと記憶しています。

二番目の子供が生まれたのはその家ではなく、今少し北寄りの昌雲寺の裏の方にたて込んで建っていた新築の二階屋で、そのころは勤めもしていたように思います。例の内職が成功していましたので、比較的のんびりしていました。その二階家に居たころT君が菊田一夫や法政の仏文を出た連中など上野浅草方面で劇作のまね事をしたり、にわかに芝居の脚本を書いたりしていて、私の家へやって来ては酒を飲んだり、多分自分たちで作ったのでしょう、面白い話を沢山聞かせてくれたりしたものでした。ある日寒いから外套を貸してくれいというので、国の兄から貰っていたいい方の外套を貸してやりましたが、それっきりT君は私の所へ戻って来ませんでした。なんでも浅草の方でもうまくいかなかったらしく、篠山からもらったという妻君とも別れたとか。とにかくあの外套の日から今日まで一度も会えずじまいというのはよほどの苦しい事情があったのではないかと悲しく思っています。

目白の方へ移ったのはそれから幾日かたってからでありました。松山君に、もう三番目の子供も生まれるかもしれぬ、

今後はこれでもういいと思うまで家は移らぬことにすると約束みたいなことをいって、当時たしか三十七円の家賃であったと思いますが、庭付きでもあり、そこでおおかた三十年にもなる間、その借家や隣の同じ造りの家も買い求めて、藤沢に移るまで辛抱してしまいました。もっとも、藤沢に家を建てて住み付くまでには二年間とんだことにかかわっていたのでした。そのころ私の家は目白よりも池袋の方が近く、土地の値打ちも高くなり、近所にはトルコ風呂やら簡易宿泊所などがどんどんできて、以前の神楽坂の住居のようにむさいものになりかけたので、アパートにでも建て直して後はのんびり過すようにしようと計画を立て、図面を作り実行に移そうとしたところがとんでもないことが起きました。新宿のある請負会社を紹介する人があって、手付け金五十万円也を支払ったまではよかったのですが、それがどうしたことかその会社の使い込みの穴埋めになってしまい、仕事に取りかかってはくれず、手付詐欺にかかったように駄目になってしまい、月二万円もする家賃を二年間も払って藤沢に土地を求め、住家の建て終るまで、田無でまた借家ずまいをしていました。田無にいたころは自由学園の隣で、近所にゴルフの練習場や東大の植物実習園もあって、武蔵野にしては春大風が吹いても土煙りも吹いて来ず、青い芝生の広い庭もあってすがすがしい借家生活でしたが、なにしろ高い家賃の故に身を削られるような思いの毎日でありました。

長男夫婦、私たちと未成年の子供ら全員が藤沢に集まったのは今から二十数年前で、あのブラジル行きを夢見た青春時代からほぼ七十年、藤沢という都会はずれの土地にやっと自らの土地と家を持つようになったのでした。世帯を持ってからも陽気から陰気、平凡から豪勢へと移り変えたり、私の家移り癖はわが人生の縮図でもありました。

今はもう九十歳に近く色気をふるい起こそうとしても体がいうことを聞いてはくれません。夢を追っての家移りももうこりごり、ここで死ぬまで辛抱することにいたします。

朝目が覚めると庭の木や花に水をやり、朝食をすますともう町内会の世話や市役所からの電話、手紙でなんだか知らぬが用事に追われ、頼まれごとや相談、老人クラブだ詩吟の会だのと自分の家の庭仕事も手につかぬ程です。でも身体は至極丈夫で風邪ひとつひかず、毎朝頭から水をかぶることと、用便の後私の考えた洗浄器でお尻の周辺を洗う習慣を今も頑固に続けている毎日です。

湘南、藤沢の地は空気は良く、デパートやスーパーもできて、もうこの家を出るなどという悪い考えを起こさないように心を引き締めている毎日でございます。

故郷「大新屋」と高見城

谷垣正雄（柏原町）

現在は兵庫県氷上郡柏原町大新屋（オオニヤ）といっているが、昭和の初期までは大新屋・鴨野・北山と挙田（アクタ）の四ケ村に田路、母坪（ホツボ）を加えた六ケ村を新井（ニイ）村と称して、氷上郡内で一番人口の少ない村であった。

村の地勢は西と南に山を背にした土地で、全体に東向きで、やや南西から東北に傾斜した地勢である。鎮守の森は八幡社で南奥の山村にあり、菩提寺は本光山三宝寺といって臨済宗妙心寺派で、西南奥の高見山を背にした東向きの高台に建てられている。この寺の背後には数多くの洞窟があり、穴居時代の遺跡を思わせている。

高見山と石戸山を水源とした小川の清流が、村の中央を西南より途中北に向きを変えて緩やかに流れ、やがて村外れから柏原川に合流している。

鎮守の新井神社は八幡社で、その創建は古く西暦五七〇年、欽明天皇の頃といわれているから、村はそれ以前から存在していたものと考えられる。

菩提寺の三宝寺は西暦一四七〇年頃、僧大宗が創建したと

新井神社

三宝寺入口門

石見守顕彰碑

伝えられている。

新井神社は、元の位置は現在より奥の南麓にあったが、明智光秀が丹波攻略に際し、高見城と共に放火して焼失したので、その後現在の位置に村民により再建されたものである。

永正六年（一五〇九）十一月十一日、玉巻城主久下政光が久下谷の持山を米百五十石で新屋庄の村民に永代売渡すとあり、これを新山と称し、新井村四ケ部落にて領有した。

しかし当時は打続く戦乱の世の中とて、この持山を隣村民が度々濫妨（ランボウ）して紛争が絶えず、この状態が約百年余り続いて困っていた。

元和六年（一六二〇年）に谷垣石見守がこの新山の紛争を調停して解決した。その後宝永元年（一七〇四年）にこの恩恵に浴した村民によって顕彰碑が建立された。更に文化元年（一九〇四年）に氏神社の境内に隣接して石見神社を建立して毎年祭祀を行っている。

昭和三十年（一九五五年）町村合併が行われ新井村が柏原町に合併になった際に、菩提寺の山門脇にあった顕彰（ケンショウ）碑を更に大きく新しく改修して立派にした。

新山による恩恵とは、植林による種々の利益の外、毎年秋の松茸の出るシーズンに、松茸山をその時季に限りその採取権を競売し、松茸を遠く阪神その他に売却して、その莫大（バク）なる利益を村民全部のものとして、共通の利潤は村税に戻入して余りある程で、その余剰金を積立てる程であったという。

その外村は広い畑地の桑畑を利用して養蚕を業とし、農業外の副収入として比較的に裕福な部落として他の村民の羨望する処であった。

なお谷垣石見守は後述高見城主仁木氏の流れで、推定歿年（一六五〇年）で、新功院殿松山永昌大居士をおくられている。

＜高見城、別名は佐野城＞

高見山は東に大新屋、西に佐野、北に鴨野、北西に稲畑を麓に持つ標高約五〇〇米の氷上郡中央部やや南西寄りに位置する峻嶮な山容の山である。北々東に屋根を有し、南方に石龕寺に続く山塊は雄大である。

我国の歴史上最も乱世であった南北朝時代から室町時代の初期にかけて、その山頂に足利尊氏麾下の属将・仁木頼幸が一三三七年に築城して丹波守護になり、一三三九年に再築、その子義尹に丹波守護を譲るとともに、城主として細川頼之と戦って戦死するまでの約五〇年間、仁木氏の居城であった。その後赤井一族が城主となり、一時は追われたが一五三八年赤井時家が奪還して城主となり、その後赤井家清と忠家と続いたが、織田信長の丹波平定のため、明智光秀が一五七九年にこれを攻略し落城焼失するまでの約二〇〇年間は赤井家が城主で、通算高見城は約二五〇年の命運であった。その後は

兵器の進歩と山城の不便さのため戦略的価値を失って廃墟となり、現在は僅かな史跡を止めているに過ぎない。

◇

終戦後は過疎の村となり、人口も減少の傾向にあったが、町村合併とともに町当局の努力で色々な企業が誘致されつつあり、最近は人口もやや増加の傾向に転じているとのことである。

還暦雑感

前田和市（山南町）

日経新聞の一月一八日の〝春秋〟欄にふと眼が止った。

東京六本木の俳優座では島村抱月演出、松井須磨子主演以来七十六年ぶりのイプセン原作「海の夫人」を上演中だった。そのプログラムの中に劇作家の田中千禾夫さんがこう書いている。「（訳者の原千代海さんは劇作家として）鳴かず飛ばずで、失礼ながら影の薄い存在と思われていたが、何ぞ計らん、黙々としてイプセンと取り組んでいたのである。

演出の千田是也さんによると今回の上演は、イプセンの全作品の翻訳を成し遂げた原さんへの敬意を表するためだという。原さんは、イプセン劇が血の通った日本語で演じられないことにかねて不満を持っていた。それで六十歳を過ぎてからノルウェー語を学び、二十年をかけて大業を果した。その全集が刊行されると知った田中さんはあぜんとしたそうだ。原さん八十三歳。演出の千代田さん八十五歳」とあった。

私も昨年末の誕生日で六十歳を迎えた。四十の時も五十の折も一つの節だなと思ったが、六十歳はより以上大きな節だと思う。その私に原さんがノルウェー語を今から習って、イプセン劇の訳文に取り組もうとされたのに、匹敵するものがあるか。と、自問した。

私にもあった。それに負けないものが。それは生涯をかけ燃焼し尽してみ仏にお仕えしてゆく道である。心から改めてこの仏縁に合掌した。このご縁が無かったら、今の私はないと思う。いや、私の生命は確実に無かった筈である。二度にわたって死の大病から救い上げられたのだから。しかし、もっと大きなものがある。それはと聞かれると群盲像を評する程度の説明しか出来ない。強いて一言で言えば、み仏を中心に生きる道と言えばよいだろうか。

私はこの間迄五十九歳に拘わり、五十九歳に安心を求めた。それには訳があった。

同信の先輩に私の尊敬するTさんという方がおられる。現在七十六歳でなおかくしゃくとして、教団の中で信徒の教化に当たっておられる。

Tさんは太平洋戦争中陸軍の特攻隊員として活躍された。ほとんどの戦友は若い命を次々とお国に捧げ、南海の波に消えていった。Tさんは不思議と搭乗機の故障とか、敵影を発見できず、また時に負傷などで生き長らえて、敗戦を迎えた。一死をもって護国の鬼となることを誓った仲である。死んでいった戦友のあの顔この顔が迫って来る。団らんの楽しいひとき、申し訳ない！という思いがこみ上げてくる。どこかにあの戦友たちの霊をほんとうに供養してくれる所はないか。行く先ざき、話を聞くたびに神社仏閣を訪ね回ったと言われる。しかし、ここだという所がない。思い迷ううちに歳月は流れていった。

第一次石油ショック、全国で大小の会社が倒産した。S県下最大の大型倒産、当時負債八十億円、役員は全員夜逃げしかないと話しているのに、東京支店長のTさんは旗を振り続けて、一向に聞こうとしない。

「君は一体何をやっているんだ！　早くしないとニッチもサッチもいかなくなるぞ。」たまりかねた役員が電話をすると、

「いやっ、探していたお寺が見つかったんだ、ここしかない。お前たちも皆さんに迷惑をかけておいて、どこへ逃げてもその心の責めは大きくなるばかりだ。いさぎよく心からお詫びして、出直そう。いっしょに精進しよう。」

Tさんが年上の故もあってか、確信に満ちた言葉の前に一言もない。その時、Tさん五十九歳であった。

それからのTさんの精進めざましく、この一人を源として次々に灯がともり、歩みが始まり現在仏縁を頂く信徒七万余世帯、教団の指導者数十人。かつて倒産会社の役員であったHさん兄弟は、ブルトーザーのような勢いで精進を行い、現在はなくてはならない教団の指導者である。会社倒産は昔話となり、現在同じS県下で関係会社数社、従業員千数百名の経営者、隆々たる勢いである。昔を知る人はその変化に目をみはっている。もちろん、その人間像を含めて、一人が悟れば万人が悟る。

その間、Tさんの戦友の方々の霊は、最初のうちはお前だけ命をいただいて、お浄土のようなところで修行ができる。けしからん！と、散々やっかみの念をぶつけてきたそうです。しかし、霊魂の真の救いに通ずる供養は、Tさんの他人さまに運ぶ精進と相まって、追善追福と戦友の霊に捧げる時、やがて、戦友の魂は霊界において救われ、〝俺達の分まで精進を頼むぞ、霊界からおれたちも応援するから〟。と変ってきたと、ニコニコしながら話される。

なるほど、あの精進の成果は数多くの霊の協力、喜びがあって出来たことだ。と感服しながら、Tさんのこの威業が入信五十九年に始まったことを思い、私は昨年まではまだ五十

○歳、あと何月は五十九歳と。私も、今から始めたと思えばTさんに遅れないと、安心し慰めていた。

思うに、六十歳を迎えた私がイプセン劇に取り組んだ原さんのように、八十三歳でなお健康をいただけるかは、私にわからない。しかし、健康に働ける間は仕事に励み、足りないながら、み仏のお喜びいただける精進に打ち込める私は本当に幸せだ。心から感謝し、いま私の心は少年のように弾んでいる。

土漠ゴルフ

岡林逸男（柏原町）

ゴルフを始めてかれこれ二十年になり、プレーしたゴルフ場も二百カ所にならんとする。当初は前夜から寝つかれない事もあったし、朝四時のスタート等も一向に気にならなかった。最近では夜更かしや、深酒をした方がスコアがまとまったりするから不思議だ。

コンペの断りの理由も大変で、家内を病気にしたり娘を入院させたり、しかし相手も心得たもので、後日「奥さんお体が弱いのですね」と皮肉られたりする。

力にあまり差がなく気のおけない仲間とチョコレートを握りプレーするゴルフが、やはり一番楽しい。そんな相手にH君がいる。彼のホームコースは東京国際CCでオフィシャルハンディは十三で私と同じである。住いも近く家族ぐるみの親しいつき合いをしているが、現在S商事のバーレーン支店に赴任している。彼の積極的な暖かい誘いに乗って、家内と昨年暮よりバーレーンの〝土漠ゴルフ〟をやりに出掛けていった。

アワリゴルフクラブは三十年の歴史があり、五、七〇四メートル、パー七〇と立派なゴルフ場である。しかし〝土漠ゴルフ〟とはよくいったもので、コースに芝はなく（雨上りの田畑が乾いたような感じ）ザクロに似た木が植っている。グリーンは土俵のように土で固められた上に薄く土がまかれて、廻りを土手のようにして囲んである。フェアウェイの両側にコールタールで線が引かれ、線の外はラフを意味する。池と称するものもあるが水はなく、地面を堀り起し池とみなしている。日射しが強く地面が白く乾いているので、カラーボールを使用しないとボールが見えなくなる。グリーンに直接落としても結構止まるし跡もつかない。土手で囲まれているのでトップボールでない限りグリーンに戻ってくる。ボールの転がりはベント芝とコーライ芝の中間位いで左右に曲り、結構お面白いグリーンである。フェアウェイではマットを敷き、ボールを上に置きショットすることができるが、ラフはノー

タッチである。到着後少し仮眠し早速〝土漠ゴルフ〟に挑戦した。恐る恐るのプレーだったが実力想応のスコアでプレーする事が出来た（H君の期待を裏切ったようだ）。〝ゴルファー猿〟に描かれているようなコースもあり、しばし考え込んでしまう。翌日はS銀行の支店長も同伴していただき、誠に楽しいゴルフだった。スコアは初日とは比較にならず、ザクロの木のブッシュへ、隣接する墓地へと打込むやら、池はもちろん、グリーンの土手の上に落として遠くへはじき飛ばされ〝土漠ゴルフ〟の本領を思いしらされた。

H君はグロス七四で廻り〝土漠ゴルフ〟のベストスコアだと、夜のゴルフ談議は彼の独占場だった。私のゴルフ歴を飾るにふさわしい〝土漠ゴルフ〟であった。彼との勝負の第一戦は三月スコットランドのセントアンドルーズでする約束をしてバーレーンを後にし、帰路シンガポールに立寄り、娘夫婦とセンドーサでプレーをした。緑多く、ランの花が咲き乱れ、その美しさに心の落着きを取り戻したものだった。

ポルトガル・スペインを旅して

秋　元　多美子（氷上町）

昨年六月に四度目の欧州旅行の地に、スペイン・ポルトガルを選び、十二日間の予定で成田を後にしました。ロンドン経由でリスボンに到着し、まずシントラ宮殿を見学し、次に大西洋の最西端といわれるロカ岬に足を伸ばしました。

ポルトガルはその昔日本と貿易が盛んな国でしたが、こんな遠い所から簡単な船で何日も何日もかけて行き来したのだなあと昔に想いを馳せながらつくづくと眺めました。

翌日はリスボンからハイウェイを通り、田園風景を背にセビリアへ向かいました。バスの両側の広大な台地にオリーブ畑、コルクの林等々、行けども行けども続く日葵の花畑が丁度満開で素晴しい眺めでした。その晩は情熱的な本場のフラメンコショーで旅の疲れを癒すことが出来ました。フラメンコの余韻を残しアルカサール大聖堂を見学し、ゴルドバ・グラナダへの移動のバスに乗り込みました。

次の訪問先はこの旅の中でも最も楽しみにしていたアルハンブラ宮殿で、一歩足を踏み入れると壁や天井に至る隅々まで細かな彫刻がほどこされ、中世の芸術の粋を結集した素晴しい宮殿であり、当時のスペインの繁栄を映しているようでもありました。つづいてプラド美術館を見学しましたが、こちらは世界の巨匠の絵画が数多く集められており、ツアーでの見学時間の少なさを痛感した次第であります。

翌日はトレド・マドリードを経てバルセロナに入りました。このアンダルシア地方は石灰石が多くミネラルウォーターで

さえ塩分がありとても飲めませんでした。つくづく日本の水道の有難さを痛感致しました。それに加えて例年より暑さが一ケ月早く来たとかで、朝から二九度もあり十時頃には四十度にも上昇するといった猛暑には閉口致しました。この暑さに参りながらピカソ美術館を訪ねたわけですが、ここにはピカソの五才の時からの絵が順次展示してあり、とても小児の描いた絵とは思えず、天才画家とはこんなものなのかなあと感嘆させられました。ピカソの画歴の中で「青の時代」「黒の時代」とあり、「青の時代」あたりが私達には少し恐しいような気分にさせられますが、あまりの数の多さに驚きつつ巨匠の絵に見入りました。

バルセロナ市内では聖家族教会や個人の家、さらに公園や広場といったいたる所にモザイク模様、幾何学模様の「ガウディ」の建物、彫刻が残っており、その芸術性やスケールの大きさにしばし感嘆いたました。

ご存知のようにバルセロナは次期五輪開催地であり、丁度道路の拡張工事やら総合体育館の建設やらの真最中で、この体育館の設計は日本人によるものと聞き、異国で日本の現在の建築技術を誇りに思った次第です。

この十二日間の旅程で唯一のハプニングというか災難が、このバルセロナでありました。それは一流ホテルのバイキングでの朝食中に、添乗員が二枚の絵葉書を高くかざして「この絵葉書を落した方は……」と尋ねたものですからツアー一行全員その方向を見ました。ほんの二〜三分の間に同行の御夫婦のパスポート、所持金等が無くなり大騒ぎとなりました。後程聞いた話ではホテルのボーイと四人位が仲間でやっていたらしいとのことでした。

オリンピック見学にバルセロナに行かれる方はどうぞ瞬時たりとも貴重品は体から離さぬよう、くれぐれもご注意下さい。こんなことがあり、今更に自国を振りかえり、治安の良さ、水の良さ、食物の美味しさ等々、同行の人々と日本国の素晴しさを再認識した旅でありました。

原子力開発と私

水船隆昌（春日町）

昭和二十三年に旧制柏原中学校を卒業（四十八回生）すると同時に戦後学制改革により新設された新制柏原高校三年に編入学し、翌年第一回卒業生として故郷丹波を離れて四十年の年月が経過した。柏原時代は太平洋戦争の真っ最中から敗戦直後の混乱期であり、学徒動員として駆り出され、学校での勉強の記憶はあまりない。数年前から旧制中学、高女を二十三年に卒業した者および特制高校第一回生として二十四年

に卒業した者で、東京地方に在住する同級生が〝ふみよ会〟を設け、定期的に親睦を深めている。青春時代を同じくする者同志の語らいは実に楽しく、故郷丹波時代の思い出が鮮明によみがえってくる。この辺の事情は本誌で池上亘泰君が詳しく紹介しているので省略する。

東京で大学生活を始めた当時は、物心共に戦後荒廃の時代であったが、そのころ柏中卒業生が中心となり在京柏陵同窓会が新橋の日本食堂で催され私も出席した記憶があるが、正確には思い出せない。当時同級生で東京に在学していたのは、荻野武、常岡幹彦の両君位であり、話し相手もなく随分淋しい思いをしたものである。今では〝ふみよ会〟メンバーだけでも男女合わせて二十八名もおり心強く感じている。

昭和六十二年秋に原子力の開発を目的とした政府機関の勤務が三十年となったのを機に転職した。原子力と故郷丹波、それは直接的には結び付くものがないので、そんな関係からか同業の同窓生同郷人はいないのではないかと思っている。

故郷丹波とは年月を経過するに従って疎遠となってしまったが、ソ連のチェルノブイリ原子力発電所の事故があって以来、日本では主として原子力発電所が設置されている地方を中心にして議論されていた安全性論議が、今や全日本的規模での関心事となり、テレビで朝まで激論がかわされるまでに過熱している。

この問題は故郷丹波においてもこのような関心事だろうか。

日本は敗戦後、原子力は軍事利用される恐れがあるとしてその研究活動は禁止されてきたが、昭和三十年になって原子力基本法が成立し、平和利用を目的としてのみ研究開発ができるようになった。

私はその翌年発足した原子燃料公社に入社した。原子力の平和利用の中心は発電であり、そこで燃やす燃料はウラン燃料である。ウラン燃料は、石油や石炭と同じく地下資源から作り出す。公社は先ずウラン鉱物深しから始めたが、丹波・丹後地方もその対象地として幾度か探査を行った。しかしその徴候はなく、両地方に限らず現在、日本においては採算の取れるウラン鉱山は皆無である。

その後公社は新しい型の原子力発電を開発する仕事も加え、名前も動力炉、核燃料開発事業団と改めた。

日本における原子力発電はアメリカが開発した軽水炉という発電炉が主流で、今では総発量の⅓を分担するまでに発展している。現在稼動している原子力発電炉は全国で三十六基に達している。

近畿地方には原子力発電所は一カ所もない。

原子力発電所は海岸に近く地盤の強固なところでしかも人口密度の少ないところが選ばれる。そういう意味で故郷丹波は適地ではない。軽水炉で使用したウラン燃料を再処理工場

において処理すると、新たに燃料として使用出来るプルトニウムが生産される。

このプルトニウムで作った燃料はいわば、準国産の燃料であり、これを使って発電するのが高速増殖炉である。

高速増殖炉は発電しながら燃料を増殖する炉である。世界においてもまだ商業用としての完成はない。

福井県敦賀市白木地区にこの高速炉の立地が決定してから早くも二十年が経過した。白木地区は敦賀半島の西先端に位置する戸数十五戸のいわゆる陸の孤島であった。

陸路は峠越えの県道とは名ばかりの小路があるのみで主として漁船による交通に頼っていた。この地区は過疎からの脱却が悲願であった。

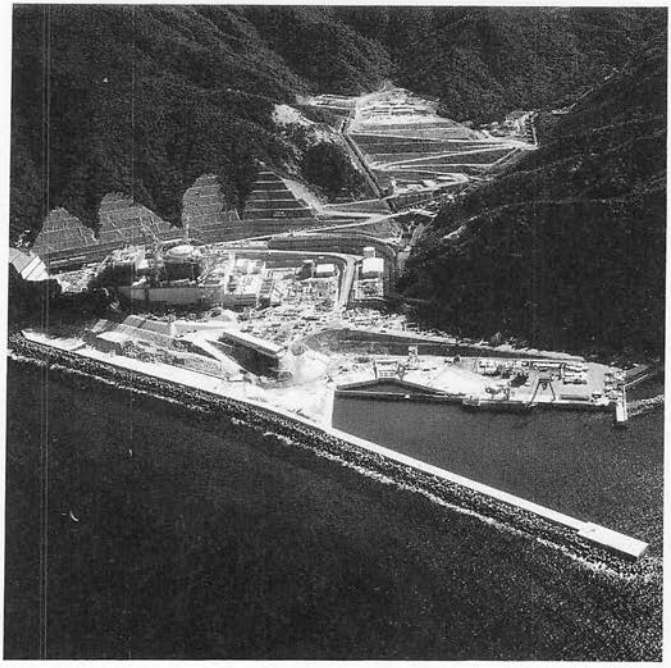
私はここの環境調査の段階から敦賀に居を移して直接関係してきた。

そんな関係から当時は、敦賀から舞鶴に通ずる海岸沿いの国道を通り、大飯町から南に峠を越えて京都の綾部市山家へ抜け故郷丹波へ帰省したものであるが、海岸沿いには美浜、高浜、大飯の原子力発電所があり、よく整備された道路公共施設を眺めるにつけ、故郷丹波の過疎からの脱却に思いをはせたものである。

平成四年度には二十三年の歳月をかけ約六千億の建設費を費して高速増殖原型炉〝もんじゅ〟は完成する。思えばサラリーマンとしての一生にも匹敵する歳月ではある。

転職後現場に訪れる機会はないが、現在も引き続き原子力界にあって技術サービス会社を経営しているので、完成時には是非訪れたいと思っている。

写真は白木地区の建設が進む現在のサイトの写真である。



クラス会のはなし

木村　つた江（市島町）

掲載の写真は、五年前に東京でクラス会を開いた時のものです。その際、当時国会議員だった西山敬次郎さんを国会議事堂に訪問しました。写真中、後列中央の堂々たる体格の男性が西山氏です。

有田喜一氏が政界を引退されてから、丹波では代議士不在の状態が七年間続いていました。西山氏が当選され、ほっとしたのもつかの間、若くて健康そのものだったはずの氏が急逝されました。

私たちにとって楽しい思い出のはずの記念写真が、永のお別れの写真になってしまうなどと誰も予想だにしなかったと思います。ほんとうに惜しいお方を亡くしました。改めて御冥福をお祈りいたします。

私は昭和六年に旧鴨庄小学校を終え、その年の秋、知人を頼って上京しました。十五歳の少女が一人で東京のような遠い所に行ってしまったら、永の別れになるといって、祖母は水盃をして泣きました。母はこのころの女性にはまれな進歩的でおおような性格でしたので、子供を自由に解放してくれました。それから今日まで半世紀以上も東京で暮しておりますが、よきにつけ、悪しきにつけ故郷を懐しむ気持は募るばかりです。

私たちのクラス会は、東海道新幹線が開通した昭和三十九年ごろから、平成二年の今日まで二十数年間ほとんど毎年開かれています。

「姉さんたちのクラス会はよう続いとるなあ、みんな仲がよいさかいやろか」

と近くに嫁いでいる妹が羨しがります。男子に長男が多いせいもありましょう。けれども全員が、日中戦争や太平洋戦争に現役兵として出征しています。そのうち戦死した男子は数名でほとんどが生還しています。中には銃弾を受け、足の不自由になった人もいます。しかし皆元気で、混乱した戦後の農村の中核となって、立派に故郷を守ってきました。クラス会の世話人も交替で、この男子らが引き受けて下さっています。私はいつも、しつらえられた会場に出向くだけで申訳ないと思っております。

昨年は城の崎温泉が会場で、一泊二日の楽しい集いでした。ちょうど松葉がにの美味しい季節でした。かにのいけづくり、かにみその酢の物、かにすき、姿焼と次つぎに運ばれてくる料理を夢中で食べました。その美味しかったこと、日ごろの女のつつしみなどそっちのけで。帰京してから、つくづく恥

かしくなりました。けれど、あの時のことは忘れられません。今年は一月十七、十八日と春日町の国領温泉の、助七旅館が会場です。この旅館は私の祖母の実家なのです。今の当主は孫に代替りしておりますが、幼時、祖母に連れられて行った記憶が、おぼろげながら残っております。クラス会の後の楽しみは泊ってゆっくりお話しをすることです。

私にはもう一つの楽しみがあります。それは氷上郡内に嫁いでいる姉妹三人と、実家を継いでいる姉と私の女ばかり五人が集うことです。そして、遠い思い出話や近況を夜の更けるのも忘れて語り明かします。クラス会と、姉妹の集いとどちらが主役ですかと聞かれれば、私は即座に両方ですと答えます。

二十一世紀まであと十年です。とりあえずそれを目標に、クラスの全員が健康で、年一回の出逢いを楽しめるように、一日一日を大切に生きて行きたいと願っております。

（写真は昭和六〇年一月二四日のクラス会）

'89 丹波の動き

――丹波新聞の見出しから――

政治・行政

○天皇陛下崩御　国民は深い悲しみに　（1・8）
○篠山町河原町に二十四戸の町営住宅が完成　（1・8）
○はばたけ〝二十歳〟丹波地方の新成人千五百三十一人（男子七百九十七人、女子七百三十四人　（1・15）
○昭和六十三年の丹波十町の煙草販売と消費税額　数量税額ともダウン（1・19）
○長期的視野で村おこし　知創活村塾を計画（青垣町）　（1・19）
○下水道の早期完成を　住民から柏原町長へ八十三人が提案や意見　（1・19）
○日本一の〝桜並木〟を　川代ダム―渡瀬橋堤防沿いに千五百本　篠山川両岸で十一キロメートル（丹南町の桜協会）　（1・22）
○ポプラの家に各種器具を取り揃え機能回復訓練室を設置　（1・26）
○下水・排水路整備に強い要望　氷上町の全世帯アンケート結果　高校や専門学校誘致も　（1・29）
○次期総選挙に保守三人　地域の声を国政に　梶原康弘氏も出場表明　（2・5）
○ふるさと創生の一億円の活用　柏原町で町民のアイデア募る　氷上町では村おこし委員会で検討　（2・5）
○兵庫県下で合併処理浄化槽の普及に拍車　二十二町と四事務組合促進協議会　（2・9）
○篠山町政百周年と築城三百八十年　春と秋に記念事業　（2・9）
○ふるさと基金を設置　創生会議は新年度から（市島町）　（2・26）
○市島町の全町下水道マップ　業者が「調査報告書」検討を加え立案（3・2）
○神戸地裁・神戸家裁支部の存続を多紀郡町村会が最高裁に陳情　（3・2）
○八上小（篠山町）の木造校舎　国庫補助で大改修　全国初の適用　（3・9）
○平成元年度の予算案
　柏原町は総額三十八億二千四九八万円
市街地活性化重点に　柏原中校舎大改造
　市島町は総額三十八億九千百七十万六千円　地力増進に堆肥施設
　篠山町は九十八億七千万円　岡野小の全面改修など
　春日町は総額四十七億一千五万四千円
船城小に屋内体育館　（3・9）
　氷上町の予算総額は八十億八十二万四千円　西小特別教室や給食棟新築　道路改良など大幅な伸び
　丹南町の予算総額は四十九億六千万円
城南小・幼の改築など
　今田町の予算総額は二十四億五千九百六十万二千円　庁舎建設費に六億円　小学校の環境整備も　（3・12）
○神戸地裁・家裁の柏原支部存続を氷上郡も最高裁へ要望　（3・16）

○丹南町立四季の森会館　盛大にオープニング　演奏会、写真展、朝市など　（3・23）
○山南町議会が庁舎建築調査まとめる「谷川地域が望ましい」　（3・26）
○市島町で南部簡易水道が完成　四月一日から給水開始　（3・26）
○ふるさと定住志向を背景に兵庫県柏原Uターンバンクを柏原公共職安に開設、地元への就職を促進　（4・9）
○山南町のダブル選挙　あっけない幕切れ　町長、町議とも無投票　木戸町長四選果たす　（4・13）
○春日町は豊かで住みよい町へ　都市化に備えた対応策　町づくりの研究会発足　（4・16）
○篠山町は一世紀にわたる歴史をしのび盛大に百周年を祝う　（4・20）
○氷上町が環境杯を整備　丹通寺山すそなどもみじ植栽や遊歩道　（4・20）
○高齢者の悩みに対応　県柏原総合庁舎内に相談センターがオープン　年金や介護など気軽に　（4・23）
○四選果たした山南町の木戸町長初登庁　後顧先見の町政推進　（4・23）
○柏原町は演劇の町をアピール　秋に演劇フェスを開催　（4・27）
○「ホタルの森」復活へ　環境庁が〝ふるさといきものの里〟で丹南町の武庫川一帯を選定　（5・11）
○高齢化さらに進む　西紀、篠山が二十％台、柏原町大幅ダウンで十二・八％（氷上、多紀福祉事務所まとめ）　（5・14）
○児童数増加の味間小　丹南町は整備計画の策定急ぐ　（5・14）
○氷上町も観光ムード　（5・18）
○おぎの明己氏を励ます会で河本敏夫氏が演説（春日町で）　（5・25）
○市島町竹田小で校舎、体育館が完成　（6・1）
○青垣町営はりきゅう施術所が健康管理に一役　高齢者や主婦に人気　（6・1）
○藤原三郎県議（氷上郡選出）総務企画常任委員長に　（6・8）
○今年の県民全世帯アンケートテーマは「二十一世紀の兵庫づくり」定住意向や丹波の森構想　（6・22）
○参院選兵庫選挙区三議席へ六党の六氏　（6・25）
○市島町議会が「暴走族追放」を決議　許さない環境づくり　（6・25）
○参院選、兵庫選挙区三議席へ八氏か各陣営必勝の構え　（7・2）
○参院選スタート　兵庫選挙区は全国屈指の激戦区　（7・6）
○参院選きょう投票　審判待つ8候補夜半に大勢判明　（7・23）
○参院選兵庫選挙区旭堂氏大勝し初当選　石井、矢原氏議席守る　民社党比例代表区足立良平氏当選　氷上郡出身者初の参院議員　（7・27）
○氷上郡六十三年の人口動態　前年比で出生減り死亡増　三大死因順位変わらず　婚姻三七二組、離婚六三組　（7・30）
○丹波の道に愛称を！　国道など五路線で公募　（8・20）

○地元に帰って欲しいが半数以上　だが適当な職場がない　（8・20）
○佐々木氏（元民社党委員長）が引退考える　健康上を理由に　（9・7）
○丹波十町の各町議会が地裁・家裁の篠山、柏原支部の統廃合に反対決議案　（9・10）
○佐々木氏引退表明　（9・10）
○〝寄付は求めません〟丹波地区選管など地域ぐるみで取り組み　（9・17）
○第二、第四土曜日閉庁　丹波十町が実施　（10・1）
○篠山川水利が七十五年を経て円満解決　西紀、丹南町と山南町が協定書を取り交わす　（10・5）
○「丹波の景観百選」決定（丹波の森協会）　（10・8）
○丹波の人口十一万七千二百九十二人　平成元年八月末現在　（10・8）
○高齢者の求人が増加（柏原職安管内）　（10・22）
○〝水分れ街道〟〝丹波の森街道〟〝デカンショ街道〟の三路線の愛称決まる　（10・26）
○ゴルフ場計画多過ぎる　複線問題は「半年以内に動き（篠山口まで）」貝原知事談　（11・5）
○兵庫二〇〇一年計画　県内一時間高速交通圏の確立　並木道公園など　（11・26）
○市島町の柏野開発再浮上　住友ゴムがスポーツ研究所　（12・3）
○県民全世帯アンケート結果（丹波地域）定住志向四人に三人、丹波の森構想の理解度低調　（12・14）
○神戸地・家裁篠山支部を廃止　来年四月から柏原支部に統合　現庁舎は簡易裁判所に　（12・21）
○春日町はふるさと創生で事業基金条例つくる　（12・21）
○平成二年の丹波の新成人千五百九十二人　（12・21）

事業

○石生地区に公共下水道を　関心高く説明会開く　導入へ町や関係機関に要望　（2・16）
○北近畿豊岡自動車道氷上町にインターを　町と議会が県に陳情　（2・16）
○「水辺」と「地域」の調和　播丹全域を調査範囲に　建設省と兵庫県がマスタープラン策定へ　（2・26）
○北摂・丹波の祭典五億六千万円の黒字　地域づくりに活用　（3・2）
○国鉄清算事業団は市島駅前広場を売却　一部を自転車置場に　（3・9）
○西谷―打坂間（西紀町）にトンネル　県道丹南―三和線と接線　調査費一千万円を計上　（3・16）
○三尾山（春日町中山）で難工事始まる　自衛隊員百二十人が出動して登山道の整備　（3・16）
○篠山町の藤岡ダム周辺を辺地事業で開発　観光名所へ第一歩　（3・23）

○青垣町にインターチェンジ設置を　地域産業と経済振興にプラス　北近畿豊岡自動車道の早期着工も町と議会が県に陳情　（3・30）
○丹南町の四季の森会館前の公園化工事が完成　憩いの広場へ一新　（6・11）
○丹波の平成元年度の公共土木事業　総事業費は四十九億円　京橋（氷上町西中）の架け替えや播州峠改良など　今田バイパスは年度内完成　（6・18）
○篠山町上篠見の四十八滝周辺の六十ヘクタールの自然林整備に三億円　（6・18）
○建設省認定篠山川桜づつみモデル事業監物橋下流四五〇メートルに二百本　（7・9）
○柏原―山南町の奥野々峠の改修決まる　来年度からトンネル工事　十三億円かけ五百メートル堀削　（7・16）
○豊岡自動車道（春日―青垣間二十四キロ着手へ　建設省が概算要求　（8・31）
○小野橋（氷上町小野）架け替え完成　（9・3）
○丹波少年の家を家族型利用などに拡充　ロッジや多目的ホールも　（10・15）
○北近畿豊岡自動車道の概要が明確に　春日（野村）、氷上（本郷）、青垣（西芦田）にインターチェンジ　（10・26）
○戸平トンネル改修工事着工　五億二千万円で　（10・29）
○水上郡初の集落下水道　山南町草部で起工　完成は平成四年の春　（11・12）
○多紀連山登山道整備着工　五坊谷池から西ヶ岳へ　（11・30）
○柏原町に並木公園　国道二キロ（JR柏原駅中心）の区間　（12・7）
○丹南町の〝デカンショ街道〟に県が地元と協力しプランター設置　（12・21）

教育・学校

○柏原高校は豪州オーシャンリーフ高校と姉妹提携　両校間で短期留学計画　（1・22）
○一人ひとりを生かそう　児童の好奇心呼びおこす　上久下小のコンピューター活用の授業　（1・29）
○氷上高校の推薦入試に五十一人が挑戦　公立高校のトップきって　（2・9）
○外人英語助手を招致　教育研究室の設置も　二十周年事業を計画（氷上郡教育委員会）　（3・12）
○一千五三一人が受験に挑む　丹波地方五高校二分校で入試　（3・19）
○氷上郡に初の女性校長誕生
氷上郡関係校長異動者名
田原肇中央小校長、藤原保夫北小校長、八木甫瑳子西小校長、酒井美智代上久下小校長、山本義敬南小校長、常石智神楽小校長、宮野實鴨庄小校長、村岡正廣市島中校長、田村一之青垣中校長、大槻巍山南中校長、西山康彦氷上中校長、足立一佐治小校長、畑昌竹田小校長、山本登後川小校長
柏原高校長に竹安正美氏　（4・2）
○高校生活スタート！柏高では十二学級（男子二四三人、女子二九四人）を迎え

て　（4・13）
○柏原高校の延べ大学合格者数　国公立大に六十三人、関西私立は六十七人　（4・27）
○氷上郡教委は進路や生徒指導など学校教諭を研究員にして教育研究室を発会式　（5・28）
○丹波の高校三年生の約四割が就職希望　（6・4）
○「遺跡」八百八十カ所の周知徹底を篠山町教委が報告書を発刊　（6・8）
○氷上高女子バレーボール部が県高校総体で九連勝　全国大会へ　（6・18）
○氷上郡教委管内の中学校へ英語指導助手で派遣　イギリス出身の女性が一年間滞在　（7・9）
○柏原高校で留学生九人を励ます　八月二日西豪州へ　（7・30）
○山南町の和田中学で星座観察　宇宙の魅力たっぷり　（8・3）
○高校生に実戦英語を　氷上高校に英語指導助手のスザンヌさん　（8・10）
○氷上郡教委新陣容整う　教育長に田中力氏　教育委員長は松本昌氏　（9・3）
○和田中体育祭で女生徒全員が太極拳　（9・14）
○学級数の現状維持を　氷上郡地域教育推進協議会が県に要望書　（10・22）
○氷上高校来春の卒業予定生の就職先ほぼ内定　地元志向強まる　（10・22）
○多紀郡内公立高校募集定員で普通科の一学級増を　（10・29）
○豊かな子育てとは！　氷上郡教委が春日で家庭教育シンポ　（11・2）
○柏原高校学年の一割強の四十八人が民間企業の就職決定　（11・2）
○山南町の上久下小が斜面に二千四百本植樹　春には花文字も　（11・23）
○道徳教育推進の柏原中学（文部省指定）で二年間の成果を発表　（11・26）
○氷上中非行ゼロ運動実践発表（12・3）
○ようこそ柏原高校に　豪州オーシャンリーフ高校から留学生十人　三週間丹波の生活を体験　（12・14）
○中学卒業者数減少で柏原高校一学級減来年度の公立高校募集定員　（12・10）

産　業

○〝豊かさ創造〟の拠点にと年輪の里に紙すき専用作業場（氷上郡連合婦人会）　（1・12）
○観光客で大にぎわい　大阪からバスツアー続々　人気集めた新春催し（柏原の厄除市）　（1・19）
○五十五年以来の高値相場　子牛（メス）に百四万八千円（氷上郡和子牛セリ市）　（1・26）
○丹波十町の昭和六十三年産米　前年より七五六トンの増収　総収量は三万八五一トン　（2・5）
○米食、若年層ほど少ない　ごはんあと一杯食べよう運動展開　柏原農改が消費調査　（2・12）
○活性化、城下町ムード〝にぎわい〟と〝憩い〟の町へ　街路灯もレトロ調（柏原町商店会）　（2・12）

○「水と杜のさと」作り　氷上町二〇〇一年計画　情報交換の交流拠点も　基本構想素案案まとまる　（3・2）
○「貸農園」好評です！　一八〇区画のうち一七〇区画決定　春日町国領のホビーファーム　（3・5）
○丹波景観百選を選定　ウィーンの森親善訪問　森シンポや広報紙発行など多彩（丹波の森協会）　（3・19）
○五台山（市島町）へ作業道建設　観光遊歩道もかねる　（3・19）
○消費税導入へ秒読み〝満員盛況〟の説明会　依頼もひっきりなし（柏原税務署）　（3・26）
○柏原化成、呉羽プラスチックスと合併製造の合理化　再スタート　（3・30）
○灘生協の〝ふるさと村〟候補地に市島町与戸　（4・6）
○緑を背景に北欧風住宅　資材すべてデンマークから　山南町「谷川の郷」分譲地で建築　（4・9）
○製造工に千三百人不足　丹波・但馬の実情　労働力過不足調査　（4・13）
○NTT柏原着々とスリム化進行　職員数も大幅に減少　（4・16）
○柏原職安内に開所のUターンバンク早々と関心集める　（4・16）
○好景気を反映して工場進出や拡大が進む　市島町に大和特殊硝子決定　（4・16）
○わぁ、きれい！　氷上町西中から田中橋の加古川堤防添い一面に黄色い花　氷上町が独自で花の道づくり事業　（4・20）
○「いきいき塾」が門出　ユニトピアささ山内に高齢者の会社設立　松下電器労組と地元が共同出資　（4・27）
○都会の消費者に人気　注文に応じ〝宅配便〟で　氷上町農協が「緋嘉美米」をPR　（4・29）
○緑のログハウス　丹波木材協同組合が青垣の山すそ一万平方メートルにログキャビン村を建設　（4・30）
○春日町農協が合併推進委に参加　通常総代会で採択し一年ぶりで結論出す　（5・4）
○六十三年分丹波地区高額納税者は四十人　譲渡所得者が増加（柏原税務署管内）　（5・4）
○絶景に感動しきり！市島町美和地区の白豪寺五大山へ登山　（5・4）
○使途不明金はなかった　山南町農協総代会で花木代金などに質問　不正経理に結着　（5・11）
○柏原財務管内の自動車税は県税収入の十九％　丹波では一世帯に自動車一・三台　（5・18）
○野原のギャング（猪、サル、タヌキ）出没　大路地区で例年より一か月早い被害　農家は対策に大わらわ　（5・28）
○木工創作の拠点丹波年輪の里でログスクールを開校　（6・4）
○丹波地方の六十三年度観光客入り込み数過去最高の二八三万人　祭典関連でぐんと増加　（6・15）
○サル捕獲作戦を推進　西紀町で農作物

被害の増加に対応　（6・18）
○「さつき米」でPR　市島町農協が消費者志向に合わせ低農薬栽培のコシヒカリ　（6・25）
○氷上郡内六農協合併へ本格出動　（6・29）
○市島農協で馬齢署の出荷始まる　病気発生で減収か　（7・9）
○大学卒者らを地元に　Uターン希望者も歓迎　八月に柏原で求人企業合同説明会　（7・12）
○品質向上で名声を　スィートコーンと小豆輪作　春日町で生産者大会　（7・16）
○丹波の味届けます　丹南町で「ほんまもん会」設立　（7・20）
○無人ヘリで農薬撒布　氷上町で水稲の病害虫防除テスト　（8・3）
○丹波の全農協のタウン紙「たんばりん」好評　（9・3）
○氷上町で「やすら樹」休養施設、「ときめ樹」木工施設オープン　（9・10）
○春日観光農園に団体客どっと　連日の雨でキャンセルも　対応に大わらわ　（9・17）
○菌床シイタケ施設建設（柏原町農協）　（9・24）
○将来は大阪商圏に！高速道をめぐって春日・和田山商工青年部が交流　（9・28）
○中兵庫信用金庫が創立二十周年事業で柏原に研修会館起工　（10・1）
○観光開発拠点「八上ふるさと館」完成（篠山町）　（10・12）
○コメの不正流通防ごう　農協と行政が一体となり運動展開　（10・19）
○〝丹波の秋〟一堂に　丹南町で味覚まつり　（10・19）
○春日町黒井で量販店競争激化（10・29）
○平成元年丹波産米予想以上の減収　日照不足で品質もダウン　（11・30）
○山南町坂尻で新春の床の間を飾る「若松」の出荷始まる　（12・3）
○新酒の香り一ぱい　市島町の西山酒造清酒を一斉販売　（12・7）
○アマゴの住める清流実証　青垣町の加古川最上流の河川調査結果　（12・7）
○共存共栄で活性化！　春日町の大型店事前説明会開く　（12・14）
○丹波十町転作目標　来年度は二、九〇一ヘクタール　前年比一七一ヘクタールの増　（12・24）

社会・文化

○「昭和」から「平成」へ　平和と繁栄の期待こめ新しい時代の幕あけ　（1・12）
○悲惨！居直り強盗が刺殺　香港から観光ビザで入国した三人の中国人を逮捕（氷上町成松で）　（1・12）
○旧藩陣屋跡を応急整地（柏原町で）　（1・15）
○〝グルメ友の会〟を　丹南町の四季の森会館を有効活用へ　（1・15）
○氷上町の臼井邦昭さん　民家を描き特選に！全国郵政美術館で　（1・22）

○厄除け大祭準備始まる　参道の献燈など自粛　人出は例年以上の子想（柏原町）（1・26）
○どうなる「黒井」の駅名　春日局ブームで意向調査（春日町）（1・26）
○中学生の非行急増　めだつ単車の窃盗（篠山署）（1・26）
○大当たり！一等賞　柏原町の田原さんの書き残した年賀状（1・29）
○黒井駅改名は白紙に　現状維持が多数占める　ＪＲ福知山支社に春日町が報告（2・2）
○篠山の旧家から古文書　藩政の経済事情くっきり　信用経済の発達示す手形、米の入札方法や町銀組織（2・5）
○足痛や腰痛にきく　青垣町田井縄の北向き地蔵　評判が広がりおまいり（2・5）
○東京の大学進学者対象に尚志館入寮生募る（予定人員二十五人）（2・9）
○地域文化振興に〝活〟中信が二十周年記念事業として百万円限度に助成　市町公民館などの講演会など（2・12）
○子らに音楽のたのしさを　青垣町の父母ら少年少女合唱団結成へ　マラソン、絵画にまたひとつ（2・12）
○ふるさとで初のソプラノリサイタル　春日町文化ホールでオペラ歌手の足立さつきさん（2・16）
○篠山ＡＢＣマラソン　ゼッケンなど発送　宿泊者は千百人（2・26）
○〝ちょっといい旅〟（ＮＨＫテレビ）で氷上町を紹介　連日スタッフが収録（2・26）
○〝街づくり〟急ピッチ　住吉台に一四九世帯が入居　住宅の建築ラッシュ続く（丹南町）（3・5）
○乱立するパチンコ店　ファンには〝天国〟特に石生バイパス付近は全国五指の激戦地（3・5）
○山南町中央公民館のトレーニングセンターにピアノ配置　総合音楽会開催を準備　文化活動を盛んに（3・5）
○春日町野上野の稲荷神社で初午祭　ガン封じの笹酒など（3・9）
○〝昭和の大修理〟に着手　篠山町藤坂の国指定の妙見堂（室町初期）（3・12）
○篠山ＡＢＣマラソン丹波路に一万二千人　歓迎ムード一色に（3・16）
○加古川線にワンマン列車　近畿で初六月から谷川―野村間（3・23）
○足立さつきソプラノリサイタル　人気上々で満席に（春日町）（3・26）
○氷上町市辺の明光寺　本堂が立派に完成し落慶法要（4・2）
○一円玉不足にお手上げ　消費税導入で脚光　客に両替え求める銀行も（4・6）
○三十三年目の薬師御開扉　市島町寺内の清薗寺で稚児行列や練り込みも（4・6）
○五年目におはけ行事　江戸期から伝わる風習　市島町与戸の七つの伊勢講が一斉に（4・9）
○昨年度の消費相談　電話機、寝具が上

位に（丹波生活科学センターまとめ）（4・13）
○全国の木綿織りを一堂に　各地に呼びかけ青垣町で選抜展　東京でも開催（4・16）
○秘蔵の名品を特別展示　篠山町河原町の丹波古陶館が二十周年（4・20）
○戦国絵巻の春日局おふく行列！各町の物産展や芸能発表も　春日町が連休に豪華イベント（4・30）
○「薄明の世界」を描く　富岳の連作など二十五点　常岡さんセントラル絵画館で個展（4・23）
○春日町の春日局・おふくまつりに連休の人出一万二千人（5・11）
○竹小中同窓会の願い空しく西宮学園舎が姿消す　西宮市は整地保管へ（5・14）
○アパート建築ラッシュ　二年間に十七棟の申請　若い人が増え町の活性化に柏原町都市化に拍車（5・14）
○丹南町のドライブインシアター　アベックなどで満車　予想以上の人気に自信（5・25）
○春日町三井庄の深尾女史の生家跡を整備　地元民らも浄財拠出（5・21）
○事故多発で非常事態　死者昨年同期の二倍（5・28）
○市島町前山区で自慢の観光資源に　霊水〝狸穴の水〟でPR　五台山中腹から清水湧く（5・28）
○柏原八幡神社の三重塔が県指定文化財に　建立に関する日記も（6・1）
○カシの枝から古銭出る　青垣町の佐地神社拝殿改修で寛永通宝など（6・1）
○姫路城を築いた武将赤松則村とのつながり示す系図　春日町野瀬の赤松さん方で保存（6・8）
○平安時代の倉庫跡？柱穴が五十個見つかる　建物の解明に期待　氷上町西小ランチルーム新築で（6・11）
○秀忠（二代将軍）の乳母も丹波に住んでいたと郷土史家の細見末雄さん　氷上郡の地を領地に別所重治の息女〝刀歳〟（6・11）
○丹南町町之田で堅穴住居跡など出土発掘調査終る（6・15）
○古墳時代の住居跡出土　土器も多数貴重な資料　丹南町小枕で（6・22）
○大阪氷上郡友会が総会（6・22）
○川端謹次画伯（柏原出身）が画集発刊油絵など感動作品を百二十点（6・25）
○東京拠点に舞踊続け近く故郷で支部結成　柏原町出身の西崎祥さん（6・29）
○春日町で全国公募の水彩画展　テーマは「自然と文化」（7・2）
○パリで日本舞踊披露　藤原寿豊さんが日仏文化交流使節団で（7・2）
○氷上町長野で十八基の古墳を確認　木戸古墳の発掘調査　鉄刀や斧、勾玉など出土（7・16）
○丹波婦人団体連合会と釜山の婦人会が提携　丹波婦人の船が韓国を訪問（7・23）
○家族連れに人気呼ぶ　丹波年輪の里の「木のおもちゃまつり」（7・27）

○青垣町檜倉は知名度生かし霊園作る観光と墓参結んで人気上々　（7・30）
○夏まつり盛大に！
・鼓笛隊や演芸ショー（石生水分れまつり）
・ふるさとの文化財を住民に　だんじりも登上（柏原町下町の夏まつり）
・戦国太鼓競演も（市島川裾まつり）
○丹南町一印谷の「灰原（はいばら）」を発掘調査　奈良時代の窯跡近く　（8・10）
○氷上郡はワースト3　県下の死亡事故件数　（8・13）
○生活汚水の影響大　篠山保険所の水質検査の分析
○レーザー花火が見もの　伝統の造り物も　成松の愛宕まつり　（8・20）
○鎌倉期の立杭焼出土　今田町の井根口遺跡小野原庄の集落跡　（8・24）
○綱引き、花火大会（佐治川祭り）神池会館前では二十六夜祭（市島町鴨庄地区）　（8・24）
○地球を大切にしよう　宇宙と人間の歴史学ぶ　山南町で五十人が熱心に受講　（8・27）
○丹波の百歳老人九人　八十歳以上は四千九百六十二人、最高百三歳の中村たつさん　（8・31）
○春日町で百日文化祭　（9・3）
○山南町山本の県指定文化財の薬師堂室町時代の姿に復元　（9・7）
○兵庫・青垣もみじの里健康マラソン選手には松茸弁当も　（9・21）
○春日町で戦国動乱と黒井城の特別展　（9・21）
○再燃春日局フィーバー　春日町に八月末までに七万八千人　（9・21）
○丹波年輪の里でウッドクラフト展　全国から遊具や家具など九十七点　（9・28）
○柏原八幡神社例祭喪に服し神事だけみこし渡御は中止　（10・1）
○篠山の青山歴史村で「御朱印状」や古今集かるたを初公開　（10・5）
○県と姉妹提携のソ連ハバロフスク地方から「子供娯楽園」が丹波年輪の里に　友好二十年のシンボル　（10・8）
○山岡町谷川の秋祭り　〃豪華景品〃に大喜び　村おこしのもちまき　（10・12）
○グループでグリーンボール栽培　柏原町の若者楽しい農業体験　（10・15）
○ポプラの家の訓練生がシメジ栽培に励む　待望の収穫間近　（10・15）
○四十年ぶりで出雲神楽　春日町下三井庄の一の宮神社で　（10・19）
○日展に氷上郡から二人入選　書の足立健三さん（青垣町）彫塑で六回目の磯尾隆司さん（柏原町）　（11・2）
○秋晴れにヨイサ、オイサ　青垣町今出の熊野神社の裸祭り　（11・5）
○〃街づくり〃急ピッチ　丹南町の住吉台人口すでに八百八十人　（11・9）
○晩秋の青垣路に二千二十八人　兵庫青垣もみじの里健康マラソン　（11・9）
○ふるさとの秋を満喫　大阪郡友会の氷上町訪問ツアー　（11・9）
○カラオケハウス進出阻止　篠山町で署

名運動　（11・12）
○山南町川代渓谷で自然教室　（11・16）
○春日町で足立さつきさんを迎えて励ますつどい開く　（11・23）
○春日町の観光客十万人を突破、城崎、天の橋立結ぶコース、春日局フィーバー続く　（11・26）
○山南町南中の国道で四重衝突　事故検証中の警察官はねられて死亡　（12・3）
○修復の様子を一目で「篠山城絵図」一堂に　篠山歴史美術館で　（12・10）
○春日町の「百日文化祭」が閉幕　町民は延べ三万人　（12・14）
○丹南町大山上で奈良時代の窯跡など官営の工房跡か　（12・17）
○手作りのみそを独居老人に配分　市島町婦人会OB幸の会　（12・17）
○文化財のすべて網羅〝氷上郡の文化財〟発行　郡教委発足二十周年事業で　（12・24）
○飲酒運転取締る　柏原署　夜間検問を強化　（12・28）

○ぼくら・わたしたちの学校（小学校）
(1)崇広小学校　明朗活達な子供達
　誇りに思う長屋門　新設の体育館
(2)新井小学校　体験活動を大切に
　自慢のふえる学校に　全校で体力づくり
(3)小川小学校　子供の活動大切に
　元気よくあいさつを　全校で遊ぶ「遊びの店」
(4)久下小学校　一人一人を生かす
　人気あるボール運動　コンピューターを勉強
(5)三輪小学校　心の教育をめざして
　好評の独居老人訪問　クリーン作戦も展開
(6)鴨庄小学校　可能性の伸長を
　はだしで運動楽しむ　秋には焼きいも大会
(7)前山小学校　自然を学習の場に
　採集した植物を発表　学校自慢の朝の運動
(8)上久下小学校　思いやりある子に
　健やかにたくましくすばらしい環境で勉強
(9)船城小学校　ひとみ輝く子供を
　チャペル風の校舎　今年で最後の茶摘み
(10)和田小学校　心と体をきたえる
　野鳥のあつまる学校に　全校児童が一緒に給食
(11)春日部小学校　魂をゆさぶる教育
　週一回仲良しの時間　梨狩り園で袋かけ体験
(12)竹田小学校　教育目標と方針
　たて割り班で掃除　真新しい校舎で
(13)吉見小学校　たくましく豊かに
　自慢の金管バンド　古切手収集の活動も
(14)大路小学校　人間性豊かな子に
　木造校舎にぬくもり　高齢者と交流活動続ける
(15)進修小学校　先人の情熱脈々と
　寄付の遊具に大喜び　養護学校と一緒に行事

(16)中央小学校　同和教育草創の地
のびのびと学校生活　毎朝全校トレーニング
(17)東小学校　徳育の教育を重視
わが校の自慢は鼓笛　仲間外れのない学校に
(18)北小学校　心身ともに健康で
学年をこえて仲良く「きょうだい学年」編成
(19)西小学校　伝統を受け継いで
児童会活動を活発に　思い出深い〝西小祭り〟
(20)南小学校　〝知徳体〟の調和を
児童会で切手集める　老人ホームと交流も
(21)佐治小学校　同行の汗を方針に
校舎にエレベーター　児童会で「遊びの店」
(22)遠阪小学校　〝振気〟の育成を
「おへそ」運動を展開（「へ」＝返事、「そ」＝そろえる）竹馬など伝統行事
(23)芦田小学校　基本的生活習慣を
大きな声であいさつ　花いっぱい運動も展開
(24)神楽小学校　土を耕し、心を耕す
自分達で野菜を栽培　自慢の「神楽っ子農園」
(25)黒井小学校　お城とパソコン　歴史的環境に恵まれコンピューターで勉強

平成二年一月一日特集号

○'90年代の丹波　丹波の森構想を軸に広域交通網さらに充実
○期待の北近畿豊岡自動車道　新三田以北ＪＲ福知山線の複線化
○斎場問題の解決急務　都市化へ下水道敷設など　若者〝定住社会〟の構築へ
○衆院選本番迫る！兵庫五区二議席へ五氏の争い？　佐々木氏引退で様変わり注目の丹波の二新人　二月選挙へ各陣営の動き活発
○新年にあたって
国政とふるさと結ぶパイプ役に
谷　洋一氏（衆議院議員）
郷土発展のため尽力
足立良平氏（参議院議員）
次なる未来のために
中西一郎氏（参議院議員）
より美しい丹波を
梶原　清氏（参議院議員）
○現代を生きる心　三人の尼僧に聞く
おかげの心を大切に
和田賢龍住職（氷上町香良岩滝寺）
気持ちの広い人間に
景安良貢住職（市島町喜多徳本寺）
分相応に生きること　垂水知道住職
（市島町上鴨坂薬師寺）
○故郷への年賀状
世に必要な人が丹波の地から
木下忠夫（京都市）
情報伝達の進歩　大野善三（相模原市）
丹波の俳句の風土　丸山哲郎（宝塚市）
ふるさとの思い出
田中篤郎（東京都）
「一日一期」をキモに銘じ
小田富士夫（町田市）

平成元年11月25日

会　計　報　告　書

（昭和63年10月１日～平成元年９月30日）

関東氷上郷友会
会計理事・足立和巳

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
繰越金	370,913	現金47,926円　郵便貯金131,868円 振替貯金58,300円　普通預金132,819円	出版費	704,987	「山ざる」20号製作費及び発送費
年会費収入	257,000	納入者延173名	通信・印刷費	243,351	総会案内、役員会案内他
総会費収入	360,000	72名	総会費	499,860	
役員会費収入	123,000	延41名	長寿祝費	28,500	長寿者への記念品
編集会費収入	0		会議費	134,687	新春役員会及び編集反省役員会
寄付金	295,250	39名	慶弔費	0	
広告料収入	564,000	47名	支払手数料	9,038	送金並びに振替手数料
受取利息	3,126	預金利息	消耗品費他	31,225	丹波新聞年賀広告他
雑収入	0		繰越金	321,641	現金62,135円　郵便貯金86,750円 振替貯金39,640円　普通預金133,116円
合計	1,973,289		合計	1,973,289	

寄付者芳名録

◉岡田一雄殿　三〇〇〇〇円
◉梶原　清殿　二五〇〇〇円
◉谷垣正雄殿　二三〇〇〇円
◉片山日幹殿　二〇〇〇〇円
◉柏陵同窓会・吉見文憲殿　二〇〇〇〇円
◉兵庫県人会北村信次郎殿　二〇〇〇〇円
◉江間時彦殿　一六〇〇〇円
◉堀井隆川殿　一五〇〇〇円
◉谷　達雄殿　一〇〇〇〇円
◉氷上高校・柳田昌三殿　一〇〇〇〇円
◉氷上町長・小森建吉殿　一〇〇〇〇円
◉氷上町議長・山口茂殿　一〇〇〇〇円
◉千種倫幸殿　一〇〇〇〇円
◉柏原町長・安井幸太郎殿　一〇〇〇〇円
◉参議員・足立良平殿　一〇〇〇〇円
◉小谷正雄殿　一〇〇〇〇円
◉坂上五朗殿　八〇〇〇円
◉逸見あや子殿　七〇〇〇円
◉田中篤郎殿　七〇〇〇円
◉大野善三殿　六〇〇〇円
◉小口貢子殿　五〇〇〇円
◉植田憲雄殿　五〇〇〇円
◉上　高子殿　五〇〇〇円
◉近藤哲夫殿　五〇〇〇円
◉福島輝子殿　五〇〇〇円
◉直田　正殿　五〇〇〇円
◉井本義一殿　五〇〇〇円
◉山本清士殿　五〇〇〇円
◉片山邦夫殿　五〇〇〇円
◉菱田ふみ子殿　五〇〇〇円
◉足立昌彦殿　五〇〇〇円
◉野村醇殿　五〇〇〇円
◉坂本重雄殿　四〇〇〇円
◉永井　勇殿　三〇〇〇円
◉鈴木和栄殿　二〇〇〇円
◉正呂地群治殿　二〇〇〇円
◉安達健一郎殿　二〇〇〇円
◉横田公子殿　二〇〇〇円
◉西安二三夫殿　二〇〇〇円
◉横山幸三殿　二〇〇〇円
◉高桑良弥殿　一〇〇〇円

出　版

氷上郡教育委員会　編

『氷上郡の文化財』

「疾走激動の時代にあっても静かにふるさとを正しく見つめ、よき伝統文化に思いをよせ、ふるさとを再発見することが大切」とは村上彰教育長の発刊の辞です。

永年ふるさとを遠く離れて生活する私達にとって、祖先が残してくれた文化遺産を再認識する上で好個の書籍です。

B四判全三三〇頁には、有形文化財一七六点、無形文化財一一点、民俗文化財七点、記念物五八点がカラー写真も豊富に、詳細説明付きでギッシリと紹介されています。町別では、柏原二六、山南五六、氷上四九、青垣三六、市島二九、春日五六となっています。

建造物・古文書・彫刻・絵画・書・史蹟・石仏群…等々、その豊富さに感嘆せ

ざるをえません。心の糧ともなる「氷上郡の文化財」図録のご一読をおすすめします。定価五〇〇〇円。ご希望者は同教育委員会まで　（宮野）

展覧会

可部美智子さん陶彫展

○五月一四日～五月二四日
　日本陶彫会・銀座アートホール

○六月三〇日～七月六日
　陶光会全国陶芸展・東京都美術館

○八月一日～八月六日
　可部美智子作陶展・新宿小田急工芸サロン（ハルク）

☆

笹倉鉄平（靖幸）氏個展

○平成二年二月二七日～三月四日
　ロマン色の街角展・青山スパイラル＝スパイラル・ガーデン・ギャラリー
　毎日新聞カラー写真版「トマト」に連載された「ロマン色の街角」の原画展に新作も加えて展示され、好評を博した。

氷上ゴルフ会報告

　氷上ゴルフ同好会に登録された郷友は現在四十九名、年四回のコンペにいつも四～五組が集まり、日ごろの智と技を競います。「どうですか」「あきまへん」負けず嫌いの丹波気質、できすぎたスコアでもまだ不足、熱戦のあとのパーティは、大タタキ談議に花が咲き、子供のようにうちとけて、愉快なかぎりです。同郷のよしみもまた格別なものです。
　会費一回三〇〇〇円、年四回分前納の場合は一〇〇〇円、賞品とパーティ費に当てられます。プレー費は各自負担。どういうわけか名門コースが伝統になっていて、スコアはともかく、毎回なかなかの豪華コースが楽しめます。
　同好のご参加をお待ちしています。毎回開催日を通知いたしますので、ご希望の方は左記へご連絡ください。

横浜市西区岡野一―一三―一三
ミワ電気工事株式会社気付
氷上ゴルフ同好会事務局　足立謙悟
ＴＥＬ　〇四五―三一二―五二九一
ＦＡＸ　〇四五―三一二―五三一三

〈最近の成績〉

第三十六回　大秦野カントリークラブ
平成元年六月二十九日
優勝＝渡辺貴美子　二位＝早瀬徳郎
3位＝岡林逸男　ＢＢ＝川面進

第三十七回　千代田カントリークラブ
平成元年九月十二日
優勝＝上田脩　2位＝綾木健
3位＝岡林京子　ＢＢ＝岡林逸男

第三十八回　笠間東洋ゴルフクラブ
平成元年十一月二十八日
優勝＝岡林逸男　2位＝川畑明光
3位＝村上昇　ＢＢ＝藤田徹

第三十九回　平塚富士見カントリーＣ
平成二年三月二十八日
優勝＝岡林逸男　2位＝玉井五郎
3位＝佐々木宏　ＢＢ＝渡辺貴美子

氷上囲碁会報告

毎月第三土曜日の午後一時から、〝かすが〟ホールのB_1に於いて絶えることなく続けられていますが、参加者数は別表の通り凋落傾向にあります。囲碁趣味をお持ちのかた、月一回の土曜日の午後を、手談で楽しみ、頭の体操をして生き生きライフを実現しましょう。〝かすが〟ホールは春日建設の施設で、前会長伴仲信次氏（故人）のご好意で開放していただき、現在に至っております。

特別に案内は出していませんが、かならず第三土曜日には店開きをしていますので、強いかたも弱いかたもお気がねなくお出ましください。席料は千円です。

氷上囲碁会成績表　1・3～2・2

参加者	参加回数	勝	負
藤田	11	32	36
足立（源）	10	32	11
増田	10	29	33
上小沢	10	25	55
小日向	10	22	18
坂上（勝）	9	28	28
谷口	4	17	5
中井	1	1	0
坂上（豊）	1	1	1

会員消息

足立さつきさん（春日町黒井出身、ソプラノ歌手　写真）の後援会メンバー勢正彦さんから、彼女の郷里でのリサイタルや、ラジオでの対談を録音したテープが事務局宛に送られてきました。

そのなかから、対談の一部を要約して、足立さつきさんのアウトラインを紹介します。これは昨年三月にラジオ関西（本社神戸市）から放送されたものです。

☆

――けさは、ソプラノでは東京でどんどん売り出して、これからの本命やないかといわれている足立さつきさんに来てもらいました。……

あした春日町の文化ホールでリサイタルを……。

（足立）　はい、そうです。去年九月のこけらおとしのときにも、うたわせてもらったのですが、初めての本格的リサイタルということで、ぜひ生れ育った春日町でやりたいと思いまして。

――どうです。はずかしいことないですか。いっぱいおさななじみが来てますヤン。

（足立）　東京でうたうのとはまた違った緊張感があるんですよね。客席を見わたすと隣のおばさんとか、おさななじみとか、後輩とか知った顔があって、ほんとに緊張します。

――それだけはげみになりますね。さつきさんは本名ですか。

（足立）　はい、そうです。

――柏原高校から武蔵野音大、そこから大学院を卒業されて、すぐに椿姫コンクールで第一位。

（足立）　はい、三年前大学院を卒業した年の九月に、ニッカ椿姫新人賞というのがありまして……。

――それが第三回コンクール

（足立）　その審査員の中に恩師の大谷冽子先生がいらして、さつきちゃん、これ受けてみたらとおすすめいただいたのです。わたくしもちょうど学校を卒業したばかりで、将来どうしようかなと迷っていたときでしたから、受けてがんばってみようかなと……。

――大きな勲賞ですね、ところでウタのおけいこはいつごろから。

（足立）　小学校一年生のときからピアノをやっていました。母が小学校の教師でピアノがすきだったという関係もありまして。声楽のほうは本格的には高校一年生になってからで、ピアノの先生から声楽のほうに進んだらといわれて……。

――このままやっていてもムダやと……。

（足立）　その通りです。（笑）

――でレッスンはどんなふうに。

（足立）　小学生のころは、ピアノの先生が宝塚にいらしたので、毎週日曜日、黒井発六時二十分の各駅停車のジーゼル・カーで通いました。仁川に九時に着いて十一時までレッスンして、また帰るという生活でした。

――ごはんは？…

（足立）　食べて行きました。ネボケまなこで。

――そらお母ちゃんもたいへんやった。やめる気はなかったですか。

（足立）　わたしにとっては、ずいぶんつらいことでしたが、母から、いまやめたら絶対後悔するといわれて、続けました。ピアノの先生からも毎週しかられながらでしたが、まわりのひとたちにたすけられながらも、続けて来てよかったなと、いまになって思っています。声楽は先生が芦屋でしたので、土曜日の午後、高校の授業が終ってから通いました。

――そして武蔵野音大へイッパツ合格。

（足立）　はい、おかげさまで、どういうわけか……。

――そう才能があったからや。でもお母ちゃんもたいへんや（笑）。さァ、大学へ入ったら全国から多士済々、競争相手が集ってる。

（足立）　学生時代はすきな勉強して、とにかくがむしゃらにやっていました。な

にせほかが見えませんからね。
——いちばんいいときやった。
（足立）　そうですね。
——そして荒波にもまれるべく世間に出て来て椿姫コンクール一位。幸先よいスタートで、お母ちゃんへのなによりの恩返しや。オペラのほかにもテレビ・ドラマに出られたことがあるんですってね、俳優として。
（足立）　はずかしながら。これは脚本家の市川森一さんが、たまたまわたくしの初舞台をご覧になっていて、お声をかけていただいたのがご縁です。
——去年の東芝日曜劇場（TBS系）「冬の歌声」と書いて冬のアリア。共演は奥田瑛二さん。
（足立）　はい、とても緊張しましたが、よい勉強になりました。福岡のあるリゾートホテルで五日間ロケしたんです。
——初恋は
（足立）　小学校二年生ぐらいのとき。
——相手は。
（足立）　それは秘密です。
——あしたのリサイタルのご成功をおいのりしています。これからもますますご活躍を。

音無太美子さん（春日町）

私もこちら（黒井）へ来まして二年余経ち、様変りしました所のふるさとにも慣れ、楽しく暮しておりますので、左の私流の愚作にご推察下さいませ。

○夢に見しふるさとの暮しおだやかに
　二とせ過ぎぬ今日子に便りす
○四百メートルの山にいどみて頂上を
　極めたるわれも七十路とうげ
○丹波人と丹波に住める外人の
　シンポジュームに友と加わる
○終電でつゆの雨降る駅に降り
　外灯あわき田舎路帰る
○座敷にもえさ探しいる蟻のいて
　同居と笑う田舎に慣れし
○極楽の余り風ぞとわれに言い
　大き木蔭に涼む人あり
○伝統のふるさと踊りの輪に入り
　五十いくとせの昔に返る
○川裾祭りに流す灯ろう多き中
　自分のゆるゆると行くを見送る
○ゲートボールに誰かが芋を持ち来焼く
　焚火のまわりに身のぬくくいつ
　暮しのほんの一端でございます
○関東にありて山ざるみれば
　思い馳せてふるさと恋し

かりしはて当地にて拝見すれば、関東に住まわれる兄弟姉妹の皆様を懐しく親わしく、とんで行って氷上弁でしゃべりたい気分にさせられています。

編集委員の皆様のご苦労のおかげ、誠に感謝申しあげます。毎年のクラス会に出席のかなう古里住まいとなり、国領、黒井と春日局生誕の興禅寺の産湯の井戸等でカメラにおさまり、学生にかえった楽しいときをすごしました。柏原の老人大学に入り勉強しております。シルバー人材センターにも申込んで頑張っています。

坂本五朗氏（氷上町）

足立源治様の「方言一言」を読んでふる里を思い出し読みながら独りで笑ってしまいました。小生は十六歳で東京に住み、ふる里の言葉を喋べることはできませんが、ふる里の言葉は憶えています。過日も地方講演で（神戸、姫路）氷上町出身であることを話のネタにスタートしましたが、ある会社オーナーが氷上出身者はダメな人間と出世人間の両極端という話で笑いました。

小中克巳氏（市島町）

郷友の活躍ぶりが目の前に浮かびます。各自のご健闘をお祈りします。小生もお陰様で元気でいます。

余田士郎氏（市島町）

本日二十号を頂きました。五月十七日に六十歳停年を迎え小休止をしている所でしたので一気に読んでしまいました。ますますの御発展を心から願って居ります。総会は今年も参加したいと思っています。

伴仲和子さん

前略山ざる二十号ありがとうございました。早速伴仲の写真の前に供えました。旨様によろしくお伝えくださいませ。

久安敏夫氏（柏原町）

山ざる20号ありがたく拝受、大変興味深く拝見致しました。特に村上さんの春日の局の記事については感銘深く拝見致しました。

私昨年来健康を害し昨年の懇親会には出席出来ず誠に残念でした。有意義な記事を沢山拝見し編集の方々の労苦に深く感謝申し上げます。皆様の御健康を切に御祈り申し上げます。

上　高子さん（氷上町成松）

身の回りにあらゆる情報が氾濫していて、目を通さずにゴミ箱行きになることも多い中、今回初めてお送りいただいた〝山ざる〟はなつかしく、すみずみまで読ませていただきました。今まで関東氷上郷友会の存在も確かに知らず失礼いたしておりましたので10年間の会費を振込ませていただきます。

田中芳子さん（山南町　青森県在住）

会員各位の時代遍歴回顧記事を愛読して感激いたしております。皆様方の益々の御健勝と御活躍をお祈り申しあげます。

大野すず子さん（山南町）

山ざる誌をお送り頂き有難うございました。ふる里丹波は皆様のご尽力により大いに発展している御様子うれしく思います。故上田三四二氏深くお悼み申しあげます。三四二大人のお歌はやわらかで深く又温たかいお歌で好きでした。ふる里のお生れと聞き懐しく惜しきことです。春日局も春日町のお生れの由、ふる里に生れ十九年居りましたのに何も知らずに居たことを恥じて興味深くよませて頂きました。益々ふる里のご発展をお祈り申しあげます。

東田　実氏（山南町）

毎年常岡様の表紙画の「山ざる」お送り頂き有難うございます。一頁一頁を楽しく拝読させて頂いて居ります。毎年お

なつかしい人の御他界伺い淋しい限りです。私も頑張って健康ですごしたいと思っております。今後共よろしくお願い申しあげます。

鶴田　宏氏（柏原町）

「方言一言」毎回楽しく読みます。最初目読、だんだん音読、ついに声を立てて笑ってしまいます。光景がありありと浮んで私にとっては山ざる誌の中の最も楽しくおもしろい部分です。「ひっこめ」とゆいしまへんさかい「もっと続けとくんなはれ」

山本清士氏（春日町）

「山ざる」二〇号拝受いたしました。充実した内容で編集委員諸兄の御努力に心から敬意を表し、有難く厚く御礼申し上げます。

久保良雄氏（山南町）

素晴らしい会誌の一言に尽きます。表紙の格調の高さは類を見ないほどです。なるべく多くの人の原稿が載るとよいと思います。

植村章子さん（春日町）

いつ再発するかとビクビクしながらの毎日ですが、変った事なくその日その日を過しております。幻想的な表紙の立派な山ざるを届けて下さいまして有難うございます。充実した内容に編集の方々のご苦心を偲んでおります。有難うございました。会員皆様のご繁栄を祈ります。

上野重喜氏（氷上町）

平成元年11月25日の郷友会は盛会だったこと拝察いたします。私は、その3日前、11月22日にインドネシアへ赴任して参りましたため、出席できず誠に残念でした。ただ今、私はインドネシアのジャワ島の中央部の都ジョグジャカルタに滞在しています。仕事はＯＤＡ（政府開発援助）の一環でＪＩＣＡ（国際協力事業団）から派遣され当地のインドネシア国営放送の職員養成に当たるものです。

インドネシアは、東はイリアンジャヤ（ニューギニア）から西はスマトラに至る、1万以上の島からなる大国で、国土は日本の五・五倍、人口は一・五倍あります。それだけに、情報伝達が瞬時に可能な放送に力を入れているわけで放送マン養成に政府も懸命です。

仕事の話はさておき、インドネシアの生活もなかなか味わい深いものがあります。私の住むジョグジャカルタ市（特別区）は人口三〇〇万といわれますから、大都会なのですが、未だ高層建築はなく、人口は多いものの、緑豊かな文字通りの田園都市です。椰子の樹をはじめ、様々な樹木が街路に茂り、緑のトンネルを行く感じです。小川のせせらぎを見ていると幼い頃の丹波そのものです。夕方ともなると稲田を渡る風が心地よく、さらに昏くなると小川のほとりを蛍が飛び交います。

ジャワは火山の島でもあり、近くにムラピ山という山があり、まさに富士山そのものの姿、三〇〇〇m近い高山で聳えています。

ここは熱帯、常夏の国です。季節は雨

季と乾季しかなく、年中気温も変りません。10月～3月は雨季、とは言っても日本の梅雨のように、1日中降り続くことはなく、午後や夜間に、いわゆるスコールが滝の如く落ちてくるというわけです。

昼間は流石に暑く、太陽（マタハリ）が強烈に照りつけますが、夜は涼しく、ことに明け方は爽快です。現地の人たちは朝5時30分ごろには起き、家のまわりをきれいに掃き清め、仕事に出かけるようです。そのかわり午後に昼寝をするのが通常のようです。

食物は豊富、とくに果物は、マンゴー、ドリアン、パパイア……その他名をおぼえ切れぬほど溢れています。米も常食ですからほとんど食物に不自由はいたしません。ただ現地の人の好みに合わせると、唐辛子がききすぎていたり、甘過ぎたりいたします。

困るのは言葉、一部のインテリ以外は英語は通じません。ひどいことには、国際電話をかけるのに交換手が英語ができないということもしばしばです。インドネシア語を老化した頭をしぼっておぼえるよりしかたありません。人は「オラン」、御飯は「ナシ」、魚は「イカン」といった調子でインドネシア語の勉強中です。

インドネシアは産油国で、かなり裕福なはずですが、人口も多く、お金がすみずみまで行き届かぬようです。貧富の差が激しいのです。

今インドネシアでは、「おしん」ブームで、テレビで放送されている「おしん」の人気は大変なものですが、この国では「おしん」が現在生きているのです。私の家にも、運転手、メイド、ボーイと3人の使用人がいますが、今の日本ではとうてい考えられないことです。北側の人間の一人として南北問題をさまざまに考えさせられる毎日でもあります。ここは、太平洋戦争当時、3年半、日本が統活をしておりました。先日、博物館の守衛さんが突然話しかけてきて「私は、二六〇三年から五年まで日本軍に衛生兵として勤めた」といわれ面喰いました。つまり紀元二六〇三年と彼は言っているわけなのです。

とに角、いろいろ珍しい経験をさせて頂いております。

遠くブンガワンソロの国から、故国の皆様方の御健勝を心からお祈り申しあげます。

（NHK編成計画室在インドネシア・ジョグジャカルタ）

足立三男さん（青垣町）

会誌作成、行事企画等皆様のお力によっているばかりで申し訳なく思っています。でも故郷を思い出すのは、会誌が届いた時に特に強いものがあります。

訃報

菱田ふみ子殿　平成元年一月二七日

渡辺久子殿　平成元年八月

心からご冥福をお祈り申しあげます。

建築材料販売工事

建設大臣許可 第1834号

中央建材工業株式会社

常務取締役
東京支店長　**荻　野　　武**

（市島町出身）

本　　社　名古屋市千種区高見1－6－1
電話　052（761）6181（代表）

東京支店　東京都中央区銀座7－14－3
電話　03（543）8106（代表）

大阪営業所　大阪市西区江戸堀1－8－15
電話　06（443）6665

仙台出張所　仙台市青葉区高松2－11－15
電話　022（273）5724

札幌出張所　札幌市中央区南一条西7－12
電話　011（271）3961

新潟出張所　新潟市米山5－1－25
電話　0252（45）1705

松本出張所　松本市野溝木工1－6－58
電話　0263（25）0351

広島出張所　広島市西区中広町1－4－16
電話　082（291）3780

豊田出張所　愛知県西加茂郡三好町大字三始西田3－4
電話　05613（4）3121

能力とは知識を
行動に置き換えること

≪ヒュウマンアドバンス　コンサルタント≫

人生を楽しくするために

人材育成研究所

安田火災海上保険株式会社　講　　師
全国自動車保険整備工場協会　講　　師
日動火災海上保険株式会社　講　　師
学校法人　ホンダ学園　非常勤講師
労働基準管理協会　会員　労務管理士

所　長　坂　上　五　朗

（氷上町下新庄出身）

〒349-01　埼玉県蓮田市西新宿２丁目32番21

TEL　０４８－７６９－６８８５

日刊自動車新聞

坂上五朗氏を講師に

AIR静岡支部　経営セミナーを開催

【静岡】AIR静岡支部は「工場経営と計数管理」と題するこの日、静岡玉姫殿で、人材育成研究所所長の坂上五朗氏を講師に「これからの整備工場の経営」と題するセミナーを開催した＝写真

ミニサロン

いま最も重要な問題は雇用問題

人材育成研究所
坂上五朗所長

「住宅柄、全国の整備工場のトップの皆さんと接する機会がおいのですが、現在、最も重大な問題となっているのは、やはり人が集まらないという雇用問題の」。転廃業する整備工場の第一の原因も後継者問題と聞いています。今後、業界あげて人材確保に取り組む必要があると思います」と、整備業界が抱える難問を指摘するのは、人材育成研究所長として全国を歩いている坂上五朗氏＝写真。さきごろ、AIR三重支部が開いた講演会でも、人材確保の重要性を力説していた。〝待ち〟の経営姿勢から、攻撃する姿勢への転換が叫ばれて久しい整備業界だが、とにかく行動することが急務と熱っぽく語っていた。

佐　々　木　盛　雄

〒161　東京都新宿区中井　2－11-18

同好会：日本のおどり　端唄と三味線

土曜日　午後１時～５時
老若男女　初心者　歓迎

指導　西　崎　　祥　(柏原町出身)

〒141 東京都品川区西五反田8-10-14-201　電話(03) 491-8962

社会福祉法人
調布市社会福祉協議会

理事　木村つた江

東京都調布市東つつじヶ丘2—39—5
電話（03）300－6895

株式会社　**近藤写真製版所**

取締役社長　近藤勇夫（国領出身）

東京都新宿区下宮比町2番17号　電話 03-260-6281（代表）
FAX 03-260-6527

南海工業株式会社

社長　石亀　義明

（旧姓足立 青垣町佐治出身）

本　　社：東大阪市大蓮東２－12－４
ＪＩＳ工場：電話　06(721)5454／5455
柏原工場：氷上郡柏原町挙田小字浅川160-1
電話　07957（２）3744

消費税・法人税・所得税・相続税・贈与税
の相談・代理申告

船越税理士事務所

税理士　船越祥郎

（春日町多田出身）

〒196 東京都昭島市郷地町２－17－９　電話(0425)44－5997

高級婦人服製造卸

つるや産業株式会社

代表取締役会長　足　立　三　治

東京店　品川区西五反田7—22—17
東京卸売センター12階
電　話　(03) 494—3285～7

本　社　川崎市中原区新丸子701
電　話　(044) 722—6371(代表)
会長室直通　711—3324

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます

電気主任技術者第一種免状　第2-319号
技術士(電気部門)登録証　第15810号
エネルギー管理士(電気)免状　第2857号
エネルギー管理士(熱)免状　第5191号

若森技術士事務所

所長　若　森　敏　郎

〒302　茨城県取手市白山5—4—13
TEL　0297(72)0907

大菱印刷有限会社

田中　寛　（山南町出身）

〒110 東京都台東区台東1－27－5　大塚ビル

☎03－833－1595

激動の時代と共に綴るあなたの昭和史

記入式・自分史年表 昭和メモリー

■B5判 192頁／定価 2,000円・送料無料

〔大船調映画〕の盛衰を描くドキュメント

撮影所のある街 大船物語

升本喜年 著 ■四六判 242頁／定価 1,500円・送料無料

株式会社 ホンゴー出版　東京都中央区日本橋茅場町3-3-4 坪井ビル

〒103　☎03(666)1922(代表)

代表取締役　池田　忍

郵便振替　東京 3-144071

株式会社 **三　葉　水　道**

代表取締役　橋　爪　　忠

（氷上町黒田出身）

〒276　　千葉県八千代市八千代台西 7—5—29

電話　0474—84—7121番　FAX 0474-82-9626番

門と**塀**と**庭**　ブロック　門扉　車庫

プレハブ　サンルーム　ベランダ　温室

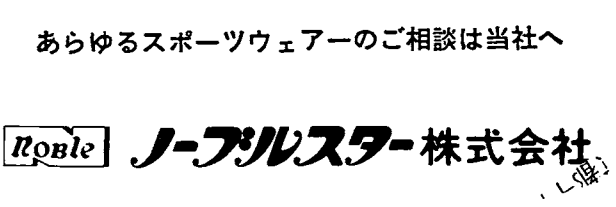
株式会社　**大**ダイ　**樹**キ

代表取締役　岡　　吉　明

（柏原町出身）

〒351　和光市南1-11-40　電話（0484）63-4420（代表）

あらゆるスポーツウェアーのご相談は当社へ



取締役会長　吉　住　重　造　(春日町中山出身)

〒101 東京都千代田区東神田2-4-7　電話(03)866-9121(代)

丹波茶・宇治茶の御進物 御贈答に 明日香園の健康銘茶を!

《明日香園のオリジナルブランド》 ウーロン茶の缶ドリンクが
ただいま大好評です。各種御注文は本社工場にて直接承ります

創業明治四年 伝 統 銘 茶

株式会社 明日香園

代表取締役社長　池畑豪士郎

本社：東京都千代田区九段北2－3－2 電話(03)265-2579
本社工場（御注文承り先） 兵庫県氷上郡柏原町南多田3146
電話 (0795) 72-3588 **フリーダイヤル0120-180127**
直販店：西武百貨店池袋本店B 1 電話981-0111(内線)2044

秋元多美子

住所　東京都江東区猿江一―十―二
電話　（〇三）六三一―一五七五

東急建設株式会社
専務取締役　芦田重秋

〒150　東京都渋谷区渋谷一丁目十六番十四号
渋谷地下鉄ビル内
電話東京〇三（四〇六）五一一一（大代表）

足立かをる

〒232　横浜市南区大岡四―十九　上大岡ハイツA414
電話　〇四五―七一五―五三八七番

足立和巳

自宅　府中市栄町一―一五―二七
電話（〇四二三）六四―七二二七

足立勲平

〒251　藤沢市鵠沼藤ヶ谷一―七―四
電話　〇四六六（二七）二六四六
（二二）六四六一

足立源治

交通毎日新聞編集局
次長　足立静雄
東京交通毎日新聞社
東京都港区赤坂二ノ四ノ一（白亜ビル）
電話　六四二―三四一四番　〒107

安達陽一
〒340　草加市八幡町一二八五―五

日本損害保険協会
特級（一般）資格　第特一三五八六号
飯田保険事務所
飯田光雄
自宅　四街道市旭ケ丘三―九―二
〒284　電話〇四三四（三二）二二八〇

上山顯
〒106　東京都港区元麻布二ノ一一ノ三六ノ五〇三

日本製薬団体連合会
理事長　江間時彦
103　東京都中央区日本橋本町二の一の五（薬業会館）
電話　（〇三）二七〇〇五八一番（代表）
〇五八三番（直通）

日製産業株式会社
取締役会長　大木正徳
〒105　東京都港区西新橋一丁目四ノ一四
電話（〇三）五〇四―七一一一番

大野善三

自宅 〒228 相模原市相模台七―二五―八
（〇四二―七―四六―八七九〇）

（株）パンオーディオシステム
代表取締役 岡林逸男
〒330 大宮市盆栽町五一四（押田ビル）
TEL（〇四八）六六五―三六九四（代表）
FAX（〇四八）六六六―四一二七

小田富士夫

木呂子恵美子

小糸イキ

坂上勝朗

静岡大学教授

坂本重雄

自宅〒422 静岡市小鹿三丁目四—五
公務員住宅八—二六
電話 〇五四二（八二）八〇五八番

笹倉強

〒352 新座市栄四ノ五ノ二五
〇四八四—七七—五六四〇

須原清

〒164 東京都中野区南台五の三〇の六
電話（〇三）三八一—一六二一番

勢川武彦

〒164 東京都中野区東中野二ノ一七ノ二〇
電話（〇三）三六一—八六七六番

正呂地群治

〒105 東京都港区芝大門二—六—十二
電話（〇三）四三一—二六五三

高見産婦人科

医学博士 高見嘉都司

東京都板橋区熊野町四〇番地
電話（九五六）〇六〇〇番

谷垣正雄

東京都杉並区高井戸西一―二四―一七
電話（三三一）一〇七六番

都市生活への新しい提案
株式会社　江南シードコーポレーション

取締役社長
千種倫幸

〒106　東京都港区東麻布一―七―三
電話　（〇三）五五六一―〇三八八（代表）

常岡幹彦

鶴田宏

参議院議員

田　英夫

波多洋三

〒112 文京区春日二―一七―二
電話（〇三）八一一―二八六〇番

藤田正雄

宗教法人 青葉山 真照寺
八王子 青葉霊苑 管理
（都営八王子霊園となり新規墓地分譲案内中）

住職 堀井隆川

〒193 東京都八王子市元八王子町三―二三九七
電話（〇四二六）六三―八四〇三

エクステリア専門商社
株式会社 大洋
取締役社長 松下文雄

本社 〒351 埼玉県朝霞市膝折三―七―五
電話（〇四八四）六六―一五五一（代）

瑞豊産業株式会社
代表取締役社長 水船隆昌

〒102 東京都千代田区六番町六
勝永六番町ビル3F
電話（〇三）二二二―一七三五

宮野　近

ウェディングドレス専門創作卸
（株）シャルム商会
常務取締役
東京店店長　村上　昇
東京店　〒164 東京都中野区弥生三ノ五ノ三
電話（〇三）三七四―〇二一一五（代）
本社　〒604 京都市中京区間之町通竹屋町上ル大津町六四五
電話（〇七五）二二一―〇二一一五（代）

村上久夫
〒168 東京都杉並区高井戸東三―四―十二
電話（〇三）三三二―七一三四番

株式会社リニュアル
ニューリクリンシステム室
室長　村上善英
〒150 東京都渋谷区道玄坂一―十八―八―九〇三
電話（〇三）四六二―一三三〇（代表）

安原三智子

渡邊隆男

中国万照

全六冊

中国旅行案内の決定版。

三千枚のカラー写真で見る中国の素顔

二玄社編集部編

新書判変型・各二〇八頁・簡装カバー掛け
定価＝①一〇〇〇円②～⑥各一六〇〇円

日本文明の故郷、かつてシルクロードを経て日本にもたらされた世界文明への窓口、中国。悠久の歴史とロマンを語る文化遺産の数々。日本の26倍をこえる広大な大地に住む10億の人々の生活。5年にわたる取材行脚、10万枚のカラースライドから選び編まれた、万照・中国旅情。中国の22省、5自治区、3特別市を、五つのブロックに分け、カラー写真と解説で紹介する詩情あふれる中国旅行案内。

①トラベルガイド

②東北・華北＝北京市・天津市・河北省・遼寧省・吉林省・黒竜江省・内蒙古自治区・山西省

③華東1＝上海市・江蘇省・浙江省

④華東2＝山東省・安徽省・江西省・福建省

⑤中南＝河南省・湖北省・湖南省・広西壮族自治区・広東省・海南省・香港・澳門

⑥西南・西北＝陝西省・寧夏回族自治区・甘粛省・青海省・新疆維吾爾自治区・四川省・雲南省・貴州省・西蔵自治区

準標硬筆字典

石川芳雲編

▼B6判・函入・三一〇頁・一、五〇〇円（税込）

準標篆刻篆書字典　牛窪梧十編　A5判・三一二頁　二、八八四円（税込）

新書道字典　藤原鶴来編　B6判・函入・二六八頁　一、五〇〇円（税込）

名跡六体大字典 書源　藤原鶴来編　27×19cm・一、六七〇頁　一八、五四〇円（税込）

王羲之書法字典　杭迫柏樹編　A5判・七〇〇頁　五、六六五円（税込）

王鐸字典　伊藤松涛編　A5判・八一二頁　五、六六五円（税込）

呉昌碩書法字典　松清秀仙編　A5判・七一二頁　五、三五六円（税込）

和様字典　北川博邦編　B6判・六一六頁　二、八八四円（税込）

二玄社版 日本書道辞典　小松茂美編　A5判・五九二頁　四、九四四円（税込）

禅林語句鈔　碧庵周道編　新書判・四〇〇頁　一、五四五円（税込）

二玄社　東京都千代田区神田神保町2－2
☎03-263-6051／振替東京4-28782

含笑花の木（がんしょうかのき）

陳舜臣著　一、八〇〇円

文壇随一の中国通作家の近十年間に発表した随想から珠玉の49篇。中国・日本の文化・風土・人物などを縦横に語る。

◉雲外の峰　陳舜臣著　一、七五一円

一勺の水［華夷跋渉録］

稲畑耕一郎著　一、八五四円

中国文学の俊英が瑞々しい筆致で綴るエッセイ21篇。中国の地で暮らし、中国の地を旅し、書物の森を彷徨する日々のうちに汲んで帰った清冽な〝一勺の水〟。

書を語る　1・2・3

二玄社編集部編　各八七六円

高村光太郎・川端康成・中川一政・棟方志功…。各界を代表する文化人一〇〇余氏が書についての自らの思いを軽妙な筆致で綴った珠玉のエッセイ集。

遺老が語る　故宮博物院

荘厳著・筒井茂徳・松村茂樹訳　二、二六六円

中国美術の大殿堂・故宮博物院。その成立から、故宮文物の南遷、台湾移送まで、故宮と歩みを共にした著者が、歴史的秘話を織りまぜて語る故宮物語。

書を志す人へ　I・II

今井凌雪著　各一、五四五円

書とは何か、どう学ぶか。現代書が抱える諸問題に最も真摯にとり取んできた現書壇の俊英が、後学のために折々にものした論考から五十篇を選収した。

書の旅（在庫僅少）

宇野雪村著　二、八八四円

中国書道に深い造詣を有し、碑碣法帖に通暁する著者の、訪中記を中心とする珠玉の書道紀行。中国各地の書道史蹟を訪ね、古典との出会いを語る。

書苑彷徨　第一集　第二集

杉村邦彦著　第一集＝一、八五四円　第二集＝二、〇六〇円

『書論』誌主幹、気鋭の学究が芳醇な文章で綴る珠玉の随想集。第一集は「文字造形に現われた時代性」等44篇。第二集は「王羲之の生涯と書」等18篇。

書の周辺　全五冊

福本雅一著

卓抜な学識と広大な視野。学問の香り高い論考集。▼①頽筆集…二、〇六〇円／②瘦墨集…二、二六六円／③断硯集…二、二六六円／④零箋集…二、五七五円／⑤錯簡集…二、〇六〇円

江南遊［中国文人風土記］

青山杉雨著　三、二九六円

江南地方――楊子江下流域は、古来多くの文人墨客を輩出した。著者の度重なる江南への旅を愛惜をこめて綴った清冽なエッセイ集。写真五百数十葉収録。

二玄社　東京都千代田区神田神保町2－42　電話(03)263-6051　振替東京4-28782

内容見本呈

台北 故宮博物院

中国書画名宝展

中国美術の一大殿堂、台北故宮博物院。歴代王朝より継承された厖大な美術品の中でも、台北故宮博物院は、とりわけ書画の名品をあまねく収めることは周知の通りです。

東洋美術書の専門出版社・二玄社では、台北故宮博物院の特別の委嘱を受けて、十数年来、故宮秘蔵の名画・法書の大規模な複製事業に取り組んで参りました。そして、最新技術の粋を尽した精巧な複製三〇〇余点を完成させました。

ここに数百年～一千年の歳月を経て甦った中国書画の名蹟三〇〇余点を、一挙に展観する大展示会が全国的に実施されております。当展の全国巡回は昭和六十二年春より開始されましたが、各地とも新聞・テレビで報道されるなどして話題を呼び、どの会場も多数の愛好者で賑わい、その反響の大きさには驚くべきものがあります。

二玄社 101 東京神田神保町 2-2 電話03—263—6051(代表)

CG CAR GRAPHIC

妥協を排し、私たちが気のすむように作る、それがCAR GRAPHICです。だから、どうしても大きく、重くなってしまいます。まるで"月刊の単行本"みたいですが、創刊の精神を受けつぎながら、本当のクルマにこだわって掘り下げ続けた結果、こうなったのです。歴史の重みと熱い情熱を、手に取って感じてください。

CG MILEAGE MARATHON

ジャーナリズムには重い社会的責任があります。省資源もそのひとつです。そこでCGは、クルマの燃費をどこまで追求できるかを競う「マイレッジ・マラソン」を主催しています。1リッターのガソリンで1000km以上の記録も出ました。報道と評論だけでなく、建設的な提言にも労を惜しまないCGならではの事業です。

CG TV

情報は印刷されたものだけではありません。早くから電波の威力に注目していたCGは、5年前、独自のテレビ番組の制作に進出しました。毎週1回、30分、今では全国ほとんどの地域で放映されている「CG TV」です。当然、映像が動きます。サウンドも臨場感にあふれています。しかもその場限りでなく、録画して保存に値する、いわば「動くCG」です。

CG FM78

TVだけではありません。1989年の秋から、「Car Graphic on the Bay Street」と題して、FM放送も始まりました。今はまだ首都圏の78MHzだけですが、やがて全国ネットをめざしています。毎週1回、1時間、クルマのトークと洒落た音楽で構成しています。クルマに乗りながら、耳で聴く自動車雑誌です。

CG VIDEO

CGのオリジナル・ビデオソフトは、本当の高級品です。他では不可能なフェラーリの工場にも出かけました。たとえばF40、こんなに詳しく見られるソフトは、日本はもちろん、世界でも例がありません。これからどこまで充実して行くか、私たち自身も楽しみなメディアなのです。

SUPER CG

CG CLUB

熱心な読者の集まりでもあるCG CLUBでは、創刊号以来のCG記事すべてが検索/プリントできる、電子ファイル・システムを完備、「あの時のあの記事が読みたい」、という会員の要望に応えています。これがCGコピーサービスです。そのほか毎月ニューズレターを発行し、海外ツアーなどのイベントも実施して、会員相互の親睦を図っています。パソコン通信CG CLUBプライベート・フォーラムもスタートしました。

NAVI

NAVIは 創刊以来、
一貫してクルマを機軸に、現代日本と現代世界の"実相"を切り取ることを使命としてきました。クルマのデザインから記号学まで、また交通行政から経済摩擦、先端技術からマーケティングまで、クルマを使った世界遊覧の旅からモータースポーツまで、ミラからフェラーリ・テスタロッサまで、そして文学から硬派報道まで、丁寧で質の高いテキストとビジュアルを生命に、NAVIはクルマを脱領域化させ続ける自動車専門誌なのです。

発行人――――渡邊隆男

101 東京神田神保町2-2 二玄社 電話03―263―6051(代表)

編記 集後

☆だいぶ蕾がふくらんできたなぁ、と思ったら、花の方でさっさと咲いてしまった。まるで散り急いでいるようだ。今年は例年よりも開花が十日も早かったそうな。それに、チラホラから満開まで普通七日か八日はかかるところを、今年はわずか四日で満開になって、花見客の予定を狂わせたそうな。花は高いところから国の内外の慌ただしい動きを眺めているうち、ついつい自分もつられたのではなかろうか。

☆国内では円安、株安、債券安、と三拍子揃い踏み、対外的には年中、経済摩擦を引きずって、いっこうにものごとがはかどらない。そんなこんなをいちばん治めてくださるはずの永田町の先生方は、廊の手練手管よろしく、嘘と嘘とのやりとりに明け暮れていらっしゃる。

☆外つ国はいかにと見れば、ソ連のゴルビーさんを筆頭に、その傘下の国ぐには「共産主義よさようなら、自由主義よこんにちわ」をバタバタッとやってのけ、バラ色のパラダイスを心に描いて夢心地でもあろうか。何とも忙がしい世の中。

☆それにつけても、内外の激しい流れに押し流されることなく、変ることなき真実を見つめて、歴史の教訓を読みとりたいと思います。わが丹波人士はもう少し悠然と歩みたいものです。

☆いつものように常岡画伯の美しい絵で山ざる誌はページを繰る前にピッカピカです。やさしい氷上の田園風景を見ていると、どこからかのどかな田植うたが聞こえてくるようです。画伯に心からお礼を申しあげる次第です。

☆丹波新聞の小田社長の好意で、「氷上政記」が掲載できました。読んでみて、氷上郡がいかに雄郡であったか、この風土がいかにすぐれた人材を育てたかを知って、丹波人たる誇りを感じました。

☆毎度のことですが、重厚長大、軽薄短小、いずれも結構、あなたの寄稿をお待ちしています。難しい論文は本誌にはなじみませんが、身辺雑記、青春日記など、丹波の山河を思い浮かべるとき、みなさんの胸中を、甘い、酸っぱい感懐がよぎるにちがいありません。それを書いて編集部へ送ってください。

☆郷友会のみなさまのご健勝、ご発展をお祈りします。

（源）

山ざる　第21号

平成二年五月三十日発行

〈編集委員〉　足立源治　小田富士夫
足立和巳　大野善三　坂上勝朗
田中篤郎　田中　寛　常岡幹彦
鶴田ゆき子　宮野　近　渡辺隆男

発行者　関東氷上郷友会会長・村上末吉
〒102　東京都千代田区神田小川町1ノ11
DMSビル内・関東氷上郷友会・事務局
☎〇三（二九三）二九五五
振替・東京一―一二三一三〇
製作　株式会社二玄社

DAIWA JITSUGYO GROUP

楽しさのバリエーション
多彩で華麗なナイトステージ。

エスカイヤクラブを頂点に、銀座をはじめ札幌から
鹿児島まで全国180店舗を誇る
多彩なフロアバリエーション。
独自のシステムで
鮮やかなナイトライフを描く
大和実業グループ。

esquire club
日本で育まれた
会員制クラブの名門
エスカイヤクラブ

洗練された大人のためのプレイゾーン
- クラブV・O
- V・Oキューティ
- V・Oローズルーム
- セブンティクラブ
- 舞 妓
- ザ・トップクラブ
- ザ・トップクラブ ミュージックサルーン
- ザ・セラーズ
- すすめの学校
- めだかの学校

RADIO CITY
レーザーが彩るファッショナブル
スーパーディスコ ラジオシティ

やぐら亭
いけす活魚料理の本格味処。
やぐら亭

やぐら寿司
江戸前のイキの良さ一。
ネタ自慢の味わい処。
やぐら寿司

the Royal
心あたたまるバニーのサービス、
くつろぎのフロア。
ザ・ロイヤル

THE WINE BAR
ワインをもっと自由に気軽に。
ちょっぴり気の利いた飲み方で。
ザ・ワインバー

ふぁ〜むず
楽しさいっぱいつめこんだ
西洋居酒屋。
やぐらふぁ〜むず

檜茶屋
都会の中のふるさと気分、若者のお憩い広場。
檜茶屋

くしっこ
モダンに飲んで、モダンに食べる。
ライト感覚串バー。
くしっこ

298
ライト＆カジュアルライクな焼肉ハウス
焼肉ハウス298

Gals
おしゃれなヤンクの小粋なたまり場
ワンダーバー・ギャルス

JEFFERSON CLUB
アメリカンカジュアルレストラン＆バー。
ジェファーソンクラブ

JEFFERSON
気軽に飲んで、楽しく食べる。
カジュアルバー。
ジェファーソン

Puff
モダンでおしゃれなショットバー。
カフェパフ

5/6
ニューカルチャー派の
ファンタスティックカフェ・バー。
カフェ5/6

PUKA PUKA
南国ムードたっぷり
トロピカルバー＆レストラン
プカプカ

SUNTORY JIGGER BAR
ウイスキーがウイスキーらしく
うまく飲れる本格派バー。
サントリージガーバー

ESPRIT
ウィスキーがウィスキーらしく
うまいワンショット・バー。
エスプリ

PREGO
最高の料理を最高の空間で。
本格派ダイニングバー。
ゲストハウスプレゴ

A·X·I·M
いいオトナのための
新・飲空間。
ダイニング・バーアクシム

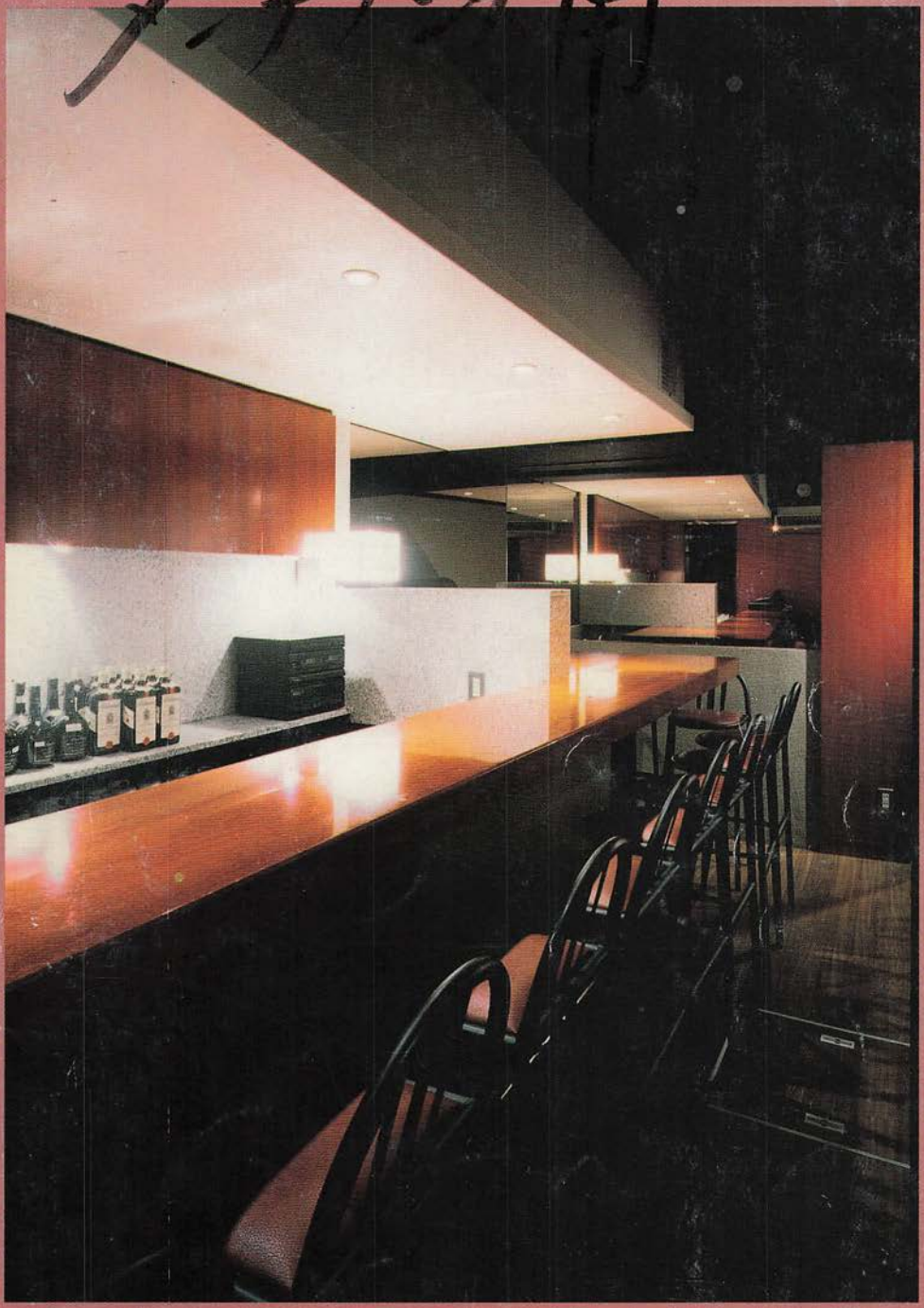
白・札・屋
新しくてなつかしい
西洋酒場。
白札屋

醍醐
旬の味わいを、
心地良い和の風情の中で。
酒膳 醍醐

パレット
おしゃれで愉快な、
フードアンドビバレッジ。
パレット

大和実業株式会社 代表取締役社長 岡田一男

本社：大阪市北区芝田2丁目1-18 西阪急ビル10F TEL.06(372)8571



設計・施工　桂建築計画工房